



目次

文書 0	
多香鳥幸譚、附眞夜羽王轉生一具	3
文書 1	
文書 1	7
文書 2- 前半	
文書 2 (前半)	37
文書 2- 後半	
文書 2 (後半)	71
文書 3	
文書 3	97
奥書	98

文書 0

多香鳥幸譚、附眞夜羽王轉生一具

香香美（Kagami 姓）清雅（Kiyomasa 名）氏最後の文書（一説遺書）以下の如し
阿土紗爲能波那會能志須久志智琉乎曾乎志伊陀美伎與母志波天爾伎夜宇爲爲爲やは乎
乎斗伎波都留阿彌邇阿那邇彌伊多和志那波那志知留乎彌乎乎乎乎彌阿母志知留乎彌乎乎
乎乎彌伊多和志那乎乎彌伊多和志那乎乎彌爲彌綺夜宇

文書 1

文書 1

私記。

名前、眉村眞夜羽。読みはマヨワ（山羽香奈枝云、名前を書かせた時ひら假名でマヨムラマヨハと書いた、と）。生年月日 2013 年 6 月 20 日。出生地、広島県。宮島（厳島）。両親土産物屋経営（兼観光案内）。

家族構成は以下。

祖父、眉村眞砂。名前の読みはマサゴ。（没）

祖母、笹村一重。名前の読みはヒトエ。E 音平仮名系字をあてる。旧姓眞鍋。笹村姓の由来は現在未詳（要調査）。

父、眉村和哉。（没）

母、眉村深雪。（入院、祇樹古藤記念園（在厳島、精神病院？ 佛教系？ 施設）和哉刺殺事件後）

眞夜羽は一人息子。

2019 年 8 月末。久村優斗から Line でメッセージがあった。曰く

優、生まれ変わりって信じたりする人だったっけ？

私、全く

優、俺も

私、どうしたの？

優、なんか、生まれ変わったっていう子どもとあったりして

ほんとおぼいんだよ

私、なにそれ？

優、基本、信じないんだけど

わかわないけど、これはなんか、信じないまでも、本当に起こってることだぜって思った

私、意味不明

優、興味ある？

誤字等儘。

後、久村が事の次第をまとめたレポートを送信してくれた。（久村は大学時代の同級生。現、戦記物文学の研究者。國文。帝京大助教授。72 年生？ 二歳上。昔、二度留年した云々と）受信日時は 11 月 12 日 20 時 15 分（日本時間の 22 時同日同分）

此のレポート以下の如。

○久村文書 A

2019 年 8 月、厳島神社の神主佐伯騰毗を訪問する。理由は平家物語長門本系統の異本が

見つかったということなので。後年の偽作らしく意図不明の修正甚だし。希少本というよりは異端本。例えば安徳天皇は死ななかつたらしい。そもそも拾われ子だったと。しかも角有り。鹿の片角。地域神話？ 保存状態劣悪。欠落多。意味不明の借字また万葉仮名？ 散見。

佐伯騰毗曰く、平田篤胤はご存じか？ と。答え、知ってますよ。ここに篤胤の稀覯本もあるんですか？ 騰毗問、ありません。ただ、あのひと、靈界研究とかもやってたんでしょう？ 答え、そうでしたっけ？ 騰毗、らしいですね。靈界、轉生、仙人、妖怪...とか。私、おもしろいですね。さすが國學系には精通してられて。騰毗、いや、岩波文庫。笑う。佐伯騰毗曰く地元で誰その生まれ變わりを自稱する子供がいるのだと。その子曰く岡山の誰その子供の生まれ變わりだと。その誰それを調べたら實在したと。どうも本等らしいと噂である云々、と。

問う、どうやって調べたんですか？ 答え、今時簡単。インターネットで名前を検索したらしいですよ。そうしたらフェイスブックが出て来た。ツイッターとか。

佐伯曰く、心靈関係の人たちはあやしいから。だから國文の先生だったら實証的になんとかつじつまあわせてくれるんじゃないかと思って云々

佐伯曰く、興味ありませんか？

私、かならずしもないですね

佐伯曰く、一回、逢ってくださいばいい（おうてくださりやええんじゃけえどね...）

私、どうして？

佐伯答えず。故、問う。あなた、信じてるんですか？

佐伯答えず。故、問う。なぜ？ なぜ信じるんですか？（なぜ、信じてるのに信じてないフリをしようとしているんですか？ と。云おうとしたが謂わなかった。）

佐伯答えず。故、「逢ってもいいですよ。」云った後で、瞬間、深刻に後悔した。理由は判らない。すくなくとも時間は削られる。

佐伯無言。ややあって後、じゃ、連絡しておきます、と騰毗。私の方が頼み込んだような言い方をする。「むこうさんから、れんらくきましたら、せんせんとけえいっぽういれるけえ、まっといてえな（向こうさんから連絡着たら先生の所へ一報いれるから待ってて）」

ええ、と。それだけ答える（不愉快だったから）。その他、雑談して歸る（島のホテル）。注記。上の騰毗の發話はすべて方言。但煩わしいので今改。

次の日、早朝だけ雨。九時以降晴天。Lineに佐伯の一報。今日の夜はいかがか？ 私、いいですよ。佐伯、じゃ、むこうさんにも伝えときます。私、どこで？ 佐伯。わたしの私宅で。

佐伯私宅は山の中腹。承諾する。時間は7時。

6時半に着く。

佐伯と雑談。佐伯の母親が佐伯家に傳わる家寶だという雅樂面を見せてくれる。蘭陵王面。いかにもこの島らしい。とはいえかなりの異形。まずフルフェイス。即ち口まで有る。目が六つ開けられている（額に一、まっすぐ下がって顎に一。頬骨下に左右一ずつ（つまり両目のそれぞれ下に）、）口らしきものは口のあるべきところに無くて鼻（突き出した狼の口を引き延ばしたような）がひとつ、そして十字に裂け牙を密集させる（鮫の

ように)。蘭陵王の面と云われなければそうとは解釋できない。もっとも化け物の面であればとりあえずの意味は通うと言われればそうなのだろう（佛教系の面敷）。面の裏、額に墨字で龍王と。「りようわう」で陵王の意味に通わした借り字。なのか。それとも本当に龍の王の面だったのか。とはいえ面の貌は龍にも見えない。

佐伯母曰く天武天皇の御代の作であると伝えられると。

私、さすがにそれはなんじゃないですか?...失禮ですが。

佐伯母。ないし、そのイミテーション、とか。ま、そういう言い伝えです。天武天皇の御寵愛の猿王という舞人がおられて、そのつけて舞うてられたものだ。

問、なんでここに傳わったんでしょう？

佐伯母。妹尾兼安ですよ。その人が鹿ヶ谷の件で丹波少將成經を島流しにする、その道中に今の路のどこかしらで入手したと。道中 路のあたりには違いなからうけれども見知らぬ山名前もしらぬ山が霧の中より突如現れて...霧がふかくて気付かなかったのね、山のあるのに。で、ふもとまできてやっとそこに山の有ったのに気づく...

問、なんで、そんなに委しいんですか？

佐伯母。お能であるんですよ。もうとっくに廢た...舞臺にはかけられないもの。陵王っていうの。禪鳳だったね、たしか。それも、禪鳳の眞筆かどうかはわかりやしない。ともかく、路遮る岩間に見上げれば今更に山のありしに気が付けど...と、ね。そこに行き倒れの人がいるのよ。その人が持つてるのよ。後生大事に。お面をね。妻あらば、行きて告げまし親あらば、ともになきまし...とかね。兼安がね。せめて何かの形見に知る人と出逢ったならば、と。面を取るのよ。そうしたらその旅寝の枕にその面をつけた猿王がでてくるのよ。御寵を忝うしながらもわたしは讒言に依って誅された。悪靈になってその陥れた憎き子どもを呪い殺してやろうとしたが時すでに奴等佛門に歸依していた。激昂の御門に生きた儘土に埋められ顔だけ曝し鳥についばまれようとする私が死に際に目を破裂させて血を吹き出し呪詛の言葉を吐いて死んだその死にざまの無残に空蟬の世のはかなさを感じて世を捨てたとか。私の爲にむしろ祈念しあられもなくに涙をながしている様を見れば呪い殺すも大義はない。とはいえ恨みはただ綿々つきようものか。咒うもできず成佛もできずにあれから幾百年、此の面に宿って悪靈たるまま滅びずにいるのだと。露し消えども、花し散れども、人だにことごと滅びれども、わが恨みいかでかえ滅ぶべきいかでかえ滅ぶべきなぞわれ生まれ落ちしや...本、ありますよ。

私。興味ありますね...いや、その、謠本のほうにですよ。

7時をすぎて半。眉村来る。

眉村和哉（父）および眉村深雪（母）が和室に入ってきて遅刻を謝す。理由は息子眞夜羽がむずがったからだ。

襖の向こうにかくれて眞夜羽はなかなか姿を現さない。

深雪知叱咤し眞夜羽入ってくる。

一見瘠せた小柄な少女だと思った。坊主頭。五分刈り程度。目が少女とばかり認識しているので残酷な印象を受ける。徒刑囚じみて。虐待が匂った。後に眞夜羽の性別が男と知っても刈られた少女の印象が付きまとう。

和哉が自己紹介と家族紹介をしているようだった。耳には入った。わたしはただ眞夜羽を見ていた。丸刈りの少女はわたしたちを（左から佐伯騰毗、佐伯母、佐伯祖母、私）見

回し、順繰りのせいで最後に視線を合わせたわたしにいきなり微笑む。ごく自然な微笑。見ていた風景が一瞬で壊れたような、そんないびつな気が私にはした。その時には。虐待された少女が無理やり笑んだとしか思えなくなっていたから。

和哉（以下和）。こちらが東京の先生でいらっしゃいますか？（是らもすべて方言である。今改）

佐伯（以下佐）。そう。来てもらったの。無理云って。

和。おいそがしいところを...

私。結構ですよ。今、大學の方は休みだから...云々。

その他、土地柄なのか挨拶部分が長引きそうだったので私がおもむろに轉生の話をするように促した。

以下要約する。主に和哉がひとりで語った。

眞夜羽は13生まれ。去年（5歳）のとき（春。櫻の後で、と和。深雪（以下深）梅雨のころじゃないですか?...雨が降ってたから...云々）その朝眞夜羽泣きながら目覚める。

醒めきらない夢に怯えて泣き叫ぶというのではなくて、寝ながら本当にしくしく泣いてるんです（深）。時々引きつけ起こして...（和）。前から唐突に引き攀けを起こす発作があった（深）。

あわてて揺り起こすとにも覚えていないという。是れ持続しその頻度は週に三日くらい。

一か月くらいのち（その日の天気は雨（和、深）朝和哉が居間（畳の上にカーペット敷）に降りて入ったら眞夜羽がひとり立ち盡していた。外を見ていた。雨の音が鳴った。

聲をかけようとしたら振り返った。唐突に笑った。歌った（獣じみた低音で云々。和）。

其歌曰

ときじくそ

ゆきはふりつつ

ときじくそ

はなのごと

ときじくそ

ゆきのむた

たれもななきそね

たれもななきそね

私に思うに、獣じみたというのは謠いの聲の喉に懸かった低音を言ったのだろう。

奇妙に想った和哉は（眞夜羽の眼が茫然としていたので（又云、妙に醒めた眼をして...又云、血走ってるんですよ。目を見開いて。又云、なにも見てない感じ云々）子供の聞いている前でよくもぺらぺらしゃべれるもの。本質的に粗野かつ莫迦なのである）眼をさまさせようと（又云、こっちに引き戻そうと。又云、大變なことになるまえに...又云、正直、憎らしくて...又云、衝動的に。我慢できずに。又云、こわくなっっちゃって。自分の子じゃないみたい。云々）その頬をひっぱたいた。瞬間、眞夜羽「にっこりと、ほんとうに、にこって（和）」笑う。

次の瞬間眞夜羽あらためて驚愕し茫然とし和哉を見上げ泣きそうな目をする（ひっぱたかれたことに？）。

和哉、そこで待ってろ、と。

眞夜羽従う。

和哉、深雪を起こす。眞夜羽がおかしいと。深。どうしたの？ と。和。いきなり變は歌うたいはじめて云々。

居間で深雪、眞夜羽が問う。(雨が強くて。雨が、匂うでしょう？ 雨、匂いますよね？ 匂いがすごくて。音もすごくて。(深))

問。どうしたの？ なにがあった？

答。なにもない。

問。お父さん、心配させたでしょ？

答。ごめんなさい。

問。なにかあったの？ 隠さないで言って。

答。おかあさんも、お父さんも、知らないんだね。

問。なにを？

答。じゃ、やっぱり知らないんだね。

問。何を知らないの？ 何を秘密にしてるの？

答。答えられない。

問。なんで隠すの？

答。隠してない。

問。なんで謂わないの？

答。云えない。

問。なんで言えないの？

答。難しすぎて云えないだけ。

和哉の話がこのあたりに来た時深雪、不意に泣き出して仕舞う。佐伯祖母がなだめる。佐伯母は不審な目をして居た。私は抑々親子関係に問題があるに違いなく思っていた。故いちいち深雪を観察しさえすればなだめるべき必然を感じなかった。概ね虐待者は犠牲者に似る。

深。大丈夫です。

祖母。どうしてないちゃうの。泣いちゃうようなところじゃないでしょうよ。

深。それまで、わたしたち、本当に幸せだったんですよ。本当ですよ。

云々。

祖母がなだめる。曰く今も幸せじゃないの。なに莫迦言ってるの。これからもっと幸せになるわよ云々。なだめ詞はいつでも支離滅裂なもの。騰吡は眉一つ動かさず。不愉快になる。どこまでも他人事だから。尤も人眼にはわたしも同じだったに違いない。観察者はつねに冷酷なもの...

二日後、スケッチブックに落書きをする(祖父眞砂の趣味が書と水墨画だった爲、眞夜羽は早くからスケッチブックと色鉛筆を与えられていた(深、クレヨンだと、色の微妙なニュアンスが描けないってお爺さんが言って。私、でも、抑々子供にそんな感性ありますかね？ 深、描けば身につくって。おじいちゃんが。やさしいおじいちゃん。私。いつなくなられたんですか？ 深。一年前...この子、四つとか。泣くんです。人の死んで理解できないでしょうに。さんざん泣いたんですよ。一人前に。やっぱり、悲しくっ

て。云々)) その落書きを見ればただ字のみ書いて有る。(深雪持参のものを見る。撮影する。)

登伎士久會
由伎波布利都都
登伎士久會
由伎波布禮騰母
登伎士久會
波那能碁登
由伎布留母能乎
阿禮波波那迦夜
阿禮波波那迦夜

但し書き損じ散見される。例えば久字をク字、能字の月が日になっている、會は一に口に日等。今改。見せながら深雪、私に問う。これ、意味があるんですか？

私。たぶん、雪がずっと降ってる。花のように。あれは花かな？ ひょっとして花かな？ 深。やっぱり。佐伯先生にもそう云われました。

見ると佐伯騰毗は如何にも興味なさげにスマートホンを弄り始めていた。

深雪は息子の異變に氣付けどもその時は捨て置く。但し息子に不穩の氣配を感じ始めた。(曰く、喉に吐くに吐けない(物理的に口より大きすぎて吐くに吐けない、と。)やわらかい味のある塊りを飲み込んでくるしんでる感じ云々)

更に数日後、食事時に眞夜羽唐突に言う。

(祖母に) 死んだら、何に生まれ変わりたい？

深雪曰く、おばあちゃんに死ねなんて、よく言えるわね、と、わたし叱ったんですよ。(笑う)

一重答えて曰く、また眞夜羽(一重はマユワと呼んでいた。故に此の時も麻由和と云った)ちゃんのおばあちゃんになりたいね。何度生まれ変わっても、おばあちゃんは眞夜(麻由)ちゃんのおばあちゃんになろうね。云々

眞夜羽。無理だよ。お父さんは？

和哉。俺は昔の皇帝になりたいね。中國の。始皇帝とかね。項羽と劉邦とかね。孫子とかね。孔明とかね。

眞夜羽。無理だよ。お母さんは？

深雪。いっそのこと蝶ちょとかいいんじゃない？ 悩みなくて幸せそう。

眞夜羽笑う。無理だね。無理だけになりたいね。(深雪、和哉を訂正し、なれたらいいねって言ったんだよ。になりたいなんて言ってない。云々)

深雪問う(いきなり幸せそうな顔していったんですよ、こいつ(和))。眞夜(麻與)ちゃんは？

眞夜羽云、なんでもいいけど、おじいちゃんを殺したくない。...生きる爲でも、...生き残る爲でもね、やっぱり...おじいちゃんのこと、好きで殺したわけじゃないからね、僕(保久と發音。眞夜羽には濁音又拗音を落とす傾向があった。ボクをホク、エイギョウチュウをエイキウチュウなど)。絶対殺したくて煞してないからね。でも、無理だね(むりらあね)。殺しちゃったもん(ころしやあ、たもん)。

和哉曰く、此処で深雪が眞夜羽を怒鳴りつけた、と。何て怒鳴ったんですか？ 和。理由なんか...（と彼は云った） 忘れた... 僕も気が動轉してて。云々。

割り込み深雪曰く、違う、と。息を吞んで、その瞬間に気が遠くなって、頭の中が眞白だった、と。だからあなたが眞夜羽をひっぱたいたのも止められなかったんですよ、云々（是らすべて方言で發話。おそらく微妙なニュアンスの相違あり歟）

いずれにせよ、

泣きもしないでうつむく眞夜羽に（...と一重が云った。こんこおゆうたらなきいもせんでじいとおうつむいとるばあでなじゃけんにわたしゆうたんよ、...）一重云、なんで、おじいちゃん殺したなんて言ったの？

但、祖父眞砂は交通事故死である。岡山の親族宅に（農家。ももを取りに來いと云われた、と。桃に殺されればイザナギも歎くか）言った返りの国道でトラックと正面衝突した、と（居眠り運轉）。故、自己の過失死であって他殺ではない。

眞夜羽云、だって、殺しちゃったんだよ。

一重云、殺してなんかないよ。眞夜（麻由）はいい子だもん（麻由阿安衣衣古士也阿祁惠那）

答。ぼく（保久）殺したよ。ピ（比）ルの上から突き落としたんだ（多）よ。

問。おじいちゃん、ビルから死んどらんで（儘。和哉の言った儘。）

答。ぼく（保宇）ふさいっちゃうくっかかの（未詳但し私もうろ覚え）變なびる（比留）からつきおとすんだ（多）よ。

和。誰が？

答。ぼく（保久）が。

和。誰を？

答。おじいちゃん（於斯（引）知アン（ア音はかすれ音。若干、かすかに、纒かに））を、殺すんだ（多）よ。だから（多阿羅）死んだ。ご（古）めんねって言い（由伊）なが（迦）ら殺した。煞したの。生まれ變わったらせめてひろこおとりに成ろうねって。

深。ひろこのおどりって？（笑う）なにそれ？

私は此の時に和哉を遮って眞夜羽に直接言った。比翼の鳥？ 比翼連理?...と。眞夜羽は始めて私がそこにいたのに気づいたような顔をした。答えないので、わたしは更に云、違う？ と。ややあって眞夜羽はただ口を開かずに唇だけで笑む。恥ずかしい程に美しい少女。たかが7歳の。私は問う。だれに聞いたの？ なんで讀んだの？ 漫画？ アニメ？ 此の時は私が眞夜羽に單獨質問するには早すぎたようだった。だれもわたしがそんなことをするのを望んで居なかったのだった。冷や水をあびせて侮辱したような、そんないたたまれない雰囲気があった。だから私は敢えて今なにも質問をしなかったかのような振りをしてそして和哉を見た。興味深く、今も彼の話聞き続けている人のように。沈黙しわたしから目を逸らしたままの和哉を。

答。波古伊（恐らく古伊音は「はくきょい」の「くきょい」が崩れた音）でしょ。波古伊くらい知って、...波古伊だよ（波古伊久良伊志互波古伊多與）。おじいちゃんが教えてくれた。死ぬとき、

一重（以下一）。おじいちゃんはひとりでしんだんじゃからな。

答。ひとりじゃない。

一。ひとりでしたんで。

答。それじゃない。

一。ひとりじゃが。ひとりで...(和哉なだめる(正確には激昂しかかる一を不快がって手を振って黙らせたと深))

答。そのおじいちゃんじゃない。

和。だれ?

答。ゆとん。

爰で、聞きなれない三音に一同須臾沈黙。後すぐさまに深雪が云、なに? と。

答。ゆうとん。

夢見てるのよ、と深雪はつぶやく、なんども...なんども、ゆめゆめゆめゆうて自分に言いかせて...云々、そう耳打ちするような聲に私を振り返り見もしないで云った。

和。誰?

答。雨の中のきり(音は方言であめんなかんきり。霧? 桐? 切り? 乃至かんきり? ただし是は意味不明)...漢字はそう。正確な発音、できない。

一。誰や?

答。ゆうとん。

一。どこのひとや?

答。中国から来た。さいいいちうくっかかの市場(伊知波)で逢った...話したくない。

和。何で?

ゆめゆめ、...夢を...と深雪独り言散る。故、夢見てる気がした? と私が尋ね、深曰く、じゃ、なくて、此の子が...と。故私、眞夜波が夢の中にいると? 深、眞夜が...と言いかけて黙止す)

答。なんとか、するために。

和。なにを?

答。自分たちを。

和。自分たち?

答。生き延びるため?...みたいな

一。死にはしない、だれも、いま、だれも...(しにやあせんだあれものしにやあせんでしにやあ...)

答。そう。みんな、それも知ってる。死にはしない。

和。だったら、なんで生き延びるの?

答。ほろいるから、...

和。滅びる?

答。死にはしない。...新しくなるから。あたらしいイノチのカタチを手にするだけだから、...

一。それあ漫画の話しか。

答。未来の話。おじいちゃんは、...ゆうとんは、ひろこおとりになろうって言って、ほくころされた。でもしってたよ。なんど生まれかわってもひろこおとりにもれりのうえらにもなれないけど、ほくは、でも、...ね。ほくはゆうとんを殺したくはなかった。

和。おじいちゃんが、未来に生まれ変わったのが、ゆとんってひとなの？

一。何人や？ 宇宙人か？

答。中国人。人種は。フィリピンで逢った。

和。なんで、そんな所にいたの？

答。ここらへんで、そこらへんしかもう生きてられないから。ひとかたがだよ（ひとかたかて（かてハがで。方言））。

和哉曰く、此の時は此處で深雪がもうやめよう、と云った。和哉も一重も云わんとすることは察した。一重曰く、「おかしくなりかけた我が子」を案じる親心が哀れだったと。和哉曰く、こいつ（深）が取り亂してて、眞夜羽どころじゃなくて...云々。

二日後、時機を見て和哉は眞夜羽を嚴島神社近くの海岸に誘う。名目は飼い犬蘭丸の散歩（柴。一か月前死んだ云々）。歩き、埠近くのベンチに座る。

和哉問。お前、未来が見えるの？（冗談めかして。但し、和哉云、此の子はこれがマジの質問だって気付いてみたいですけどね、云々。佐伯騰毗。何でそう思ったの？ 和哉。答える答え方が、答えるさきから答えも含めて、答える態度で、なんか憐れんでるんじゃないけど、慮るっていうか、伺い見てて、むしろわざと話、冗談めかすんですよ、こいつは...（概ね儘。但し方言除く））

答。夢は見たよ。

問。夢?...未来の？ ゆとんの？

答。ごめん。全然違う話しちゃったね。

問。いいよ。なに？ 夢見たの？

答。聞きたいでしょう？

問。話したいでしょう？

答。聞きたい？

問。聞かせたい？

答。きかさせた...きられされられ...きかされ...

問。なに？

答。ちがうね。話させられたいでしょう？

問。話させたいでしょう。

答。話してあげるね。夢の中でね。ぼく（保久）夢だった知ってるんだけどね、夢見ながらね、夢だって知ってて、だから、自分の思い通りに夢、動せるよ。夢、作れるよ。けどね。夢の、夢が夢見る、...夢見られる...夢見させる...そのままに、夢の儘にしてあげた。...そうっと。

ほうっと。

ふうっと。

ぶわって。

ふわふわわあって。

海の真ん中に立ってるよ。波に觸ってるのに、濡れないんだよ。波に揺られてるのに、ゆらゆらしないの。

すごくない？

だから海の真ん中に立ってね、ずうっと、見てるよ。雪。

問。雪？
答。海に、雪が降ってるんだよ。それをずっとみてるんだよ。
問。それから？
答。それだけ。おとうさん、子供だね。
問。なんだよ？
答。それから？ それからって話があるみたいに話させるの子供だよ。子供じゃないけど、子供っぽい、子供らしくなけど、子供だよ。
問。それだけ？
答。みんな、居るんだよ。
問。その海に？
答。それ、夢ね。いまのは、夢じゃないよ。ごめんね。みんな、いまも、ここにいるよ。
問。だれ？ 笠原のおっちゃんとか？（母方叔父。此の年の前年に大阪で孤独死。）
答。かさじいもいるけど。みんな。おとうさんも。お爺さんも。おかあさんも。お母さんの、まだ生まれないお母さんの未来の生まれてないお母さんも。みんな。死んだ人も。生きてる人も。生まれてない人も。
問。待って。なに？ 魂？...みたいな？
答。ぼく（保久）、あたまおかしい？
問。なんで？
答。だって（多（阿引）豆）ぼくがこのはなしみたいなの、話すと、だれ（多禮）も、みんなね。みんなもだよ（多於（引））みんなもへんなかこするよ。
問。過去？
答。顔だよ。
問。みんなってだれ？
答。安原先生。（小學校担当教諭、女性。）
問。安原先生だけ？
答。でも先生すきだよ。いい先生だね。結婚できないけどね。
問。未来見たの？
答。誰が？
問。安原先生、結婚できない未来、見えた？
答。性格悪いから。結婚する人いない。
問。過去が見えるの？
答。過去？
問。ちがう。顔？
答。あるよ。いっぱい。手も。足も。
問。誰の？
答。皆の。
問。死んだ人？
答。みんな...暗いけど、あぎやか（アシアヤカ）。きらきらして、まっくろな、
問。むずかしいな、めちゃくちゃ。
答。みんな、燃えてるよ。

問。熱いね。
答。燃えないよ。焔が、...眼とか。炎が。
問。こわいね。
答。ぼくもだよ。
問。お前も？
答。ぼくもくろくて、きらきらしてて、燃えてるよ。
問。生きてるのに？
答。匂う。花の匂い。花の...砂糖いっぱい、ジュースみたいな、花のいっぱいのジュースみたいな、花の甘い匂い。
問。そのひとが、教えてくれたの？
答。何を？
問。未来を。
答。教えてないよ。ひとりごと話し續けてる。
問。じゃ、なんでおじいちゃんの未来見たの？
答。見てない。見たけど。でも、いま、見てない。知ってるだけ。もう、知ってるから、知ってただけ。
問。おじいちゃん、お前が、...
答。後悔してない。
問。後悔？
答。仕方ないから。だからね、人間、いなくなるよ。
問。みんな死んじゃうの？
答。死なない。もっとすごい生き物になる。
問。どんな？
答。かたちないよ。ぐちゃくちゃ。木に張り付いたり、壁に張り付いたり、めちゃくちゃ。でも、もう死なないよ。焼いたら死ぬけど。
問。順番に教えてよ。
答。風邪がはやるの。風邪みたいな引くと、變るの。風邪のせいじゃないけど、躰の中がいろいろなって、變るの。ぜんぜん、自由だよ。
問。なにが？ なにが變るの？？
答。いきもののかたち。いきものの...いのちのかたち。
問。だったら、いいじゃん。死なないんでしょ。
答。でももう人間じゃないよ。別のものだよ。
問。じゃ、顔は？ 魂？...燃えてる人たちは？
答。関係ないじゃん。あったものはあったんだから。ずっとあるよ。昨日とか今日とか、あんなのぜんぶ嘘だよ。ぼくらがそう思ってるだけ。頭わるいから。昨日とか今日とか、全部一緒だよ。
問。人間居なくなるの？
答。全部、いなくなるよ。シンス（新種？）がぜんぶ食っちゃうから。
問。シンス？
答。ゆとんも食われたから。かみついたから（今思うに、神- 憑く？ 私見）。だからぼ

く（保久）は殺した。ぼく（保久）らは、にんげん（邇ン祢ン）として、死にたかったから。ぼく（保久）伊波良志邇伊久。

問。いはらしにいく？

答。知らない？...多分知らないね。岡山にあるよ。遠くない。福山の隣り。

問。茨市。

答。知ってる？

問。名前は。名前だけ、...岡山？ どうしたの？

答。ぼく（保久）が生きてるうちに、...

問。シンスに喰われるまえに？

答。ぼくは食われないよ。生まれ変わった次の僕だから。

問。今のお前が、眞夜が死ぬの？

答。たぶん、人間以下になる。

問。以下？

答。そういう扱い。その前に、お父さんとお母さんに...

問。俺は？ じゃ、俺、誰？

答。眞夜羽のぼく（保久）のおとうさんじゃん。違う、

問。未来の？

答。昔の。比呂登のお父さんとお母さんに、逢う。

問。前世？

答。いまでも、時々泣いてた。泣いてる。泣く。知ってる。今も、お母さん、...奴麻多比呂古。ひろこさん...

此の時に既に十分以上経過していた爲、和哉は会話を打ち切り帰宅する。此の時聞き取ったのは、ヌマタヒロコ、ヌマタヒロトの名前。この日インターネットで検索する。岡山、茨、沼田、ひろこ、と。めぼしいものは当たらず。妄想を疑う。若年性の精神疾患か、成長の過程に伴う空想的な障害なのか、云々。此の時和哉は誰にも相談していない（息子の頭の中が、急に遠く感じて。その感じ、共有したくなっていうか。できないというか、云々）。

数日後ツアー客を案内する（社員旅行、櫛リゾート開発株式会社）。その名簿の中に額田姓のあるのを見て思いつく、ぬかたひろこ、と。帰宅後検索し、岡山県茨市西蠅原町在住の額田比呂子のフェイスブックを見つける。但し見たところせいぜい二十代半ばであって、子供に死に別れたと見えない。不審に思う（単純に二十歳前後で眞夜羽の前世と死に別れていたなら、十代の出産でなければならない）。

埠で會話した日の翌日、朝、月曜日。（是は佐伯某宅での一回目の會合では和哉話さず。後に話した。二日後に Line 通話した時。雑談で。... そういえば云々、と）

晴れ。早朝庭でストレッチ（ラジオ体操）和哉と眞夜羽の日課。（最初の夏休みから。島の小學生は夏休みの朝に地域で集まってラジオ体操するから。その流れで...（和哉の話）眞夜羽体操途中でやめる。いきなり笑いだす。和哉問う、どうした？（どうしたんならあていゆうたんですわ、そしたら...）だって燃えてるから、と眞夜（もえとるんで、もえとるんじゃもん）和哉、例の「昏いあざやかな顔」の話だと理解。取り合わない（きこえないふりしたんですわ。きみわるいからな、... でしょうよ？——個人的な疑い。息

子に対して此の父親にはある種の冷淡さがある、と。かつて結婚に失敗し子供も三歳までしか育てなかった男の單なる個人的印象として（判る？）。あくまで）。

和哉言うには此の頃、和哉、インターネットで幼年期の妄想障害等について調べていたらしい。

夏。7月の頭くらい（是は和哉の談話）。「ただなんとなく」「たまたま」先の額田比呂子のフェイスブックを見た。（土産物屋の営業中に。暇な時に。店で。和哉曰くパソコンにブックマークしていた。）二番目に新しい記事を見る（間、その額田さんのページに入ったんですか？ 答、そうです。それ、ブックマークしてて云々）百合の花の写真の接写。加工あり。今日は比呂くんの命日でした...忘れてないよ（改行）わすれられないからね。和哉曰く、背筋に冷たいもの走りましたよ云々。此の日は何もしない。誰にも告げず。（後、個人的にそのフェイスブックを確認したら、日付は7月8日付け。）

一週間後。メッセージを送る。

（7月20日）

和。突然すみません

広島宮島の宮島に住んでいる眉村というものです

いきなり、あやしいとおもうんですが、ちょっと相談したいことがあります
連絡していいですか？

是には返信なし。

（7月21日）

和。あやしいですよ？ 読むだけ読んでくれますか？

すみません長いです

子供がいるんですが6歳です

子供が突然生まれ変わりだと言いはじめました

信じてなかったんですが沼田ひろとだと言いました

沼田ひろこの息子だったと言いました。

岡山の茨です

沼田さん調べたんですが

ネットで

出てこない

もしか（註、もしかして）と思って額田さんで検索したらあなたが出てきました

失礼しますちょっと見たんです

息子さんいました？ 比呂斗くんですか？ なくなりました？

6年前とか7年前とかですか？

ぞっとしてて

失礼しました

たすけてほしいんです

連絡あれば幸せですが

（同日）

比呂子（以下略記、比）。そうですけど。なんですか？

（7月22日）

和。息子の写真送ります

信じてほしい。信じられないの、あやしいの、十重（儘）わかるんで添付画像。和、となりに眞夜（3歳くらい？）を抱く深。和の自撮り。

（同日）

比。くわしく、おしえて

和。信じられます？

比。わかりませんが、くわしくお願いします。

（7月23日）

和。あれからいろいろ書いてみたんですけど、こみあってて...

電話してもいいですか。

（7月24日）

比。いいですよ。

和。いつがいい？

比。今日だったら夜の10時くらいがいいです。

故、指定時間にフェイスブックから通話する。此の時の会話について和哉、謂いにくし話複雑すぎて俺もなんて言って何から話せばいいかわからなかったから心臓ばくばく云いながらの電話でしたが、最初から普通に友達的に聞いてくれて云々（是、方言。孔子だったっけ？意味がわかれば詞を忘れる、と。云ったね？あれ、誰だっけね？）

通話に於て事の次第を（だいたい上記のと通りの次第の要約を？）話した、と和哉。

私。で、その額田さんの反応どうでした？

和。黙って聞いてくれて。女性だからね。

私。なんで、女だったら聞くの？

和。スピリチュアル系？スピ系？好きでしょ（子を無くした母だったら、とか。そういう回答を私は期待していた。尤もこれは個人的乾燥（儘）

此の時には一方的に和哉が自分たちのことについて話しただけ。

比呂子が話したのは、慥かに比呂斗という子供がいた。7年前に死んだ。それのみ。

私。もっと突っ込んで聞かなかったの？

和。だって、失禮じゃないですか（さまざまな個人的な禮儀作法の境界線。さまざまに自分勝手な作法倫理のダイバーシティ。笑）

また何かあったら、連絡します、と言って和哉は電話を切った。

ここで質問（私が。奥さんに）。あなたは、それまで、なにもしなかったの？

深雪答えず。（印象的な無言（個人的な印象では、）。思い詰め感じでも、うつむくでも、何かを隠すでもなくて。ただ、わたしを見てる（ノイローゼか鬱かなんかを疑う。個人的には。一瞬）まるで外国語を話してる外人の言葉の音聲だけとりあえず聞いている感じ）

私。旦那さん、結構いろいろ動いてらっしゃいますね？聞いてると。その割に、奥さんの方は、なにもしなかった？

深。信じてるんで...

私。息子さん？

深。主人を。

私。任せてたの？

深。そういう譯じゃなくて。

私。あなたお願いねって、相談して？

和。そういう取り決め、なかったんで...(そがんはなしやあなかったんですけえどな)

深。眞夜は、信じれるから。

私。息子さんは...(意図的に意地悪な言い直しをする)息子さんだけ？

深。そうじゃないですよ。(深。此の時自然に、普通に自然に笑った。(個人的記憶的印象的印象...))

7月26日。天気は曇り、後、晴れ(是は和哉の記憶。朝起きた時、雲がくらくて。雨ふるんかな思うたら、その前の日かな...なんか、すっきりせん天気で、雨ようけ(たくさん)降りようたけえ、ずうっとな、その前の日は晴れとったんですわ。こりゃ今日も雨かいか思うてね...そしたら晴れてね。晝前からね...云々)比呂子から連絡ある(メッセージャー)

比。週末ですね。(この日は金曜日だった)

和。そうですね。

比。いそがしいですか？

和。観光の仕事ですから週末はいそがしくならんといかんからな

比。息子さんと一緒にこっち来ません？

和。茨？

比。週末

和。週末はどうじゃろ

和。平日は？

比。来週？

和。そうです

比。水曜日

和。何時くらいですか？

比。一日中 OK ですよ

此の時、和と比、電話番号を交換。又、電話番号から Line つながる(是は私の質問に答えたもの)。

和哉曰く、眞夜羽に水曜日旅行しようと言った、と。そうしたら眞夜羽答えて云く、伊波良伊久、と。茨行く？。イハライク。平坦な発音だったから(是れはうる覚え。違う言い方だった)一瞬何と言ったのか判らなかつた、と和哉。いずれにせよ茨市に行くので、

和。行きたがったろ？(但し方言)

眞夜羽、答えず。聞き取れなかつた顔。

和。行きたいって言ったろ？(上に同じ)

眞夜羽、答えて曰く、やっぱり？ と。

和。なんでやっぱりなんじゃ。

眞夜。行くと思った。

眞夜羽、笑う(素直に、と和哉はいちいち註して云った)。

私、質問、奥さんに。奥さん、どう思いました？

深。何を？

私。旦那さん、茨市に行くと、そう云われたときに、...反対？賛成？

和。こいつには、当日に朝に言ったんです（いゆうたんですわ）

私。なんで？

和。一應言ってやらないと（いゆうたんと）。

私。息子さんと二人で行ったの？

和。いや、三人で。

私。当日になって、奥さんに？

和。こいつ、専業主婦みたいなもんじゃけえな。

佐伯母。そんなことない、よく働かれてるよ。店でな。（方言によるイントネーション。）

深。わたしは別に反対するものにも。

私。まあ、とりえずは賛成、みたいな？

深。額田さんに会うまで、比呂斗くんのこととか、知らなかったんで。

私。知らなかったの?...言わなかったの？（是は和哉に。只、わたしはずっと奥さんに向かって話しかけていた記憶がある。普通の顔。あまりに普通の表情。無表情でさえない。健康的な、普通の）

和。ま、専業主婦みたいなもんじゃけえな。

此處は素通りすべきと判断（私）。故、で？と言った。時に佐伯騰毗はすでに暇つぶしの限界越え。あっち見てこっち見て。胡坐くんで伸ばしてくんでのぼして...。私は佐伯母に目配せし云、若干、休憩取ります？

佐伯祖母（母の方がなにも云わなかったの）。ええですよ。先生もお疲れでしょう。

私。じゃ、若干。

私（眞夜羽に）。眞夜ちゃんもつかれたよね？

眞夜羽。しやあかん（若干。口眞似。）

深雪笑う。邪氣も無い笑い顔。子供のような。（悪いひとではない？）

此の時に騰毗、自分に目配せする眞夜羽（すぎるような。理解者に？すぎるような？）には目もくれずに立ち去る（トイレ？）。この日それから佐伯は歸ってこなかった（寝た？）。

深雪に、私。じゃ、若干、僕、眞夜羽ちゃんと話していいですか？

佐伯母。いいねえ（ええねえ）。そりゃいいねえ（そらええねえ）。なあ（眞夜羽に）眞夜くんや。いいねえ（ええねえ）先生（せんせ）話してくれるって言ってるよ（はなしたげるうてられるよ）。

眞夜羽。いいよ（ええよ）。

眞夜との会話。但しみんなの見てる前で（佐伯宅客間）

問。あの、...話していい？話せる？話そうよ。

答。いいよ。

問。聞きたいんだな。俺ね、顔?...お父さん云ってたね、顔？

答。先生なの？

問。私？

答。先生？

問。大學のね。大學。わかる？

答。わかるよ。むかし、行ったよ。

問。いつ？

答。いっぱい。(佐伯母が息を附いた。(息を飲んだ？ ただし、これみよがしだった気がする。話したことがある？))

問。顔、見える？

答。顔じゃない。

問。顔みたいな？

答。ぜんぶ。からだ、ぜんぶ。(せんぶ。からら、ぜんぶ (ぶ音、ぶいに近い。ハ行音だいたいおなじ。は、ひにちかい。ひ、ひいに近い。は音とは顯らかに差異。ふ、ふいに近い、へ、ひに近い。顯らかな差異。ほ、ポに近い。速い音))

問。どんなの？

答。くろいよ。色ないから。ぎらぎらしてる。(ぎらぎら、音はきらきら。き音、正確にはきいに近い。顯に口を開いて發音。はっきりと、ギ音を察知させはする...)

問。目、燃えてる？

答。先生、いいひとでしょ。

問。俺？

和。先生の質問に答えるんだよ (こたえんならんどお (方言))

問。俺は、...悪い奴じゃないかもね。

答。燃えてないけど。焰。焰。...あるよ。(ほの一。發音、の音そのまま伸ばす。長め)

問。眞夜ちゃんもいるの？

答。迦迦美和禮登留與 (かか (微かにム) みわれ (りよに近い) とるよ)

問。かかみ？

答。なんで？

問。割れてるの？

答。反對にうつるよ。

問。鏡？

答。でも、はんたいじゃ (シア) ないの。(ん音ム音に近い。)

問。割れちゃった？

答。われてもうつるでしょ。見える？

問。鏡？

答。顔。...先生の顔。

問。俺の？

答。先生の言った顔 (せんせんいゆうたかお)

問。眞夜くんの見てるやつ？

答。そうかな。

問。俺は見えないね。だから、質問してるの。見たいな。そういうの。ほら。興味あるじゃん。神秘的。わかる？ 神秘的、おれ、嫌いじゃないんだよ。... すきでもないんだけどさ。

答。でもからだじゃないよ (て (れに近い) もからた (らに近い) しあないよ)

問。...え？ (そのとき何を云ったのか一瞬判らなかつたから問い返した。)

答。ぐちゃ (くちゃ) ぐちゃだよ

問。なにが？
答。からら（はっきりと、此の時はら音雙つ。恐らくからだ。）
問。ぎちゃぐちゃだ。たいへんだね。
答。變なの。
問。それって、未來の、あたらしい...
答。シンス（シ音ソ音スに近い。故、扇子（せんす）に一瞬間き間違えやすい）？
問。新種？ 新種のことなの？
答。ぜんぜんちがう。かたち、全然違う。かたちじゃ（シア）ないよ。
問。もっと、もっと...なに?...ちがうの？
答。水（或は未遂）みたい。（みすいみたいト發音シタ）
問。顔？ 新種？
答。シンス。でも、もういんだよ。
問。なにが？
答。もう、いいんだよ。何も、むずかしくね、考える事無いよ。もういいんだよ。（「いいん」は実際の発音はすべて「いん」）
深雪（ここで深雪がいきなり會話に入ってきた。ただし、獨白じみた言い方。ひとりごちるような？ 故、聞く）。でも、不思議で。なんとなく。ここから、茨市...岡山でしょ？ フェリー乗ってね。それか山陽線で。...新幹線も高いからね。廣島に行けばあるんだけど。福山行き。となりだからね（じゃけえね）。山間のね、高い處、...なんていゆうん（謂うの）？ 海拔？ 高いところ？ 山間じゃけえね。行く（ゆく、と發音）んじゃけえども、なんか、なつかしうてな（懐しくてね）。
私。記憶、蘇る感じ？
深。行ったことないんですけどね。茨なんかね。
私。朝、聞いておどろいたんじゃないですか？
深。なにを？
私。これから茨行くって。生まれ變わりで茨行くって。
深。なにをいゆうとられるん（何を云ってるの）。福山の驛についてからで。これから茨の眞夜の實家行くうてきいたんわ（と聞いたのは）。
私。そのときはじめて言ったの？ 奥さんに？（和哉に）
和哉（笑う）。だって、信じられないでしょ（和哉の發話は基本的にすべて方言で話された。）
私。そのとき、奥さんは何て？
和。こいつですか？
深。行ってもしかたないと。昔はどうでも本等でも嘘でも、今の眞夜は眞夜なんどと。
和。でも、逢いたいといってたな（しゃあけどあいてえいゆとったな）。
私。誰？ 沼田さん？
深。額田さん。逢ってみたいは、そうですよね（おうてみてえいやあそうよな）
此処で自然、なしくずしに休憩は打ち切られる。
以下、和哉が中心になって語ったもの。（とはいえ...）
水曜日（7月30日）晴れ。福山駅からタクシーで茨の額田邸に行く時に。親子會話。

和。雨、ここらへん降らなかったのかな？（前日まで何日か連続雨だった。故、家を出る時（早朝）路面も濡れてた。...と。是、和哉の談話。）

深。島だから、島だけ降ったんじゃないの？

真。降ったよ。乾いたんだよ。

深。なんでわかるの。

真。天気予報。

運転手に聞いたら、実際雨だったらしい。路面、もう乾いたみたいですね、云々。

これは、いきな額田さんとの邂逅の話をしかけた夫の話の腰を折って、奥さんの方が話し始めたものなので、それで妙に印象に残ったもの。

茨の西蠅原町は結構なさびれたところで、運転手に見せた住所をカーナビも正確に示してくれなかったらしい（地図データにアップされていない細かい道が...）。で、散々迷う。あるとき、真夜がとつぜん、道を指示しはじめる。まっすぐ、そこみぎ、とか。運転手笑う。わしよりくわしいんじゃないのういゆうてからわろうとられたんじゃないけえどが...（県道何號とかなんとか道を謂っていたが、はっきりいって私には判らない。）

四面畠の真ん中に（山際の段地）一軒家あり。真夜羽云、あれだよ。

タクシー止めて表札確認、たしかに額田、と。ここで親子は降りる。

呼び出しベルならしたら、フェイスブックで見た女の人がドアを開けた、と。一瞬デジャブ感じました、と和哉。

最初、応接間に通されて、一通り話す（時節の挨拶、家を褒めて、町を褒めて、それから転生談...）。額田驚くそぶりもない。和哉曰く、冷たい感じの人で（美人なんだけど、ひやっとするかんじの...云々但し方言）。

私。奥さんに問う。どんな感じの方だと思いました？

奥さん。いや、ふつうに親切で、...若くてね...と。

私。真夜羽に問う。真夜はどう思った？

答えず。

私。お母さんにあったんじゃない？ もうひとりの...比呂美の方の（間違い）。

真夜羽。比呂斗だよ。ぼく（保久）女じゃないよ。

私。比呂斗の。

真夜羽。見なかったよ。

私。なにを？

真夜羽。ぜんぶ（ぶ）

私。なんで？（と言いかけた時に、唐突に深雪、そうなんですよ、このこ、おうちおじゃましたときからじいっと眼えとじてうつむいってからに杳ぬがすときも眼えとじとるからもうこのこ挨拶ぐらいいいいうて...云々）

私。見たくなかったの？

真夜羽。見れらな、見られ、見らるい

私。見られない?...見れない？

真夜羽。お母さん、ぼく、何回もころしたもん。（此の時、此の子は精神病院に連れていけ、と私は思った。おじいちゃん、おかあさん、なんでも殺したから、殺したから、と。一度カウンセラーに掛ける、と。ぜんぶ虚言だぜ、と。）

私。おかあさんも。

眞夜羽。殺してないよ。殺せないよ。けど。殺したよ。ぼく。ぼく死んだから、ぼくが死んじやったからね、おかあさんの心、ぼく、殺したよりむごいよ。だから、何回も、毎晩ころしたよ。ころすより、もっとむごくころしたよ。(むごい、方言、ひどい、残酷な、) (此の時に深雪唐突に泣き出す。すすりあげる。しゃくりあげる...母の共感?)

私。じゃ、見れなかったね。

眞夜羽。見られなかったよ。

和哉に話の續きを促す。即ち、額田さんの方の比呂斗くんは、どんな次第だったんですかね?

額田曰く、

額田比呂斗くん。六歳で亡くなってます。一年前...いや、眞夜羽が生まれる、一年前ですよ。

私。そもそも額田さん何歳?

和。今、二十六...じゃなくて、七? 逢った時、六。そのあと、誕生日あったよな。

深。プレゼント送ったげたな。眞夜な。(と眞夜に)

和。くまのぶーさん

深。りらくまよ。昔の。中國製のやつな。

以下、傳聞をまとめる。

額田比呂子、生年1992年。誕生日9月20日(たしか北斎と一緒にじゃない? 違うか)。

2006年(14)、2月12日、比呂斗、生まれる。(未婚)

2008年(16)、アルバイト勤務(スーパーレジ、サニーマート茨中央店)

2009年(17)、アルバイト勤務(飲食店ホール、すし三郎茨駅前店)

2011年(18)、アルバイト勤務(パチンコ・スロット店、アルバトロス茨)

2012年(20)、6月21日、比呂斗(7歳)、死ぬ。

同年、アルバイト勤務(接客、パブラウンジ順(茨))

2013年(21)、6月20日、眉村眞夜羽生まれる

2014年(22)、アルバイト勤務(接客、ナイトバー X girl 茨)

2016年(24)、高長恭介(当時52)と結婚。養子縁組。

2019年(27)

詳細。

・比呂斗出産について。(以下問は久村。)

問。14歳で出産?

和。詳細は聞きかねた。本人曰く、大變でしたよ、と。

問。父親は?

和。知らない。聞かなかった。

問。未婚出産?

和。たぶん。

・高校進學等

和。していない。育児に追われるから。

深。アルバイトを轉々と。時に掛け持ちで。

・家族等。

和。母親はいたと思う。

問。確認しなかったのか？

和。初対面で聞けることと聞けない事がある。母親の話はしていた。出産を応援し育児を手傳い支援をしてくれたと。他の親族に対する恨み言を謂っていた。

問。どんな？

和。口先ばかりで何の役にも立たないと。

問。今は母親と同居か。

和。いなかった。新しい位牌があった（比呂斗のとなり）。それがその母親なのではないか。

・比呂斗の人と爲り

和。いるのかいるのかわからないような、けど素直な子。そう云った。

深。おとなしい子だったみたいだ。

・比呂斗死因。

和。詳細は知らない。苦しまずに死んだのがせめてもの、と。そう云っていた。

深。おそらく病死だろう。

問。なぜそう思ったのか。

深。さいごのころは、やつれちゃって、いたいたしくて云々の述懐を聞いた。

和哉には違う印象を与えている。意外そうな顔をして曰く、交通事故とかじゃないの？と。なんでそう思ったんですか？ 答え、突然だったからね、びっくりして云々云っていた、と。

・高長氏について。

和。年配の自営業社長（建築業）である。

勤務の水商売店で知り合った。交際、最初は断ったが、遂に承諾した。

「家の跡を継がなければならないので」養子縁組でお願いした。

高長氏は現在天涯孤独の身の上である云々「おたがい、自由な身の上だから、お互い、たすけあいましょう」そう云われて心をつい赦してしまって云々の述懐を聞いた云々。

深。テニスが趣味である。ラケット等が玄關に置いてあった。

問。奥さんのじゃなくて？ 確認したの？

深。あれは男の持ち物だ。

問。なぜ？

深。ブランドものの（と深雪は云った。思うに、スポーツ用品メーカーの）カバーにしまわれていたから。（これ等の根拠はあくまで深雪のもの。）

私が不意に押し黙って仕舞った一瞬（たしか、高長氏のプロポーズが云々の話（自由の身の上だから...）のときに、なんというでもなく、次の質問を考えるともなく考えて居る時、そういう一瞬だった。）

眞夜羽が低い聲を喉から絞り出す（謠う時の聲？ 變聲期前の聲なので、かなり異質な響きに聞こえたとは和の述懐）。

その聲の語りたるところ以下の如。

乎乎乎乎

乎乎乎乎

比伊伊婆阿阿理伊波阿阿阿伊彌阿阿

比伊伊婆阿阿理伊波阿阿阿伊彌阿阿

阿阿米邇伊伊迦阿氣衣衣衣流字字字

多阿阿迦阿阿由宇玖字字字夜阿與波

波阿夜阿夫字字佐阿和阿阿阿氣衣衣

佐阿阿邪阿阿岐登於於於良伊佐阿泥

乎乎乎乎

乎乎乎乎

女鳥比賣の歌、か。

クセのあるフシ。高低上下激しい。今の感覚では、あきらかに異物感あり。

一同啞然 (...というより、白けた感じというか。今思えばもっとおどいてもいいのだが、不意に入った横やりにそれとなく鼻白む體のもの...)

佐伯祖母 (佐伯で馴れている?) ややあっていきなり笑い (邪氣も無く)、云、
あらお上手ね。

眞夜羽、我に返ったふうに上目遣いになって佐伯祖母を見る。後、周囲を見回し左見右見して顎だけひいて目線下げず。私の傍ら通り過ぎた方を見る (そこに「顔」があったとか?)

私。それで、その方... 額田さんとはそれから?

深。いまも。時々は。

私。奥様が?

深。主人が。

和。深雪はあんまり、この件にはふれないようにしてるんです (ふれさせ、とは言わなかった。たしか。ふれないように、と)。

私。いろいろ、心勞... なんだろう。氣味悪いとはいっちゃいけないだろうけど、此の世のことじゃないことは、ま、なんだろう、或る種、薄氣味悪いっていうか、女のひとには、

深。主人がふれさせないんです (わざと咎める不満顔)

和。今、そっとしときたいんで...

深雪、笑う。

此處で佐伯母が遅れて聲を立てて笑った。わたしの耳にはどうにもなじまない落ち着いた声。

佐伯母、謂う。できたの?

私、察する。

深雪、答えず、一瞬眞夜羽に一瞥、私を見て、わたしに頷いた。佐伯母、おめでとうなあ云々。

あとは深雪の妊娠に関する雑談に終始。なんでも四か月とか。いずれにせよ、おめでたいにはちがいない。

別れ際 (眉村親子が先に返った。佐伯母、祖母、私で見送った。あと、婆や的なひと... 親戚の人なのかな? 80代?) 眞夜羽、車に乗り込む時に (さすが田舎。全部車移動だから

ね。)いきなり振り向いて云、(俺に。)

先生、僕の言ったことが全部、ほんとうじゃないよ。

(せん(ム)せ、ほくのいゆうたんかあしえんぶ(ぶイ)ほんましあねえからな)

全部が本当の全部じゃないからね。

(しあんぶ(ぶイ)かあほん(ム)まのじあんぶ(ぶイ)やアないからな)

違うからね。

(ちあうからな)

わかってね。

(わかてえな)

(方言、及び、舌ったらずの訛り——言語障害? 軽度の?)

親子が歸ると佐伯祖母(もう九時だったので)これで私は失禮します、疲れましたので、と(これは標準語だった。大阪人がしゃべった標準語みたいな標準語)。

佐伯母と婆や残る。玄關先で(土間口、とでもいうのか。廣い。ここの舊家の様式?)暫し雑談。

佐伯母云、そうそう、ええもんみせてあげるわ(いいものを見せてあげるわ)。(～わの「わ」は標準語の「～だわ」の「わ」とは別物。もっと泥臭いニュアンスである。)

こっちへ来いと(こっちきてえ)いうまにまに奥の和室(尤も、此の居宅の中は和室ばかりなんだが)に通される。

とりたててもったつけるともなく筥の中からとり出したのは朽ちかけの笛袋で、中には尺八らしきものがある。

是なんか古いんでしょう? 失礼、こういうの、疎いもので、と。笛袋を響める。紺色。龍の錦絵あり。

答。たいしたことない。それは、明治の。すぐ朽ちるのよ。笛袋ばかり。

私。中、拜見して構いません?

答。どうぞ。そのために呼んだので...と。笑う。

中からは尺八。一本の竹で作ったもの。年代古い。篠竹のようにも見える。筒の中に朱の漆。指孔にもまるく朱漆。藤で(龍笛のように)歌口の下、指孔の間、それらその下に藤巻き。故、雅楽っぽい外観。おそらくそれらは補強を兼ねてということか。眞っ縦に二つに割れた裂け目が竹の肌を張っている。割れたものを繋ぎなおした、ということなのだろう。

佐伯母。吹いてみる?(ふいてみりゃあええ)

私。尺八? 吹けないんですよ。

佐伯母。残念ね。いい笛よ。時々騰毗(トビ、当主の名)が吹くのよ。割れててもいい音。でも穢いのね。

私。穢い? 音が?

佐伯母。いや、唾よ。唾液。わたしは我が子だから何ともないけど、ほら、尺八って、音はきれいんだけど、澄んでてね。でも下の口からこれみよがしに唾だらだら垂らすのよ。見苦しいくらい。水たまりになりそうなくらい。これなんか特にひどいの。

私。これ、相当古い物でしょ。

佐伯母。古くても、大して意味なんかないのよ。笛と違ってね。お神樂笛やら、龍笛やら

とね、あれと違って...尺八なんて、もともとは自分で青竹切って、自分でこしらえて吹くのが本当だもの。此處の沙羅寺の...嚴島沙羅樹院のね、圓位さんっていう坊さんが、そう云ってらしたけども。それもどうかね。やっぱり、古けりゃふるいで価値あるもんじゃないの。

私は笑った。いつくらいの尺八なんですか？

佐伯母。昔、つがいの一節切もあったのよ。それ、ぬすまれちゃって。今はどこにあるんだか、まだしも大切にされてりゃいいけどね。源平の比。

私。さすがに。宮島だから。

佐伯母。イワクあってね。聞く？

私。話したいんでしょ。

佐伯母笑って。いい話なのよ。...と。

語られた話は以下の如。

徳大寺の大納言實定、嚴島詣での後その神主等連れて京に上る。

その一群の中に笛師阿和丸というものがいた（雅樂師）。

阿和丸は言語障害があった。保元の亂のときに眼の前で親が切られた、と。（異説に藤原師長の子。）

此の時より今でいう失語症になる。（異説に齡五つ鬼憑きの爲に棄てられた云々）

年若く当時十八歳。美貌。

阿和丸を謳ったという田植え哥が広島（安藝）本土に残る（尤も、寛永二年奥書の寫本。江戸時代の歌？）

あわくうた あわくわれけな
あわくうた あなやはづかしあわくうた
せんとけせんとけ ほらんとけ
あわくうた あわくわれけらの
あわばくうたで

男色の歌か。もともと京のぼり的人数に入っていなかったが實定が是非にというので同行し、先々で笛、尺八、で喜ばせた。

清盛の二條殿に詣で、そこでも吹き浄海清盛を愉ませる。

後、清水寺に詣でる。笙をよくした雅樂師伽羅子（おそらく男）と連れだって一群にややおくれて隨う。（地位の爲？ か）

時は早朝。不意に周囲が暗くなったので不審に思う伽羅子。阿和丸に尋ねる。

雲もないのに空ばかりくらい。これはなぞや。

日はただけども空は猶くらい。これはなぞや。

阿和丸は應えない（失語症なので）。

阿和丸のしている方を見ると清水寺の舞台の先の中空に女のひらひら舞う衣を纏うのが漂っている。

伽羅子云、

あれは天人か？（あんらあてんぢよかよ）

空を舞うなら天人ぞ（そんらとばてんぢよぞよ）

天女、ふたりの前の来て漂い浮かびながら言う、月の宮に來ませぬか。わだつみの宮に

來ませぬか。それとも濁世に汚れておいででよいか？

伽羅子答える。月宮と海宮どちらが美しいか。

天女。月には花が匂う、わだつみには花が薫る、と。

伽羅子。海には潜ったことがある。空をは飛んだことがない。そらみつ倭國というならば、是非に一度空に見ん。

月に、と。

天女。お前は月に、阿和丸はわだつみに行けばよい、と。

伽羅子。否。我等は二人で一人のものぞと。

天女。ならば一度音を聞かせよ。

それめでたければふたりで月に、と（それぞめでたくばあまつみそらにあまつみそらにふたりして...）

伽羅子、阿和丸に吹けという（やれやふきやれややれやふきやれや）。

阿和丸、腰に提げた尺八を取り、吹く。

その音の妙なること飛ぶ鳥も地に墜ちるがほどに、と。

伽羅子しばし聞きほれる。

時に見れば陶酔の天女、九つの蛇に身を食い破られ食い千切られしなが身をくねらせる和邇（鰐、乃至鮫）の姿で舞っていた。

我に返った天女、激昂する。何故我がまことの姿をさらさせたかと。

于時神鳴り中天より炎真すぐに落ちて阿和丸を焼く。

稲光の閃光きえれば天女の姿はすでない。

氣付けば巖島神主ら一團が失神の伽羅子らを囲んでのぞきこんでいる。

問う、いきなり悲鳴を上げて後ろ向きに倒れたかと思えば何事か、と。

伽羅子、事の次第を語る。傍ら、未だ眠り醒めない阿和丸をゆする。

阿和丸は既に死んでいた。

黒目の無くなった顔の兩脇に眞っ二つの尺八が轉がっていた。

此の話、寛永年間印本安藝國神樂集成卷二に阿和舞の名であり。

これには伴信友の巖島神社縁起考にも考察あり。

○久村文書 A 付録（久村文書 A とは別に送信されたメール本文）

今、安藝の宮島に来てます。巖島神社。知ってるでしょ？ 平家の島。

何のかんのいって、本州からすぐそこなのね。メコン河わたるより近い感じ。前、一書に渡ったね。そっちで。フィンさんは元気？

ちょっとした奇跡の話。

今回、佐伯さんっていう巖島の神主家の人の家に伝わる平家物語の異本があって。それ、拝見しにきたわけ。いままで秘匿してたらしいね。所謂古き良き糞日本人の「眼垢が附く」って精神ですか？ 笑

加賀いるでしょ。あいつに聞いて。その佐伯さんたち口説いたのね。手紙とかで。今時。笑。二年がかりくらい。曲折あってね。おそらく佐伯当主の耳に入る前にその母上祖母上の段階でシャットアウトされてたっぽい。当主が東京に観光にくるってときに（是、加賀が連れて来たんだよ）俺呼び出されて、表参道とか、案内したの。当主曰く、明治神宮には神がない、いや、東京には神がない、ときた。笑わせる。田舎者だからね。

其の時、平家の嚴島本について聞いたわけ。見せていただけないですか？ って。ネコナデ聲ね。

そしたらいいよって一言。そういう、事の経緯ね。

なんやかんやあって、久しぶりここら辺来たけど。鹿、少なくなったね。鹿も少子化ですか？ 島でなんやかんやあって、鬼門の母上祖母上とも仲良くなってね。ときに母上とはね。いろいろ貴重品見せてもらったり。

そうこうしてると、ホテルに朝、電話かかってきて。というか、ホテルに宿泊してる俺のスマホの Line に、な。正確には笑。早朝。六半。いますぐ来いとよ。

馬鹿？ って思いながら、さすがにまだいろいろ持ってそうだから。いやな顔せずに行ったわけ。歩いてな。すぐ近くなんだよ。十五分くらいか？ 近くはないか。

自宅にね、中庭あって。山の中腹。血相変えてね。玄関口で。奇蹟よ、奇蹟よってね。どうしたのって思う俺を。ほとんど。拉致状態。笑。えり首つかむ的な勢いで奥につれこんでさ。中庭に。

ま、びっくりしたね。庭。石庭なんだよ。縁と白壁に囲まれた、ね。真ん中に松が一本だけ立ってる。空虚な庭。そこだけ...それと周囲の屋根のほんの端っこにだけ少し...雪、積もってるの。

8月だぜ。

これは...って思うじゃない。隅の方の石とか、くねらせた植木とかもね。みごとに。真っ白。

正面の縁の真ん中に当主が胡坐書いて座っててね。せっかくだから、舞をみせてあげるって。もともと土地の猿樂の舞だったって。安徳天皇が題材になってるらしいね。その怨霊が雪の日、海に海の振る日、壇之浦の対岸に吹雪に渡りあぐねた旅人の前に現れて。その最期の次第を（浪の下に都はありと告げしひと、ひとりさきだちて物狂ひ騒ぐわだつみの底のうらめしさよ...とね）語り、舞う、と。

佐伯当主、雪の庭に裸足で降りてね。一人舞う。

夏の雪。

見上げれば青の夏の天空、眼を下ろせば雪だらけの白の中ちいさなちいさな舞人の影。なかなか、見せつけられたね。尤も、自然の偶然の戯れ、でしょうが。

夏八月雪ふりて佐伯母作歌

もみぢ葉の錦着ぬ間にときならず

冬し來たらるらし雪をし着れば

同じとき久村作歌

夏のうちに雪はふりけり年のうちに

歳はゆくらしひとりゆくらし

ひどいね。平家研究家の風下だにも置けぬとか。

笑。

○久村文書 A 付録（謠本陵王についてのもの。久村文書 A とは別に送信されたメール本文）

お疲れ。添付は最初の佐伯宅の会合の時にお借りした本。（古寫本。クセつよい悪筆だね。すさまじく）

内容は佐伯母（高四（多迦與）さん。四人姉妹の末っ子だったからとか。）に聞いたものとは大きく違う（まったく別）。記憶違いか。乃至、同じタイトルの違う本を間違えて渡したか。乃至、タイトルを間違えて覚えていたのか。

是は此れで面白いもの（添付の画像はデジカメで撮った写真版）。

内容がいつまむと、こちらは單純に蘭陵王高長恭の話。異説というべきか。（龍王面由來にかかるものではない。）

是は北魏の、とある（間違い）。

設定として、陵王は憑きものの病に侵されていた、と。所謂「癩病」か。とはいえ、此の時代...かつての物語神話等に見る「癩病」、あれ一體なんなんだろうね？ 悪化して合併した超悪性の梅毒の一種？ なんなんだろう？ 糜れた身を七色の衣と面に隠し、とある。一か所、糜れた顔を、と。癩字は糜字の誤りなのか。デフォルメ？ いっそのことフィクション？ いずれにしても現存しない病ということなのか、或はそれが現代との衛生状態の違いということなのか。

河間王孝琬、お兄さんだね。殺されちゃう人ね。時の皇帝に。北齊書列傳。

孝琬以文襄世嫡、驕矜自負。

河南王之死、諸王在宮内莫敢舉聲、唯孝琬大哭而出。

又怨執政、爲草人而射之。

和士開與祖 諧之、云「草人擬聖躬也。又前突厥至州、孝琬 兜鍪抵地、云『豈是老嫗、須著此』。此言屬大家也」

初、魏世謠言「河南種穀河北生、白楊樹頭金雞鳴」

以 曰「河南、河北、河間也。金雞鳴、孝琬將建金雞而大赦」

帝頗惑之。時孝琬得佛牙、置於第内、夜有神光。

昭玄都法順請以奏聞、不從。帝聞、使搜之、得鎮庫稍幡數百。帝聞之、以爲反。

訊其諸 有陳氏者無寵、誣對曰「孝琬畫作陛下形哭之」

然實是文襄像、孝琬時時對之泣。

帝怒、使武 赫連輔玄倒鞭撻之。孝琬呼阿叔、帝怒曰「誰是爾叔。敢喚我作叔」

孝琬曰「神武皇帝嫡孫、文襄皇帝嫡子、魏孝靜皇帝外甥、何爲不得喚作叔也」

帝愈怒、折其兩脛而死。

謠本ではこころへんが改變されてて（それとも異説？）全部蘭陵王長恭の讒言によるものだった、となっている。だから毎日正午に鳥となって長恭の頭の上を舞っていた、と。そうしたら長恭は先の「憑きものの病」に憑かれる。死に懸けの陵王の前に現れた鳥＝河間王は歌い、踊る。いまがお前の最後の時ぞよ、とね。時に皇帝の使いが来る。毒をもってね。此れを飲んで死ぬ、と。北齊書に言う、此処のところ...

武平四年五月、帝使徐之範飲以毒藥。

長恭謂妃鄭氏曰「我忠以事上、何辜於天、而遭鳩也」

妃曰「何不求見天顔」

長恭曰「天顔何由可見」

さらば、と、謠本の中では長恭は鳥＝河間王に言う。是はお前の讒言によるものか。

鳥＝河間王は謂う、俺はしらぬ、と。俺はただお前をこのまま生きながらにいついつまでも苦しみ続けさせたいのが本望。だれがお前のすみやかな死など望もうかと。

長恭は謂う、死んでも地獄の攻めに逢う、生きても無間の苦痛に悩む、と。

河間王の姿が見えない妃はならば逃げてくださいという。いつか日之下を歩けるようにあるでしょう、と。烏は謂う、毒などすてて生き延びよ、と。永遠にわたしに苦められ続けよ、と。

追い詰められた陵王は隠れて終にひとり毒をのむ、それ泡沫と知りながら、そのうたかたをとどめんとせし愚かさよ、云々。かくて残され歎くものふたりあり、人と、かつて人だった怨霊と。

ひとは愛しいひとを無くして泣き、もうひとは終に復讐をとぎらせた無念に啼く。

ここで夢が醒める。河間王がいま両手梁足を絶ち切られて死のうとする断末魔の苦しみの中に見た一瞬の夢だった（それ刹那の夢永劫苦悶の奈落にひとし云々）未来を見た。たしかに。そして未来にだにも救いのかけらさえなかった、と。故ただ絶望してこと切れる...と。

好き嫌いはっきりする内容、...ね。

ただ、文は藝がない。そんな気がするね。世阿弥観阿弥にくらべると、ね。そっけない。ただ、尊氏の歌の引用があるね。河間王の獨白で。たぶん、そうだよ。風雅集だったか玉葉集だったかに入ってるやつ。あやしい記憶だけだね

文書 2 - 前半

文書 2 (前半)

私記。

以下は久村によって九月朔日に送信されたもの。

○久村文書 B 前半

額田比呂子邂逅記。

8月26日。佐伯騰毗から Line。

佐。巖島にいつまでいますか？

私。29日の予定です

佐。茨にいきませんか？

私。眞夜羽の件ですか？

佐。眉村から連絡があつて

額田が逢いたいと

私。比呂美さん？

佐。比呂子

私。茨って遠い？

佐。近くはない

県外だから

佐。那須与一

知ってる？

それで有名

私。与一って茨の人でしたっけ？

佐。所領

たしか

兜が埋まってるらしい

伝承

ただの伝承

私。いいですよ

私。いつ？

佐。じゃ明日

佐。明日こっち来て

うちの法

佐。方

同日。巖島沙羅樹院（眞言宗寺）に詣。住職は圓位。70代。若く見る。たぶん、うすく香

水をつけている。最初香が匂うのかと思った。袈裟について匂いが変質したのかと。おそらくボワゾン系のもの。たぶん。あやしいね。

寺から四國の方の海が見渡せる。

天気は曇り。朝方晴れていた。昼近くに雲が掩う。濁った色。海の面が白く染まる。今年には雲が多い。

圓位に閲覽を願ったのは清盛の書寫と云われる鳩摩羅什妙法蓮華經の序品第一の前半断片。圓位曰く、本來全卷そろいだったと。南朝正平 22 年、北朝貞治 6 年、西暦のおよそ 1367 年の沙羅樹院焼失（一説放火）により焼失した、と。現存はほんの半切れ四枚のみ。思えば焼失した後半にはこうあったはずだ、即ち

其後當作佛 號名曰彌勒 廣度諸衆生 其數無有量
彼佛滅度後 懈怠者汝是 妙光法師者 今則我身是
これも考えようによっては一つの轉生談には違いない。

字は（楷書なので）代り映えしない（見る人が見れば違うのだろう）。そもそも眞筆かどうかとも怪しいだろう。

圓位が茶をいれてくれる（離れの茶室で）。

圓位曰く。輪廻轉生についてお調べみたいですね？（是は奇麗な標準語。ちなみに、ここにはないのだが、「此れが本です」とかの「が」、こういう「が」が「ンが」の鼻濁音になる昔のお江戸上流發音だった。土地の人じゃ無いと思う）

私。だれ情報ですか？ それ。

圓。佐伯の笹予（佐左與）さん（祖母のほう）。

私。いや、調べてないですよ。平家の、嚴島本...佐伯さんのところの。あれ、調べにきただけなんで。

圓。あれ、見られた？

私。平家物語？

圓。あれ、偽作よね？

私。偽作といっても、なにを偽るといって、元が物語のその異端本ってことなので。まあ、修正はなはだしいですね。

圓。あれね、元雅が書いたらしいのね（此の「が」音。是が鼻濁音になる...）。

私。だれ？

圓。世阿弥の息子。

私。殺された？

圓。そう。その人が書寫した...改變した？ 本の書寫らしいね。きわものよね。

私。でも、こう思うんですよ。書かれたものに正統もキワモノもないと。それぞれの必然にそう書いたんでしょ？ だったらその必然性の存在故にその限りにおいて正當である、と。史實から云えば單なるウソ出鱈目でもね。その嘘をついた理由を解き明かせよ、と。それこそ本質である、と。

圓。でも、そんなの判らないんじゃない？ 終に...

私。そう。だから此の年になって異端本見に宮島くんだりまで來てるわけです。單に風狂の人なんですよ。學者って。

又、圓位の笛を聞く。龍笛。小亂聲。なかなかの名手（尤も、私のあかるい分野ではな

い)。笛は漆に墨を混ぜて塗ったものようだ。全体的に黒光りする。雅樂の笛には見えない。筒の中までも黒光。それ以外に色はない。拜借し、私。是もお寺のですか？ 圓位。いや、わたしの。

由來、なにかありますか？

敦盛の笛。取りに帰って、切り殺された、あれ。

本当に？

嘘よ。多分ね。だから薄墨色でしょ。後の、...江戸時代じゃない？ そうやって仮託して作られたんじゃない？

圓位謡う。

それ世には隠れもあるまじきぞ

たゞ某が首を取て汝が主の義經に見せよ

見知る事もあるべし

それが見知らぬ物ならば蒲の冠者に見せて問へ

蒲の冠者が見知らずばこの度平家の生捕りのいかほど多くあるべきに引向けて見せて問へ

それが見知らぬものならば名もなき者の首ぞと思ひて叢に捨てゝの後は用もなし
是は幸若舞の敦盛。

8月27日。雨。今に年の夏は雨が多い。氣が付いたときにはいつも雨が降っている。

早朝（7時）佐伯宅に行く。

佐伯母（與四）。こがあんはようにどうされたん（こんなに早くにどうしたの）？

私。息子さんと約束があつて。

奥に引っ込んで、もう一度ひとりで出て來た時には訝し気な顔。

申し訳なきように（そういう顔をいきなり作って）曰く、これ渡したげって。...住所。

メモ書きを差し出される（コンビニ売ってる安いメモ帳を破ったもの。鉛筆書き）。

私。当主は？

佐伯母。一緒にいかれるはずじゃったん？

私。そういうことだつたと思いますよ。

佐伯母。なんにも...氣が變つたんじゃない？

私は敢えてそれ以上突っ込まなかつた。そういう性格のなら諦めるか呆れるか以外にすべはないだろう。先方にアポイントを取つてあるのかどうかも不安になる。確認しようかと思つたがやめた。佐伯母、もう一度頭を下げた。

なんでもないですよ。

ごめんなさいね。

もう慣れました。笑う。

フェリーで本土に。山陽本線、という路線だったか。思ったより本數があつて安心したが、それに乗って岡山に。路線に迷うことはない。乗ったら終わり。乗り換えなし。田舎だからね。

山間部を通つて行く路線。雨の中に薄く霧れる。樹木の葉が濃く、いっそう濃く、目に染みるようにも濃く、シカズガニ白濁して煙る。これはこれで美しかった。

福山で降りて、そこで茨線というローカル路線に乗れと（アプリのナビ）謂っているの

だが、いかにも本数少なそうで。タクシー。運転手曰く、遠いですよ、と。

いいよ、行って。

ドライバーは三十代の女の人。いかにも美人で化粧が濃い。田舎の美人は化粧が濃くなる。あれ、なんで？ 苦勞してそうな人。額田女史じゃないけれども、子供連れて離婚したタイプだね。公団住まいじゃない？ 親切な人だった。愛想わるいけども。

質問。茨ってなにか有名な處、ありますか？

答。ないんじゃない？ 観光？ 観光で行くようなところじゃないで。

方言は、このあたりに来ると耳あたり若干柔らかくなる。ぐずつく、ともいう。ぐじゅぐじゅした感じ。

此の時は、額田さん宅に直接行ったのではない。先に眉村が出向いたときにそうだったように、相当の僻地にあるので（失礼）駅前の市民會館の一階の喫茶店で待ち合わせる、ということだった。

フロントガラスの雨の音を聞き、流れる雨の線の無数の向こうに静かな河を見る。土手を通ったから。低い山のつらなり。つらなる、ともいえない、いいかげんな連続。

二十分くらいか。三十分には至らないくらいで運転手曰く、「ここが駅前」といっても何もない。あるのは只管ひろい道路。それだけ。申し訳程度の駅前ビル。閑靜。過疎。こんなものか。

どこでどうすればこんな町にこんな建物が立つのか不思議な、それなりに立派な鉄筋コンクリ建造物の横で止められて、此處ですよ、と。

昔のコンサートホール風の建物。今日の演目はカラヤン指揮ベルリン・フィルによるブルックナーの...的な。人はいない。

すぐ横のブロックには木造住宅。道は廣い。

運転手が無理やり歩道に乗り上げて無茶な停車しようとするわけ。いいよここでっていうんだけど、血相変えていや濡れるから、濡れるから、と。無茶苦茶で無理やりの親切。笑うしかないね。

場所はすぐに判った。一階のといっても、建物の大通り沿いにガラス窓の店舗スペースが作ってあるだけ。そこに入ると、所謂純喫茶の匂い。むかし新宿にアカシアってあったね。ああいうの。むかしの風鈴會館の廣かったころのパリジェンヌとかね。

中に客がいたのでびっくりする。尤も3、4組くらい。ひとり、ひとり、さんにん、...とか。誰もいないだろうと、思うともなく思ってたので、別の世界に入り込んだような気さえした。それくらい外は人がなかったから。

窓際の席に座って待つことにする。佐伯騰毗が渡したメモに書いてあった時間は11時半。ついたのは11時二三分前...喫茶店の壁時計が遅れてなければね。

暇つぶしの手段は決まってる。古今集。冬。

志賀の山ごえにてよめる 紀あきみね

白雪のところもわかずふりしけば

いはほにもさく花とこそ見れ

いかにも古今風の錯亂。雪は花。花は霞。霞は春。春は花。ふる雪にふる年はふるびた白髪それは雪。白髪なす雪はわかやぐ花こそ雪とまがいて雪は冬で櫻と雪と霞のあたりまえ区別もつかなくなり、春と冬の區別だにもつかない。うつくしい、しかれども結局

残るはただの錯乱、赤裸々なまでの渾沌、と。古今の理知は、いわば狂氣に至らなければ気が済まない理知とも思えるが如何が？

梅の花に雪のふれるをよめる

小野たかむらの朝臣

花の色は雪にまじりて見えずとも

香をだににほへ人の知るべく

この歌について、全く縁もゆかりもないのだけれども俺は思いだす、書紀。古天地未剖、陰陽不分。渾沌如鷄子、溟滓而含牙。淮南子の引用には違いなくとも、見てる風景は違うよね。有始者、有未始有有始者、有未始有夫未始有有始者。有有者、有無者、有未始有有無者、有未始有夫未始有有無者。渾沌どころか、理知的に割り切れてる風景でしょ？論理的な風景。ところが、書紀の方は、——典拠をばくりながら、飽く迄渾沌は渾沌に過ぎない。

ただ、キザシが含まれ、綺羅めくのを見たような気がする、と。それだけ。書紀の風景は篁の歌に近い。そんな気がする。ことごとく白い。けれども、そこには梅が匂いさえせず含まれていたのだ、と。故、渾沌の純白のうちにせめて匂え、花よ！と。

賀。

題しらす よみ人しらす

わたつうみの濱の眞砂を數へつゝ

君が千歳のありかずにせん

濱の沙の數、とくる。佛教風にいうと恒河沙の數までも、かね。歴大な時間には違いない。歴大な。轉生の眞夜羽はこの哥をどう読むだろうね。理解できれば、ね。もし彼の謂うのが妄想や狂氣でなければ、彼は恒河の沙、濱の眞沙よりも歴大な時間を貪ってきたことになる。未來までも、ね。

このあたりで、女の匂いがした。

すぐ頭の上に。誘惑的とは言えない。ただ、鼻について、嗅ぐのをさえ忌ましくおもうような。乃至、恥て思われるような。なにを羞じたとも言えない儘に。うまく言えないけどね。見るとそこに思い切った短髪の（眞夜羽ほどではなくとも、所謂スポーツ刈りの長め）小柄な女が立っていた。色は白い。全躰として透明感があるタイプ。故、色気はない。整った顔、スタイル、そして目を閉じたらどんな顔だったか思い出せない。思うに、すごい美人の顔ってよくよく見ると化け物じみてる。たとえば、昔の映画の原節子とか京マチ子とかそうでしょ？ グレタ・ガルボもディートリッヒも。そういうのどちがって、整ってて、それで終わり。ともかく、生き物の發情乃至平伏を喚起しない顔。それが、その綺麗きれいなお顔を残念なできそこないっぽく見せる。あと一つ大切なものが足りてないよ、つけわすれてるよって。何も性欲繁殖欲ないし支配欲被支配欲がすべてだなんて言ってないよ。あくまで印象の話、ね。

女。工藤先生？

私。工藤？...違いますよ。

女。...そうですか（笑って）すみません。...まちがいでした...

聲は甲高い。額から出るような聲。向こう向いて立ち去ろうとしたときに、私は氣付く。云、クムラ先生、じゃなくて？

女。クムラ？

私。クドウじゃなくて。待ち合わせてるの、クムラ先生。東京の、...宮島。巖島の、佐伯さん。眉村さん...

その時に女は訝し気な眼つきそのままに俺を見て、それからいきなり聲を立てて笑った。まさに、周囲をはばかりることなく。

曰く、そうです。佐伯のお母さんの紹介の（と女は云った）。じゃ、クムラ先生、なんですね。

私。ヒサムラってふうにはいつも間違われるんだけど、工藤さんって間違えられたの初めてだから。（ふたり笑って、）いや、だれそれって思っちゃって。...早くないですか？

女。10時半じゃなかったでしたっけ？

私。いや、11時半でしょ？

いずれによせ、即ち、それが額田比呂子その人だった。

会話の最初は初対面の挨拶的なものだよ。女の人だから、男同士でそれやってるときみたいな、本筋の話きりだす頃合い見て窺って探って除き見て、っていう、例のいやらしさはなかった。女のほうが素直だよね。乃至、こなれてるのか。東京にも二三次来たことがあるらしい。理由は聞かなかった。俺の仕事の話とかもしつつ、ね。巖島のいまの生活（この二週間くらいの）の話になった時に、比呂子曰く、すみません。お呼びたてして。

私。いや、ぜんぜん構いませんよ。

比呂子。ちょっと、これからどうしようかと思って。

私。どうしようって？

と、比呂子もちょっといきなり人生相談じゃないだろって思ったんじゃない。比呂子が一人語りに話してくれたのは以下の如。

・比呂斗の出産等について。

13歳の時（中学一年）妊娠し、明けて14歳（中学二年）の時出産した。出産は二月。場所は茨市市民病院、相当な難産だったという。

この当時の家族構成、母親額田朱美、父親額田洋一郎、兄額田比呂斗

但し、洋一郎は筋無力症で入院していた（2001年、比呂子9歳）。

兄比呂斗は一こ上、同じ中学に通う。陸上部。

最初母親朱美は墮胎をすすめた。比呂子拒否。

私問う、なんで？ 生みたかった？

比呂子答え、考えられなかった。墮ろすこと。だってあれ、スプーンでがりがりひっかくんですよ（是はあくまで比呂子の認識である）。考えられない。（比呂子の答えは基本方言。ふし廻しが標準語に若干近い）

問。育てる自信あった？

答。ない。というか、考えられないんですよ。そこまで。ただ、墮ろすはない。消去法というか、墮ろしのがないってことだったら、抛っとけば生まれて来るわけじゃないですか。

問。お父さんは？

答。入院してるし。云わなかった。気付いたと思うけど。

問。いや、子供の。

答。それは関係ない話だと思うんですね。あくまでわたしと比呂斗の話なので。

問。じゃ、...でも、知ってたんでしょ？ 彼は。

答。そうですね。見ればわかりますよね。

問。抛ったらかし？ フォローしてくれた？

答。だから、それは関係ない。

問。お母さんって、彼が誰か知ってた？ お母さんには、謂ったの？

答。いうわけない。

問。秘密？

答。話す意味がない。

問。聞かれなかった。

答。聞かれますよ。当たり前。母、先生、...学校の。病院の先生、看護婦のおばさんとか。もう、詰めるみたいに。それとか親戚。

朱美は親族の「笠原のおばさんっていうひと（笠原市のおばさんなのか、名字笠原なのか。是は聞き洩らす）」に相談する。ここで激しい反対と叱咤を受ける。これが逆に朱美をして比呂子の出産を応援さしめる結果になったようだ。

先の「笠原おばさん」の口傳に親族につたわり、親族からのバッシング苛烈。比呂子の恨み言を聞かされた。

妊娠八か月まで学校に通ったという。故、二学期の半ばまで、ということか。

二月に出産、此の時に事件が起こる。即ち兄比呂斗の自殺。理由は明らかに比呂子の妊娠にあった。

比呂子曰く、比呂子の妊娠があかみに出てから（先生からも呼び出されたし、母親と一緒に呼び出されもしたし、先生と一緒に家で家族會議もさせられたし、云々）兄比呂斗は虐められていた。（尤も、明確な痕跡があるわけではない。遺書曰く、行き場所がない。学校にも。家にも。どこにも云々から比呂子が認識したこと。又、比呂子曰く学校でいじめられている兄を見た、と。どんな？ と問うに明確な回答なし。だって、見ればわかる。あきらかによそ者扱いですよ。はれものに手を觸れる状態。云々、これにもさまざまに解釋が可能だろう。加害者（と比呂子が思っている側）に明確な排斥の意図があったか？ むしろ未成年の十代半ばの小僧どもがおなじ年頃の少女の妊娠というめったにない体験の中で、理路整然と比呂斗に居心地よく振舞えというほうが無理がある。そうも思える。もちろん、陰湿ないじめがあったとかも知れない...終にはわからないことだろう。

いずれにせよ、ある少年がいて、自分の妹の妊娠事件（妊娠だけではなくて、親族とのいがみあいだの、学校の中の混乱だのなんだの...）に追い詰められ、そして死を選んだのだ、と。その事実だけは存在する。...

出産の経緯。

2月11日。夕方6時陣痛、破水、茨市民病院に救急車で。通報者は兄比呂斗（朱美はパート。スーパーのレジ、サニーマート茨中央店、後の比呂子のバイト先）。

兄比呂斗は家に残る。時置かず比呂斗朱美に一報。バイト早上がり（遅番、10時半まで勤務）して病院に行く。

2月12日深夜（3時）比呂斗生まれる。同日。母親の携帯電話に電話あり。朱美病院

から外出（ちょっと用事でけたからな、ちょっと行ってくるからな、ちょっと待っとれえな）。そのまま歸ってこなかった（比呂子云、なんか大変なことが起きたことはわかった。問う、なんでそう思ったの？ 答え、だって、あんなに親身に世話してうれてた人が（と比呂子は云った）子供うまれたら生まれたで、見捨てるみたいに着替えも差し入れもなんにも、抛ったらかしでしょ。関係ない人みたいな。...かんがえられない。だから...）

2月13日朝（たぶん十時ぐらいだ、と比呂子）朱美病室に来て（普通の。普通の顔して、元気だった？ って、そういう感じで、ひさしいぶりのお見舞いに來ました、みたいな、そんな感じで...）朱美曰く、お父さんとお兄さんが死んだ、と。

比。死んだって？ だれが死んだの？

朱。でもな、さびしくはないから。ふたりだから。だから淋しくはないから。本望よ。

比。だれ？ だれ死んだの。

朱。あんたのお父さんと。兄ちゃんとな...

比。なんで？

朱。心配せんでええよ。ええんよ。あの子は、あんたが生んだ子はすくすく生きとるがな。

比。なんでお兄ちゃん死んだんよ。

朱。自殺じゃが。

比。自殺したん？ 自分で？

朱。首吊って。手首切って。舌咬んだ。

比。何よそれ。いつ死んだん。

朱。知らん。

比。なんで。

朱。警察謂わんから（発表は死亡推定時刻2月12日午前6時15分。およそ日昇時間）。昨日電話きて、それから行ったんじゃが。氣、しっかり持ちねえ、ええか、がんばれよいうて、それで教せえてくれたんじゃじえけえ。

又、父洋一郎は他殺。犯人は比呂斗。ちなみに入院先の病院は岡山県立大學病院。その病室で首動脈を切られていた。

比呂斗事件経過。（家族の歴史から纏めて置く）

1970年7月か8月（誕生日を比呂子は記憶していない。たしか夏ですよ云々）山邊洋一郎生、出身地は神奈川県。

1975年10月23日額田朱美、生。

1989年（結婚記念日、比呂子記憶せず）結婚（養子縁組）

1991年5月か6月（梅雨時と比呂子記憶）額田比呂斗、生。

1992年9月20日額田比呂子、生。

2001年洋一郎発病

2005年夏、妊娠発覚（比呂斗14歳）

同年末、二学期終了と共に比呂子休學

2006年2月11日午後6時くらい、救急に通報、比呂子出産の爲入院、比呂斗母に電話連絡。母病院直行。

この日何らかの交通手段で岡山市内の大學病院に行く。詳細未詳。

同日午後9時、父洋一郎の病室に面会に（此の時に洋一郎を刺殺。発見は直後。9時半の巡回に看護師が発見。通報。）

（発見されたときには病室に比呂斗はすでにいない）

同年同月12日午前3時頃、息子比呂斗出生。

同日午前6時15分頃、比呂斗自殺。場所は茨市西蠅原町小角（コズミと讀む）の賀山（カヤマと讀む）ふもとの蠅田神社（無人の神社）で頸を吊る（首をつつて、且つ、手首と足首を切り、且つ、舌も嚙んでいた、と。蠅子神社は自宅から徒歩二十分程度の距離。歩いたようだ。）遺書ズボンのポケットの中にあり。

同日午前中に茨警察署から母朱美に通報あり。朱美署に出頭。

此の時に、大學病院の刺殺事件及蠅子神社の自殺事件を聞く。

警官同行で市民病院に、そこで比呂斗の亡骸に對面。本人確認。

後、岡山市に移動、洋一郎の亡骸に對面。本人確認。

又、遺書を確認する。その遺書以下の如。

べつに死にたいわけではない。いき場所がない。学校にも。家にも。どこにも。未来にも？

風穴をあけようブレイクスルーこれでいいだろう？

いちばんよくてラクなのはなにか？あなたにとってだよ？

それってこれだろ？

うらむほどバカじゃない。ひろ

これは（おそらく通りがかりの）他家のポスト（住所は西蠅原町下田）に入っていた電気料支払い明細を捕ってそれに書きつけたもの。ボールペンがき。ボールペンは身の回りからは発見されなかった。書いて捨てたか。

自宅のある西蠅原町神戸（カンドと讀む）から小角の蠅子神社への道程から、かなり迂回している（渋谷駅から恵比壽駅へ行くために代官山を通過して行く程度）。

四十九日の法要の後に比呂子は自分の子供に名前を付けた。比呂斗、と。

以上。

後、比呂子は中學校とは話し合いの結果留年あつかいされることなく卒業している。単純に産後の育児休暇として半年見たとしても夏場には復歸できようものだが、

1 経済的な理由。洋一郎が倒れて後は朱美のパートと生活保護で生計を立てていた。親族への借財多量。比呂子出産に伴う関係悪化の爲に新たな借り入れが頼めないばかりか、返済が請求されるようになったので、とても通學している余裕などない、と（これは比呂子の解釋）

2 自殺事件、刺殺事件の余波。朱美及び比呂子の精神的負担過大なる爲。

3 自殺事件、刺殺事件の學校側への余波。復歸すれば他の生徒たちの動搖が甚だしいと判断。

これ等に関して比呂子はなんの非議をいうでもなくむしろ英斷だったという。判断は正しい、と。復歸した方がより「凄惨な結果」（比呂の言葉儘）をもたらしたに違いない、と（問、凄惨って、どんな？ 答、謂わなくて、わかるじゃないですか。それ以上は応えず。）

・存命時の比呂斗。

以下、比呂子の述懐を簡潔化し羅列すると、

かわいい子だった。男だがだれからも女の子に間違われた（私。この点、眞夜羽に似ていると思った。）

おむつをかえようとした朱美の顔にとつぜん放尿して笑わせたことがある（このこは元気でえと母は顔拭きながら笑って謂って...云々。）

言葉を話すのが早かった（二歳？ 三歳？ もう、すぐ。よちよち這い這いしはじめたと思ったら、もう、すぐ...云々）。

人見知りの激しい子だった（保育園でもなか友達ができなくて...内氣だったんです）。

比呂子の記憶。保育園に迎えに行くとき必ずひとりで櫻の木の下で待っていた（仕事の爲時間に遅れがちだった）。じっと、まっすぐに立ってまっすぐに門の方を向いて自分が来るのを待っていたと比呂子。

牛島という三十代の保母に折檻された（これは所謂ママ友に聞いた噂である。眞偽不詳）

いつも誰もいない空間を見つめて、物思わし気な顔をして居た（私。是は眞夜羽の謂う「顔」を見ていた？）

など。

その他、頭よくて。すごく物のわかる子で。私がちょっと悲しんだり辛かったり、疲れてたり、そしたら、察するんでしょ？ たぶん...いきなりなきだしたりするの（是は意譯。きつい方言で話した）

又、なんでもわかっちゃう。だから、なにも秘密にできなかったの。だから、おじいちゃんのこととか、お兄ちゃんのこととか、かくさず全部...自殺なんて、まだわからないのにね。たぶん、かわいそうな育てかたしました。若かったから...（是も意識。方言）
・比呂斗の死について。

2012年6月21日（以下には記憶違いや後の記憶の無意識的な加工があるように思える。しかも大量に）

まずその前日20日（曇りだったと比呂子記憶。気温が高く湿度が高かったと記憶。シャツの下の背中が汗ばんで...云々）比呂斗が紫陽花の花を見たいというので茨市の田中（デンチュウと訓）公園に連れて行く。（夕方）

空は一面の雲、白い。木立の翳りの下に紫陽花の紫...しらけた茶色と緑のくすんだ色あいの日影の中にそれだけあざやかな色彩...

頭の上で羽搏く鳥の音がざわざわと聞こえていた。決して見上げなかったけれど、と比呂子（問、なんで？ 答、だって、何か落ちてきたら嫌じゃないですか...）此の時に不意に振り返った比呂斗が云った。

おかあさん、花がさいたよ

そうだね。綺麗ねえ。紫陽花きれいね。

うどんだよ。鯉鮓の花が咲いたんだよ。

此の話をしている時、比呂子は聲を立てて笑った。そして云った、「おかしいでしょ（これ等悉く本当は方言で話している...詳細、覚えてない）こどもったら。うどんの花って...ね？ 鯉鮓って小麦じゃないですか？ あ、でも小麦も花ってさくのかな？ 咲きます？ 咲きますよね、きっと。實が稔るんだから...じゃ、お米は？ お米もお花って咲くの？ 色は？ どんな色？ 黄色？」

「優曇華じゃない？」と私。

「うどん毛？」

「饅頭じゃなくて、優曇華なんじゃない？」（思うのだが、比呂斗はウドンゲの花が咲いた、と云ったのか？）

いずれにせよその日、何事もなく夕食をたべ、家族三人で話して、テレビを見て、お風呂に入って（比呂子述懐。なんか、今思うともったいないの。ああいうふつうの、なんでもない普通の時間がいちばん、幸せでしたよね？ そうでしょう？ もっとね、大切にすれば...いま、もう一度繰り返せたら、ぜんぶぜんぶ、ほんとにぜんぶ、かみしめて、あじわって、だきしめて...ぜんぶ、でも、そのときはほら、そんな...そういうものじゃないですか？ ぜんぜん、なんでもないの...だから、やっぱ、なんでもなくて、もう、ぜんぜん...ね？ ふつう。どうしようもない、普通なの...(これ等方言)そして寝。

寐ていたら耳元の近くの下の方で足音がした。

眼を開く。

強烈なおい。花の匂い（花がにおうと思った瞬間に、周囲の空間に白い丸い花が大ぶりの葉を纏いながら（蓮の花？）浮かんでいるのを見て居たのに気付いた...）。

怪しんで身を起こそうとすると、すでに自分がベッドが腰かけて座っていたことを知った。

眼の前に比呂斗が立っていた。

薄く光ってるように見えた（斜めに光ってるの（ななめにひかるとるんで...）と比呂子は云った）。

比呂斗はかすかに笑っていて、どうしたの？ 声をかけようとした瞬間に、比呂斗が周囲に浮ぶ花を貪り食っている言に気附く。おいしい？ と何度も語りかけた気がする。自分の声が聞こえていないことは知っている。なぜなら自分でも自分の声が聞こえて居ないからである...云々。

何度か語りかけ（おいしい？）そしてそのどの時というでもなく、いつというでもなく、臆て目が覺めた。

まだ夜も明けて居なかったので（夜明け前）そのままベッドの中で微睡んでいた。雨の音が聞こえた。雨の音を聞くうちに、ひょっとしたもう寝過ごしているかも知れないと思った。

曰く、雨の日ってくらいから、いつまでたってもくらいから...だから時間も判らなくなるの...

不意にあわてて起き上がって台所に行く。時計を見る（比呂子は居間で携帯電話を充電する習慣だったので。曰く、寝室に入れると電磁波が...云々）六時。

まだ早い。

朝食の用意をする（これはいつもなら朱美がしていた）。

七時過ぎに朱美が臺所に入ってくる。おはようの言葉も無かったので、最初気付かなかった、と。

気配に振り返ると朱美が引き戸に左の中指でだけふれて立って、首をかすかに傾げて、比呂子を見ていた。

なに？ どうしたの？

朱美云、比呂くん、亡くなったで。

なに？

比呂くん、亡くなったで。

此の時、もう一度なに？ と言い、もう一度同じセリフを朱美から聞けばすべてことごとく理解できる気がした、と比呂子。ここで比呂子、ガスの火もそのままに朱美の寝室に走った（比呂斗は朱美の寝室で寝ことになっていた）。

（比呂子の記憶、ガスの匂いが鼻に残り続けていた）

（又、沸騰する味噌汁のぶつぶつ言うノイズが雨の音に重なって聞こえ続けていた）

寝室に入ると、ベッドの丁度左半分に（右に朱美が寝ていたということか）比呂斗が死んでいた。

仰向け。両目をひらき、口をあのかたちに大きく開いて。両手足はまっすぐ伸ばしたまま。

以上。

後の検視結果では心臓発作。理由はともかくも、いずれにせよその一瞬心臓があげられてそして急停止したのである。

それ以上の詳細は終にわからなかった。

比呂子が云った。「田中公園、見に行きます？」

「最後に、比呂斗くんと行った？」

「そう」

「車で？」

「すぐ、ここなんですよ」

「ここ？」...と。

又すぐ歸ってくるからとシートに荷物を置いて、店員に声をかけて外に出る。歩いてゆく比呂子に随う。市民会館ホールの正面口の前の車道を渡ると、公園がある。

「ここなんですよ」と比呂子。

それなりの大きさの（だいたい、松濤公園の1.5倍くらいか？）公園。

整備は行き届いてるほうなのだろう。雑然とした気配はない。

樹木が茂る。こっち、というので比呂子に随う。木立の影を潜った数十メートル奥にたしかに花のない紫陽花の葉が静に茂っていた。

地に翳をやわらく、それでもくっきりと投げる。

私、問。（これは此処に来る前から気になっていた事）私に逢いたいと...逢ってもいいよっていったの、比呂子さんですよ？

比。ええ。肩村さんに。旦那さんの方...云ったけど、なかなか都合付けてくれないでしょう？ 先生。

私。僕が？

比。だから佐伯さんにも言ったんですよ。すごいですよね。やっぱり。あのお母さん。若いのに。あの人に謂ったら、すぐ来てくださって。弱みにぎられてます？（笑）

私。なんで、僕に逢おうと思ったの？

比。必要なんですよ。

私。僕？ なんで僕？

比。部外者。ぜんぜん関係ない部外者。...

私。どうして？

比。なんかね、...というか、幽霊、見る人ですか？

私。全然。

比。宇宙人は？

私。あつては見たいですね。見てみたい。宇宙広いから。ここの他にも生き物位いるでしょ。

比。妖怪とか？

私。伝承漁るのは好き。仕事だから。

比。見るの。

私。なに？

比。比呂斗。

私。比呂斗くんを？

比。目が燃えてるの。目が。真っ赤に。めらめら...

比呂子はそういった（思うに、聞いた真與羽の話に影響を受けていると思われる...）。

ちなみに此の田中公園というのは、日本近代彫刻の走りの時期の彫刻家平櫛田中という人を記念したものだ。平櫛田中、本名は田中何々（失禮。忘れた）田中姓というのはこのあたりにも多いらしい。その彫刻家の生まれたのが此の町だったということらしい。なんでこんなことを知ってるのかと謂えば、同じ市民会館の敷地内並びに田中美術館というのがあって、そこを比呂子さんと見に入ったからだ。

さすが田舎の個人美術館で、見ている人は誰もいない。そんな中見て回ったのだが、一体のブロンズ像に出逢った。あれは不動明王なのか阿修羅王なのか閻魔王なのか。いずれにせよ黒光る忿怒の神が舌をだして残酷な嘲笑と共にらむ。と思ったら舌ではなくて人を啜えているようにも見えた。だったら人喰らう忿怒の神か。そのブロンズ像の表題を曰く轉生、と。

比呂子にいたたまれない気がしたので、それには気が付かなかったふりをして通り過ぎた。
○久村文書B付録（北浦峯一氏。吉備ノ繩）

2019年8月27日午後。

茨市立図書館に行く。せっかくなので郷土史等の資料をあさりに。そこの館長の真鍋文人氏に雅楽師（と、真鍋氏は謂っていたが、要するに笛師。龍笛・神樂笛の製作者）北浦峯一（ホウイチと讀む）を紹介される。居宅は西蠅原町の稻田という所。

念の爲真鍋氏電話連絡の上、单身何う。

閑静な農地。學校（おそらく小学校）の近く。

閑静と言っても、どこもかしこに閑静なのであって、特に人がいない、というだけだ。

車を止めたらそれで塞がって仕舞う程度の庭。

その奥にいかにも日当たりの悪い山際の家。

山は兜山という。那須の与一が頂上に兜を埋めたので兜山という。是は土地の伝承。

北浦氏は見た處一人住まい。

家族構成云々、気兼ねして聞けなかった。古い家で、わたしの子供のころからそのまま引き繼いだような、そんな木造の家。

日焼けした畳の上にカーペットを敷いて、その上にテーブルを置き、胡坐をかいてお茶を飲む。

作業場を拜見したら篠竹が山と積まれ、それでもまともな竹など一本二本しかない。文化廢れば竹も廢れると。是は翁おとくいの癖みか。

曰く、

昔吉備ノ繩と云う人がいた。繩は所謂山賊のならず者だったようだ。ある日里から娘を偷んで窖に隠した。その日の眠りのうちに空から桃色の花が降るのを見た。花が疎ましい程に匂う。地に墜ちればすぐさまに色をなくして白く変わる。あやしんで見回すに花にうずもれた数歩先にある尊い形が見えた。傍らに香氣のある僧がいて寂滅じゃという。おどろいて一度瞬いた後にみずからの全身に蛇の無數に這うているのに氣附いた。叫んで目を覺ますに繩は自分の前世の記憶を取り戻していた。昔は眼昏らの僧、又その昔は穢い蛇であったと。今眼明きに生まれ變わったと同時に前世の諸惡忘却の内に眼昏らの闇に再びさ迷うと。繩は改心し涙をながす。窖の中を見れば娘の姿はなくて無數に蟲に食われ無數に蠅を纏うた屍がただ死臭を放っていた。繩はみずから目をつぶす。繩は山を下りて西に旅しその山際に夥しく羽音をとよませ臭みの匂う土地に出た。同行の者が云う。ここは蠅のむれが騒ぐ、と。繩は謂う、ここに田をひらくと。同行の者は笑う。蠅らのみ飛ぶ荒地ではないかと。繩は謂う、蠅ほど死者の上生者の上にも繁茂するものはない。死者の上に生者を重ね其の上にも死者をかさねる。故これまさに豊穡の兆しなりと。繩は迷うことなく田を切り開けば田は安々と稔った。いつかそこに集落が生まれ、これが蠅原村の縁起である、と。

今昔物語卷十四第十九話に云、

今昔備前ノ國ニ有ケル人年シ十二歳ニシテ二ノ目盲ヌ
父母此レヲ歎キ悲ムデ佛神ニ祈請スト云ヘドモ其ノ驗无シ
藥ヲ以テ療治スト云ヘドモ叶ハズ
然レバ比叡ノ山ノ根本中堂ニ將參テ盲人ヲ籠メテ心ヲ至シテ此ノ事ヲ祈請ス
二七日ヲ過テ盲人ノ夢ニ氣高キ氣色ノ人來テ告テ云ク
汝ゾ宿因ニ依テ此ノ盲目ノ身ヲ得タリ
此ノ生ニハ眼ヲ得ベカラズ
汝ゾ前生ニ毒蛇ノ身ヲ受テ信濃ノ國ノ桑田寺ノ戌亥ノ角ノ榎ノ木ノ中ニ有リキ
而ルニ其ノ寺ニ法華ノ持者住シテ晝夜ニ法花經ヲ讀誦シキ
蛇常ニ此ノ持者ノ誦スル法花經ヲ聞奉リキ
蛇罪深クシテ食無リシニ依テ夜毎ニ其ノ堂ニ入テ佛前ノ常燈ノ油ヲ舐リ失ヒキ
法花經ヲ聞シニ依テ蛇道ヲ棄テテ今人身ヲ受テ佛ニ值奉レリト云ヘドモ燈油ヲ食シ失
ヘリシニ依テ兩目盲タリ
此ノ故ニ今生ニ眼ヲ開クベカラズ
汝ゾ只速ニ法花經ヲ受ケ持（タモチ）テ罪業ヲ免レヨト宣フト見テ夢覺ヌ
其ノ後心ニ前生ノ惡業ヲ悔ヒ恥テ本國ニ返テ夢ノ告ヲ信ジテ初テ法花經ヲ受ケ習奉ル
ニ月來ヲ經テ自然ラ習得ツ
其ノ後ハ盲目也ト云ヘドモ年來心ヲ至シテ法花經ヲ晝夜ニ讀誦ス
而ルニ其ノ驗シ掲焉ニシテ邪氣ノ病ニ惱ム人有ケレバ此ノ盲人ヲ以テ祈ラシムルニ必

ズ其ノ驗シ有ケリ

遂ニ最後ニ至マデモ終リ貴クテ失ニケリトナム語り傳ヘタルトカヤ
これの生まれ代わりだったということか（乃至、後日談...）。北浦氏曰く、故、蠅原と言ってもなにも不吉な名前でもなんでもない、豊饒の意味合いなんですよ、と。
私云、詩經にも蝗を豊穰の喩えに使った詩もありますね、と。
思えば蛆だに豊穰繁榮繁殖乃至、再生の兆しと取られえられないこともない...
掘り出し物としては秘曲（ともえないキワモノというべきか）漢駒（迦牟久と訓）というのを（笛の唱歌で）聞かせてもらった（箏と笙のパートも現存するのだろう。笛のほうの、と言っていたので）。東ノ漢ノ駒の事か。とおーとおー・とおひーひいらひいら・はぁーはぁー...云々。高麗笛で吹くのだと。呼吸器に問題があるのか。は音のときに喉の奥に聲がかすれる。

○久村文書 B 付録（蠅子神社）

これは 2019 年 8 月 27 日午後五時半のこと。
曇り空の下に、近くまで来る機会があったのでその足で例の蠅子神社に詣でる。みごとに迷う。蠅子神社の名を出しても土地の誰に聞いても判らないというからだ。いっそのことと思って、西蠅原町の小角で年配の男性に通りがかりに（ちいさなシーズー犬の散歩。ご本人は柔道の師範でもやってそうな巨體）きく、曰く、このあたりで二十年近く前、中學生が頸吊った神社ありません？
これを云ったらすぐに通じた。最初はびっくりした顔をしたんだけど、何？ テレビの取材？ とかね。心靈番組みたいな？ 面倒くさいから霊媒師の先生に下調べ頼まれて東京から来ましたって言っといた。
路わかりにくいから案内してくれるとのたまう道すがら打ち解けて、自然いろいろ聞きもしない事を教えてくれた。
あそこで首吊ったのは額田比呂比斗（...といった。間違えて覚えたんだろうね）という子で、クラスで一番の美少年だった云々。ケツを女がぞろぞろついて回っておったと。なんでも息子の同級生だったとか。
優秀な子だったんだけど妹のせいでノイローズになってめったにない悲惨な死に方をした。
あれでもまだ妹はひとりで知らん顔してここに住んでいる。なかなかなものだと。
私。お母さんの方はどうされたんですか？
答。とっくに、頭おかしくなって介護施設にはいっとるがな。近いよ。偕楽園というてね...と。
場所まで教えてくれた。秘密保持というものは此の人の感性にはないね。
いずれにせよ、額田比呂子が追い詰められるのも道理という気がする。実際、口にはださずともそんな心配が、ね。
蠅子神社は賀山のふもとにある。というか、小角という地区自体がふもとのゆっくりした隆起の一角、だ。
それなりに大きな山。その上には集落があって、山のつらなりのむこうにも集落がある、と。美星とってたね。美しい星。おもわせぶりの名前だけれども。山の上だから星がきれいだねというだけの話かもしれない。

いずれにしても山の端に細い石段があって、それを上ると樹木の向こうにちいさな平らな場所に出る。そこが蠅子神社。土地の人は神社の名前さえ忘れてる。一応祭りの時に御輿がそこから出るようだ。

昔すぐちかくに住んでゐた老人が毎朝掃除していたらしくて、比呂斗の亡骸の第一発見者もその人のようだ。大聲上げて朝まだき石段を転がり落ちるように叫びながら走って家々の人らを叩き起こして回ったらしい。

たしか此の木だよ、と言われた樹木の下に立つ。神社を正面に見る崖側の樹木。檜だと云った。神社を背にして木を見ると、空は日没も見せずに次第に青く昏む。東なのだろう。ということは、上る日を見ながら死んだということか。

頸吊った上、手首足首を切って、ね。

なんともむごたらしい氣もする。

○久村文書 B 後半

8月28日。この日午前中に額田比呂子と逢う。午後に借楽園という介護施設で額田朱美と。

(額田比呂子)

比呂子曰く、今週はパートで遅番なのだ。故、27日は二時で別れた。

故、28日は朝の9時に田中公園で待ち合わせて(ここでのホテルはビジネスホテル櫻桃閣という壊れそうなボロいビル。もと結婚式場だったらしい)、比呂子の家にお邪魔する。及び、お墓参り(比呂斗兄と息子比呂斗の)。

その日起きれば朝から雨。

靄靄たる停雲

濛濛たる時雨

八表は同じくに昏く

平路はこれ阻し

ホテルを出れば白濁した風景。白く白みいやになるほど白くただ暗い。身の回りは總て降る雨の音。

田中公園までは歩く。8時半。田舎の喫茶店名物のモーニングでも食べて置こうと思ったら、通りがかりに雨の中さした傘の中に一人噴水を見る比呂子を見止めた。何時に來たと謂うのだろうか？ その儘彼女に聲を掛けた。振り返って曰く、あれ、早いですね。汝(儘)に來ました？

ついさっき(これら、比呂子の發話のすべては方言使用。念の爲)。

比呂子は何も言わずに路上駐車した軽自動車に歩きだすのでそれに従う。

運轉は比呂子。当たり前だが。平地に山があるというよりは山間に低地が点々する感じの所。渡った橋の下の川は小田川という名前だそう。区画整理など望むべくもない住宅地の細い道に入って山の隆起を崖沿いに上れば池が見える。池の端を通過してだれもないグラウンド(公園?)らしきものを樹木の向こうに確認しようとしたところ、車は止まった。樹木のかくした小路の向こうに細く細く恐ろしい程狭い道があった。コンクリ舗装。いやに慎重にその道に入る。車一つで猫も通り抜けられないような道。両脇に傾いた木立。その向こうは兩方崖の様になっている。

これは誰でも氣を遣うだろう。ひやひやした。

ほんの十数メートルの先に一気に土地が開けて（だいたい一般的な学校の体育館程度）木立の翳りを抜けたからひたすらに明るく見える（...空の雲は靄靄たる儘なるクセにね）。庭には犬が駈け廻っていた。レトリバー二匹。人馴れしている（当たり前か）。

住宅は真新しい木造住宅（鉄骨造、かな？）

最近立て直したのか（結婚した時に？）高長氏はそれなりに潤っているということなことなのだろう。介護院送りの母を抱えた三十前のパート勤めのひい通りの女だけでは無理だ。

玄関の前に止めた車を降りるのが、じゃれつく二匹の犬に聲立て笑う比呂子を見れば初めてみた彼女の笑顔のように思う。中に入ると高長氏が居間で朝の情報番組を見てた。テレビを慌てて消して私に挨拶する。

高長氏、実際、逢う前にはうだつの上がらないいかにも譚アリ物件の婿養子になるしかない體の爺を想像していたのだが（失礼）まさか。50代という事前情報が無ければ寧ろ私より年下にも思っていたろう。即ちどう見ても今年40に成る三十代という雰囲気。なかなかの凛々しい美貌である（すっきりと流れた眉、まるで少年漫画の主人公のような、くっきりとした、...ね。若干鷺鼻。窪みのある頬。羸せた印象はない、寧ろ精悍な...縄文人系のはっきりした眼、複雑な二重瞼...）聲は高い。テナーというよりはアルト、それが風貌と微妙に不釣り合いで兎に角印象的だ。又、比呂子の身の上の話からそのスポーツ刈りの印象もあって（尤も、女がどんな髪型しようが自由な筈なのにね...）金で買われたじゃないが、殺伐とした夫婦を勝手に想像していたのだがさにあらず、二人ならばと（なにもいきなり抱きあっていちゃいちゃし始めるわけでもないのだが）非常に親密な、他人の入り込めない氣配が漂う（それなりの距離をたもちながらも、ね。纏うオーラがつながりあってる感じ...わかる？）。悪い意味では言ってないよ。ああ、いい夫婦だなという印象（だったら俺なんか必要ないだろうと思ったが、つまり、全然関係ない他人として「だけ」必要だ、ということなのか）。とまれかくあれ僻みそうなくらいにいい関係を感じさせる夫婦だ。俺は失敗したからね。その點では。

ふと思い出して私。あれ？でも、今日って、水曜日？お仕事は...（仕事でいないものかと思ってたので）

高長氏曰く、いや、午前中だけ。

比呂子。別にいなくても、従業員さんたちがちゃんとやるから...

高長氏苦笑。経営者だからね。

家の中は建築屋の家にして適当な印象を受けた。餘りの素材で片手間にやった感じ。尤も、あくまで他人の家を造のが仕事だということか。醫者の不養生、寝ずにぶつつづけ十時間の大手術をして倒れ込む医者と自分の軀に悪いから途中で休ティーブレイク入れちゃう医者どっちが名医か？

奥の間に仏壇があって香の匂いが残っている。柱にも壁にも沁みついて居る、のだ。毎日線香を立てているのだろう。比較的新しい位牌がふたつあった。それから遺影も。比呂子の端正な顔に面影を残す男の若い頃の寫真（病気で倒れる前の、ということか）、その右には比呂子とは全く似ていない少年の寫真。これが兄比呂斗なのだろう。息子比呂斗の寫真は見當たらなかった。別に（比呂子の寢室にでも）置かれているということか。なら、位牌もそこにあるということか...

高長氏曰く。わざわざ東京から来ていただいて...(これは誤解なのだが、面倒くさいので放置した)

わたし。ところで、お母様は？(シラを切った)

隠すというでもなく普通に介護施設に入っているという(比呂子)。曰く、あの人もいろいろあって、いろいろありすぎたか疲れちゃって...(比呂子)

良くしてもらってるみたいで。安心してます。ぼくら肉親じゃやっぱり肉親ってだけで所詮行き届かないから云々(高長氏)

逢ってみられます？と比呂子が云った。

これから？

それとも、昼から？ひとりで行けないですよ、ね...(高長氏、だったら、ぼく(...と私に)、一緒にいこうか？(...と比呂子に))面會なんて私たちしかいかないから、刺激も無くて。毎日同じ事の繰り返し。よかった、あとで連絡しておきますよ。と。比呂子。

私。いや、...場所教えて戴ければ、ひとりで伺いますよ。お手数なんで...

落ち着いたところで高長氏から根掘り葉掘り眞夜羽について聞かれた。氣になって仕方ないのだろう。

私云、高長さんは、お逢いになりました？

高。いえ。なんか、いらっしゃったらしいけれども、その時は

比。此の人には言わなかったの。

私。なんで？

比。話が話だし。...心配させたくないっていうか、だって、いきなり死んだ子供が生まれ変わったらしくて...とか、ねえ？だから一回、逢わないとなんて。

高。その日...あれ、今月の頭かな...

比。先月末じゃない？

高。歸ったら、いつになくここにこしてて。どうしたんなら、と。話がある、と。なんじゃ、と。びっくりせんか、と。

比。やっぱり、氣をつかうから...

高。比呂斗くんが...子供の方のね、あの子、生まれ変わったらしいよって。ストレートに謂うから、

比。だって、自分でも信じられないからな...

私。信じてないの？

比呂子は私の顔をみて、そして須臾見つめ、崩れるように笑った。

比。あの子は...比呂斗くん...じゃない眞夜羽くん...ちょっとおかしいところあるとおもいませんか？

私。おかしい？

高(ほぼ同時に)。そうなの？(...と、腕組みしたまま上を見上げて云、故、比にいったのか私にいったか不明だった)

私。例えば？

比。黙止(うー...ん)

私。どこ？

比。クハラさんはどう思いました？

私。いや、いろいろ混乱してる感じはありましたね。

比。例えば？

私。全体的に。話が唐突なんですよ。で、人の話、あまり聞かない子だよ。自分で勝手にしゃべってる感じ

高。まだ7歳？ 6歳？ その年の頃だとそんなもんなんじゃない？（比呂子に）

私。奥さんは、でも何？...何がおかしいの？ 気に障ったの？ どんなところ？

比。だって、比呂斗の生まれ変わりなんでしょ？

私。自稱は、そうですよね。

比。あの子、...真夜羽ちゃん、あの子、私みた瞬間に涙ぐんだんですよ。

私。涙？

高（同時に）。泣いたの？

比。泣きはしないけど。上目遣いに。涙ぐんでみて。それからなんていったと思います？

高。何？

比。いきなり飛びついてきて、それからお母さんって。叫ぶみたいに。あっちの奥様...眉村...

私。深雪...

比。びっくりした顔して...ご主人もだけどね

私。なつかしいから...前世の我が母だからってことじゃないですか？

比。でも、どうしても、そんなに記憶って残るもの？

私。ん...でも、ま、残ってるって言ってますね。真夜羽は。

比。かぐや姫の話あるでしょ。

私。かぐや姫？

比。あれだって、月に歸るとき記憶無くしちゃうじゃないですか？

高。そうなの？

私。よく知ってますね...

比。絵本。比呂斗に...おかしくないですか？ 記憶なんて、残るの？ 聞いたの。わたし。その時に...あの、...なんていうの？ 霊界？

高。あの世？

比。死後の...死んだとき、苦しかったね、どうだった？ つらかった？ って。

私。いつ？

高。落ち着いたとき...知ってます？ すごく失禮なの。

私。だれ？

高。旦那のほう...

私。真砂。

高。あのひと、なに？ やくざみたい。人、脅迫するみたいに...拜見しますよ。家、拜見しますよ...と。か。つて。ずか。ずか。家の中に入ってきて、それで、そこの佛壇とか...

私。あ、そう言えば、比呂斗くん...息子さんの方の...あちらの写真とかは飾らないの？

比。...飾らないの。

私。なんで？

高。見れないんですよ。

私。見られない...

比。だって...

私。お察しします。

比。あいつ、本当に失礼...

私。彼も、何か言ったんですか？

比。なにかも、全部話してくれって。だから、いや、あなたが連絡してきたんでしょう、と。そっちから洗いざらい話すのが筋でしょうが、と。そしたら、...気がよわいのよ。女が怒鳴ったから。すみませんって...謂いはしないけど、そんな感じで話し出して...

高。付き合い考えた方がいいな。

比。仕方ないじゃない。

私。で、...

比。なんとなく、話すだけ話して...眉村さんのほうが、ね。そうしたら、わたしだって思うところがあるじゃないですか？ 胸にこう...

私。去來するものが。

比。こみあげてくるもの。...から、ね。云ったの。眞夜羽くん...あれ、...あの子...

高。その子？

比。綺麗な子ね（高長氏に）...ですよ？（私に）

私。女の子かなって思いませんでした？

比。そう。可哀そうな、すごくいじめられてる...家で、すごく...

私。髪型でしょ？

比。そう...（と云ったとき、私は慌てて話を逸らそうとした一瞬をたぶん顔に曝したのだと思う。比呂子は呆気にとられて、わたしを見直した刹那、臆て聲に笑って云く、）気にしないでください（きにせんでええですよ）これは...

高。髪型でしょ？（私に）

比。比呂くんへの、追悼...本当は...わかるでしょ？ わかっていただけますよね（ひとりごちるような発話）...あんな...本当は、頭まるめてって、思ったけど...

高。仕方ないよな...

私。でも、最初出逢われたとき...

高。ぼくら？

私。失禮。夜のお店でって、聞いたんですけど。

比。だって、わたし接客してないもの。したけど。バーで。バーテンダー。バーラウンジの。ショーパブみたいなところの。ドレス来てお化粧してヘアメイクして甘ったれた聲だしてみたいな、そういうやつじゃなくて。そういう子たちにお酒作ってあげてただけ。ドリンクバックあるから。よく飲むの。社交の子たち。比呂ちゃあん、わたしの、薄めに作ってって。翳で。ノンアルでえって。酔っぱらったふりだけ。

私。じゃ、スタッフさんの方？

高。接客もするけどね。ホールに出てるから。で、私と逢ったんだから。ただ、あくまでバー接客ね。

私。それでそういう髪型でも

高。ひどいんですよ。嘘ついてたんだから（笑う。比呂子も）

私。嘘？

高。此の人は、みんなに。客にね。俺、心の中男なんだよねって。

私。性同一性...

高。おかまちゃん。じゃない、おなべちゃん？ 坊主あたまだし、ほら、バーの。ベスト着て蝶タイにパンツだからね。あれ、或る意味男装じゃない？ 信じちゃってね、みんな。比。面倒くさいからよ。

私。じゃ...失礼。なんていうんだろう？ 最初に...なに？ お付き合いしませんか的な、そういう...口説く？ じゃないけど

高。愛の告白？

私。それは、比呂子さんから？

比。此の人 (...とって、笑った)

私。じゃ、ご主人、同性愛なの？ (これは冗談で言った)

高。それとなく気付いたの。こいつ女だなんて。

私。いつ？ どんな時？

高。ふと、振り返った一瞬とか...なんか、匂ったんですよ。

眞夜羽、比呂子と対面し「死」について聞かれたときの始終 (これは比呂子が話したものの)。

比。苦しかった?...あっち...あっち行ったとき苦しかった。(比呂子曰く、玄關口ではじめて見かけたときからしがみついて離れなかったので、膝の上の眞夜羽にはなしかけたのである。)

眞夜羽。いつ？

比。こっちから、あっちに...

眞夜羽。ここにいるよ。ぼくここだよ

比。前、比呂斗だったときに...眞夜羽ちゃんになる前に...

眞夜羽。死ぬとき？

比。苦しかった。

眞夜羽。比呂斗はくるしかったよ。死ぬから、...壊れるから、体は苦しいよ。死ぬから。けど。...でも、大丈夫だよ。

比。眞夜羽くんは大丈夫だったの？

眞夜羽。ぜんぜん平気だったよ。

比。比呂は苦しかったの？

眞夜羽。比呂も苦しくないよ。僕、比呂だったよ。

比。...ね。どうだった？

眞夜羽。死んでから？

比。天国いった？

眞夜羽。天国？

比。お空の上のね、綺麗な、

眞夜羽。おかあさんがぐや姫好きだったもんね。いつも読んでたもんね

比。行ったの？ 天国。

眞夜羽。天国なんてないよ。

比。ないの？

眞夜羽。地獄だったらあるよ。

比。怖いね。

眞夜羽。こわくないよ。太陽だって地獄だよ。海王星も地獄だよ。だって、ぼくたち以外に生き物居ないよ。ぼくたちみんな間違いだから。

比。地獄に居たの？

眞夜羽。綺麗だった。

比。地獄が。

眞夜羽。空の上。雲の上。もっと...雲って、めちゃくちゃつめたくって、めちゃくちゃ堅いよ。

比。堅いの？

眞夜羽。さわれないけど、でも、なんか、すごい固い感じだよ。怖いよ。

比。大變だったね。

眞夜羽。大丈夫だよ。すぐだもん。足の下に地球見てたよ。足ないけど。下にうかんでるじゃん。めっちゃくちゃ。怖いよ。

比。地球が？

眞夜羽。だって浮かんでて、光ってるじゃん。何にもないところ、浮かんでるじゃん。落ちないけど。知ってる。上も下も無いからね、落ちれら...落ちれ...落ちらないんだよ。でも、怖くない？

比。神様は居た。

眞夜羽。いっぱいいるよ。

比。神様にあった？

眞夜羽。ぜんぶ、なにも、ぜんぶ神様だよ。いまでも、神様だよ。いっぱい死んで、いっぱい壊れて、全然なくならないの。

比。じゃ、淋しくなかったね？

眞夜羽。淋しいよ。

比。どうして？ 神様、いっぱいいたよね。

眞夜羽。だって、地球、ひとりで光ってるよ。月もひとりでひかっているよ。

比。佛さまにあった？ おばあちゃん、いっぱい、御経よんでくれたでしょう？ 会えた？

眞夜羽。いないよ。だって、あれ、人間だもん。

比。どうやって、生まれて来たの？ だれかに...神様に...もう一度生まれなさいって言われたの？

眞夜羽。空、割れた。

比。空？

眞夜羽。どがあーんって。音なんかしない。してないんだけど、どかーんって音、すごい。空われたら、炎が燃え上がるの。怖いよ。すごいよ。全部が長く...ぜんぶ、ぜんぶ長くなるよ。燃えながら長くなるよ。ぐじゃって、ぼく、ぼくのお腹の中、食べちゃったよ。ぼくのお腹の中、ぐじゃって。全部、食べちゃったんだよ。一瞬だよ。

比。生まれる時？

眞夜羽。気が附いたらお腹の中にいるよ。すごい、うるっさいの。お腹の中。すごい、すごい、まいにちうるさい。ずうっと、ずうっと、うるさいの。

比。生まれる時どうだった？

眞夜羽。悲しかったけど嬉しかった。

比。なんで？

眞夜羽。生きないといけないから。自分で。生きれらから（可能形？）。自分も。

比呂子曰く、此の時比眞夜羽の頭をなせたあと、その頭髪に顔を埋めたのだ、と。そのときに髪の毛に「腐った獣の皮に乳を塗ったような匂い」がした、と。「」内比呂子の表現儘、

以下、此の日の質疑（問、私。答、比呂子。）

問。最初に眞夜羽ちゃんと逢った時、正直どう思いましたか？

答。比呂斗の...てことですか？

問。そうです。

答。なんとも...だって、そういう問題じゃない。体が、...だって肉躰があるでしょう？ だから、目の前にいるのは眞夜羽ちゃんなんです。あつたかくて、やわらかくて、かたさがあつて、においもある。...

問。心は？

答。魂みたいな？

問。あつて、話して、心...あ、この内側にあるものって、比呂斗くん、とか。そういう印象...

答。だって。心つかたち無いものじゃない？ 今日のわたしと明日のわたしはちがう。まして何年も...しかも違う躰で、でしょ？

問。確信は得られなかったってことですよ？

答。確信とか、そういうもんだんじゃないと思う

問。どういうもんだい？

答。だって、變つてく物でしょ？

問。じゃ、疑いを持ってるってことですよ？

答。でもね...(謂い淀む)

問。なに？

答。あの子にしかわからない事も云つてた...

問。比呂斗...

答。そう。

問。なに？

答。それ (...と、庭の方を見した。雨のに植栽。「あれ...」と比呂子。「どれ？」

「あの梅の木ね...」

指も指していなかったの...そして樹木にうといわたしには單にそれぞれに若干だけ差異する細い枝ぶりの似たような緑葉の木の散亂としか認識できなかったの...「どれ？」

「あれ、あの子があんなふうになってから植えた。...それ、知つてた」

「なんて？」

「あの木知らない。いつ植えたの？ あれ、何？ って」

「何の木なんですか？」

「梅の木... あんまりにも... あの子死んで、あんまりにも私たち、ほら、あれだったから、だから、お寺さんが... そのおばあ様が... これでもどうぞ。お庭が殺風景になってるよ。荒んだ庭には心も荒むよって。それから、もう一回庭、手入れしはじめたの...」

又、以下は比呂子が中座した時の高長氏との会話（携帯電話に電話がかかってきたのである。仕事？）。

高。比呂子とは、今日で二度目？

私。失礼ですが天涯孤獨云々って話を...

高。誰から？

私。比呂子さん... それから、

高。巖島の？

私。眉村さんとか。聞いたんですが、

高。死んだんですよ。

私。おひとりで？

高。両親。一緒に。同時に逝かれちゃって。高校生の時ね。妹も。

私。だったら、大変でらしたでしょう？

高。叔父貴に世話になって。いや。岡山にね。母の實家の。元地主？ 小作人頭なんかな？ 大きい土間ある家でね。そういう造りなのよ。そういう家な。瀬戸のほうにね。

私。海邊の方？

高。いや、内地よ。内陸よ。名前だけ瀬戸なんよ。

私。でも、ご親族いらっしやれば...

高。その叔父貴一人だけ。埼玉にもおられたけどね。親族な。でも疎遠でね。一人住まいだったの。叔父貴は。斜陽というの？ みんな死んだり、遠くに出ていかれたり、... 名古屋とか。その人だけ。ひとり実家のお屋敷守られてたけど。せやけれども 70 ちかくなされてたけど、私、前の会社の... 独立する前のな。わたし、むかし悪かったから。それなりにね。犯罪はせんかったけど。ま、拾われて... 拾うて戴いてな... 最後裏切ってしまうたけれども。ま、独立して... その前の会社勤め始めた比にな。ほら。倉敷の会社じゃから。遠いんよ。通勤するにはな。ですから、独り暮らしを... その一年目じゃなかった？ 火事おこされてな。

私。叔父様が？

高。まる焼け。焼き殺されしもうてね... むごいで。十九じゃったな。わたし。見たけれども。本人確認?... むごいよ。それをほら、火葬するじゃない？ また焼かれにやならんのかと思うとね。... あれ、最近煙でないよな？

私。そうでしたっけ？

高。そうよ。煙突あるけど、煙出ない... せめて煙でればね... ああして生まれ變わって... 煙にね。煙になってゆらゆら天國にいかれてるんやなと思うんじやろうけれども... むごいよ。

私。そういえば、ずっと、岡山にいらっしやった方なんですか？

高。私？

私。ええ。

高。いや。高校の...十六の時。親兄弟ああいうふうになるまでは横浜。

私。神奈川...

高。云うて、内陸の方ね。青葉臺というところがあって。そこに親父が家を買ってね。

私。お父様、ご出身は...

高。鹿島のほう。こっちの親族はもう音沙汰なしよ。

私。そっちの家はどうされたんですか？ ご資産でしょ。

高。売りました。それは埼玉の叔父貴がなんかしてたけど...一応、私にも、いや、口座にね。手渡しじゃないよ。貰って...ちょっと、その叔父貴がくすねてるよ。あれは。一千万もなかったもの。

私。いつ渡されたんですか？ お金。

高。就職した時。高校中退して二年、...三年か？ 遊んでたから...サンホームに...これ、その社長の会社な、世話になった...就職した時に、叔父貴から...瀬戸のな。叔父貴から通帳渡されたん。

私。だまされた？

高。誰に？

私。勝手に売り飛ばされたとかじゃなくて？

高。いや。そうじゃない。

私。一千万はどう考えても、...横浜でしょ？

高。事故物件だから。

私。事故？

高。殺されたの。空き巣かなんか。両親、それから妹。...むごいで。

私。いや、...なんとも。お察し...も。出来かねますけども、さすがに...

高。死んだ人間はみんなむごい。そう思う。だから、あいつもね...(と、庭の方を顎でしゃくり...其の時、額田比呂子は庭に出て電話していたので) むごいめ見てるよ。

私。共感されるところがあったと。

高。理解した。心情を。わかりますよ。わからんけれどもね。遂には。それでも、...ね？わからんわからんと、そればあ謂うても淋しいでしょうよ。なかなか忘れられない。心の傷は癒えないよ。今でも思い出すよ。雨降ると。6月にな。雨降るとな。

後、私たちは三人で(高長氏の運転で)墓地に参った。墓地は離れていて(その事の経緯は知らない。比呂子も知らなかった。おそらく先々代の先々代とかいつかの過去に引越してきたということなのだろう)下稲木という山間部の町の寺の裏山にあった(とにかく山、山、山なのだ)。車で十五分程度か(市民会館の前を通り過ぎた。家から山地をくんだり山に閉じられた盆地をはしり又山を上る...)。雨。

緑は濃い。

霞む。木の頭のあたりの空気が。向こうの山の頭に雲がぶつつかって、霧れて山肌を雪崩れる。いくつもの霞の雪崩れ雨の中(ちょうど霧雨程度だったので濡れて参ったのである)先導する比呂子のスポーツ刈りの上に水滴が小さく散っていた。

山霧れる霧の露にし濡れめやも

駈ける鼠もひそむ河蛙も

思い附きの戯れ哥。詞は山の命を思ふ、とでも。又

心なき雲の歎きぞ刈る髪に

ゆれる雫し零れ落つらん

代々の墓地ということなのだろう。二十ばかりの墓石。いくつか石を置いただけのものもある。その石が墓地だ気附いたのは比呂子がそこにも線香を立てていたからである。墓石を覆って樹木が山肌に斜めにかたむく。葉の繁茂の下もはや雨粒は落ちない。空中に舞う霧れた水滴がときに肌を感じられた。ここだという。見れば真新しい墓が雙つ。片方が父親額田洋一郎、片方が比呂斗ということなのか。どちらの比呂斗なのだろう?...真新しい墓石は二つしかない...あるいは、兄比呂斗（或は息子比呂斗）は父の墓石の下に同じく葬られているということなのか？

此の時の談話。

比。私、主人には云ったんですけど...

高。何？（事あるごとにいちいち御主人が相槌を打つ、とはいえ嫌な感じはない...実際、仲のいい...少なくとも中の密な夫婦なのだ）

比。比呂くんの...

私。昨日の？

比。比呂くん、よく出て来るの...

高（私に。但し視線は比呂子からはずさず）。見るって謂うんですよね。こいつ。

私。（亡霊、といいかけて）魂？

比。か、どうか、そういうことばが相應しいのかどうか、私の心の問題かもしれないし

私。そんなことない。ぜんぜん、

高。いや、わからないから。

私。見ててぜんぜんおかしいところは、

高。わからない。心の傷は...俺もわかる。

比。わからないけど

高。深いよ（と私を見て）深いから。

比。黒い影。というか、色が見えてないんですよ。色がみえてなくて...ヒトの眼って色でみるじゃない？色を...

私。つまり、ブラックホールみたいな？光反射しないから、あれ、黒く見えてるけど目に見えてないということみたいですね。ブラックアウト。見得てないから取り敢えず黒く認識されてるだけ。

比。見得てないのよ。たぶん。

高。色ないからね...そういうこと？

私。ご主人は？

高。わたしは全く。

比。目が燃えてる...あの變な子、行ってましたね...あの子、熱あるみたいな眼してる。いつも。

高。そうなの（私に）。

私。いや、わたしは...

比。あの子の話聞いてからの妄想じゃないですからね...

高。去年から云うてるもんな。

比。目...というか穴だけ燃えてるのよ。毛孔とかというの。鼻とか口とか...お尻とか？

私。じゃ、全身炎に包まれてる？

比。目だけ。目だけ開けてるってこと?...あれ、比呂くん。

私。でも、生まれ変わってるって言ってますよね。すくなくとも、眞夜羽は。

高。先生、正直言ってどう思うの？

私。まだ何とも...

高。正直、どう？

此処で私はそれまでの正直な印象を言った。「なんだか、小さな嘘...ついたほうには嘘という自覚さえないようなちいさなささいな嘘がたまたま固まり合って巨大な謎めかして見させてるだけで、本当は単純でシンプルなことが起こってるだけなんだ、という気がする。嘘や、謂い間違いや、ちょっとした認識ちがひ、又は錯覚、そういうのが...」

高長氏。じゃ、なんともない、と。

私。なんともないかどうかまでは未だわからない...

比。じゃ、わたしがやっぱり夢を？

私。そうとまでは云ってない。

比。妄想を？

私。それはわからない。すくなくとも、額田さんは...奥様、いまでも、ずっと、誠実に話されてらっしゃる。

比。私の母だって誠實ですよ。狂気の人っていつでも誠実なの。嘘のない、在りの儘を話してるの。わたしもそうかもよ（謂って、比呂子は私を見るのだった。）

以下比呂子の「焰立たす黒いモノ」についての質疑（問は私）。

問。具体的に、最初に見たのはいつか。

比（笑って）。実はね（と高長氏を見、私を見、いかにもいたずら氣に笑み、且つもう一度聲に笑って）9歳の時から。

問（高に）。ご存じでした？

比。知らない。謂ってないから。

問。秘密だった？

比。云ってなかったから、たしかに、それは秘密にしたことに成る...けど、話してなかっただけ...だって、今朝、先生朝ごはん何食べたの？

私。いや、食べてない。そう云えば。

比。なんで秘密にしたの？

高。それは詭辨ってやつだよ。

問。ともかく、9歳くらい？ だれかに言いました？

比。それ、見得るのが普通だと思ってたから。だって、自然に見えてるから...いや、突然に見えるようになったものだから、もちろんおかしいんだけど、でも、自然だったから、おかしく思わなかったの。

問。ずっと見得ってた？

比。あの變な子の謂うことわかりますよ。いっぱい見えてる。いつでも。

問。いまも？

比。いつでも...でも、あの子の謂う、人格があるなんて...それは嘘。

問。でも、「比呂斗が」って、人格として奥さん見てますよね。

比。比呂斗。でも比呂斗の人格とはいえない...人格っていうか...なんだろう？ あれは比呂斗。でも、必ずしも比呂斗である必然はない...

問。なにかされたり語り掛けられたりはしないの？

比。お化けみたいに？...ない。まったく。でも、見てるんだよ。あれは。確實に、絶対に...はっきり見てる...認識してると思う...

問。心があるって？

比。でも、心ってなに？ たしかに人の心は心でしょうよ。人の心を心って云うんだから。でも、犬の心と人の心って同じなの？ 形も違う...体の、よ。聴力もちがう。たぶん皮膚感覚も、視覚、それから嗅覚...ね？ そういうのみんな集まってなにか認識して、考えて、感じたりして、それが心でしょ？ 感じ方の、その抑々が全然違うのに、心が同じなわけじゃないじゃない？ 猫も。雀も。虫も。蛇もなにも。まったく違う物でしょう？ 間違いなく...同じになれないじゃない。

問。つまり、

比。別のものなんだよ。

問。どんなふうに見えるの？

比。木に葉っぱがあるように、...川に水が流れてて、空に雲がって...今、雨降ってて...そんな風に。

問。だれかに相談した？

比。小学生の時...吉田綺羅羅ちゃんっていう子いたの。友達で。その子に、...相談はしないよ。別に變だと思ってなかったから。だけど、なんの拍子だろう？ なんか、「それ」について話さなきゃならないことがあって...それで...その時気付いたの。

高。何に？

比。名前。わたし、名前知らない。あれは(...と、私を見詰めたまま上を差した)雲、これは(と右を差し)木、此れは(と斜め右を差し)コンクリート、そういう名前。...知らないの。私。「それ」の名前。變じゃない？ 名前知らない、ありふれたものなんて...そうそう身の回りにないよ。

高。で、聞いたの？

問。ねえねえあれ何っていう？ って？

比。黒い、眼燃えてる奴、あれ、名前何だっけ？ って。

問。その、女の子...

比。綺羅羅ちゃん？

問。キララちゃん、しかし、これぞホントのキラキラネームだな(笑)。驚いたでしょ？

比。え？ なに？ って感じで...でも、深追いしなかった。私。

問。深追い？

比。ほらほら見得るじゃない？ キララちゃん。黒い、眼だけ燃えてるの一杯、瞬きする間にも、眼、閉じてても見えるやつあるじゃんあれ。見得ないの？ あれ。これ。それ...みたいな。

問。でも、なんで？ 見えるのが當然だって、自然に、そういう認識だったって
言ってたでしょ？

比。思った。いや、普通じゃない事なんだなって。

高。でも、それはおかしいんじゃない？

比。でも、そうなんだよ。直感的に。これ、やめといたほうがいいなって。

問。それはそれとして。

比。...ね。(と、比呂子は此の時にいきなり私に言った。「時間って、本当に流れてる
のかな？」

「時間？」

「まっすぐ流れてる？ だってさ。猫、いるじゃない？ 猫、ミルク呑んでるとする。うっとり
して。めを細めて。耳だけ後ろの方向いたりするじゃない？ 遠くの音、聞こえて...そ
の時、同じ時間が同じ猫の中に同じように流れてるの？」)

問。でも、なんで、ご主人に...それまで秘密...というか、ま、謂わなかったわけす
よね？ でも、言ったわけですよ...いつでしたっけ？ (高長氏に)

高。去年。その、...11月か？

比。秋じゃなかった？

高。もっと暮れちかくよ。いそがしかったんだもん。仕事が。なにこのくそいそがし
いのにそんな世迷い事って...

比。そう？ まだハロウィンじゃないぞって言わなかった？

問。兎も角、云った、と。もちろん、自分からでしょ？

高。知らないもんね。俺はね。

問(比呂子に)。なんで？

比。云った理由？

問。なんで？

比。夢見たの...というか、その頃同じ夢ばかり見て、

問。夢？

比。毎日、

高。それ、聞いてないな。俺は。

比。同じ夢...夢...なんていうか？

問。白昼夢とかじゃないですよ？ 醒め乍らみる夢とか？

比。普通のですよ。レム催眠...でしたっけ？ それの、普通の夜の...

高。どんなの？

比。下から雪が降ってる。

問。下？

比。足の下？

問。地面から？

比。夢...夢だからね。地面は多分存在してないんだよ。そこに。ただ、下から...

高。浮いてる？

比。そこまでいかない。浮いてるとまで言えない...浮いてなくもないけど。だから地
面でも空中でも無くてただ、下から...とにかく下から遠くの方まで下から、雪、上に

降ってるんだよ。

問。それを、見てる。...ひとりで？

比。判らない。その意識...ひとりとかふたりとか。それ、ないから...で、黒い燃える目が目の前居る。

問。至近距離？

比。たぶん。匂いそうな近く。

高。じゃ、雪見えないじゃない。

比。夢だから。今の此の感じ...眼で見て脳で認識するこの感じじゃなくて...でも、なんにも矛盾しない、普通に見える風景なんだよ。

問。その夢では？

比。雪が...下から。

問。黒いのは、一躰だけ？

比。わからない。そういう形じゃないんだと思う。

問。かたち？

比。ひとつとかふたつとか...

問。それは比呂斗くんなの？

比。それも、そういう問題じゃない。そういう問題の中にいない...先生が云ったそれはもう、歴史のテスト問題を数学の√式でとく見たいな...音楽の授業で蛙の解剖するよ
うな、そんな...

問。それから？

比。それだけ。

問。それだけ？

比。それだけ。それだけの夢。

問。ずっと？

比。ただ、それだけ...(此処でいきなり高長氏を振り返り見て) いや、秘密じゃなくてね。謂わなかったんじゃないで。「あれ」の話で...黒い、燃える...その、それで話がいつば
いになっちゃって、それでそこまで話がいかなかったんだよ。たしか。

その後墓を軽く掃除して(私も手傳った。恐縮されながら、ね。)墓地を跡にするのだが、
石段を下りる時に比呂子は高長氏に想い出したように云った。

比呂子。夢。...ね？

高長。夢？

比呂子。雪。夢の...あれね、(と言いかけて笑う)

高長。何？

比呂子。(ふたたび言いかけて笑い)

高長(笑いながら)。だから何だよ。

比呂子。ピンク色なの。

高長。雪？

比呂子。あわい...

高長。夢の？

比呂子。ピンク色なの。

文書 2 - 後半

文書 2 (後半)

(額田朱美)

額田夫婦の許を辞する時(偕楽園でお見舞いに行きますと云った。じゃあ連絡しておきますね、と比呂子)。

高。これから行かれるんなら、前まで送りましょうか？

私。いや...でも、これから出勤されるんじゃないかと？

高。方向逆だけれども。

私。いいですよ。タクシー呼んでもらえませんか？

高。車ないと、不便だから...東京はそうじゃないけどね...むかし、居たから。あっちに。送るよ？

私。図書館に寄っていくんで...

比。図書館？

私。茨市図書館...

高。そういや、そういうんも在ったな(笑う)

図書館云々は嘘。ひとりで自由にとというのが気楽だから。性分。図書館には次の日に寄った(太平洋戦争の時に茨に疎開した永田公村子爵娘房子という人がいて、その人が寄贈したらしい古寫本一式。それを寫真に取らせて貰った。婉曲(と書いてある。宴曲の事)秘曲という本三巻一具(以卷、呂卷、波卷...)が特に面白かった。宴曲に秘曲もなにもないだろうが、たぶん、時の体制批判だのなんだの含む故、ということなのだろう。ないし、謀反の画策文、とかね。おそらく。普通に読んだら意味の通らない文が散見(池の面四方によどめば底すずし...とか。川登り走る鱸に鯉の舩、とか)。奥書なし。假名遣いはだいたい鎌倉の比か。及び、その房子さんの書かれた自筆の日記と...これは戦中史の資料だろうな。永田子爵というのは、終戦直後に自決された方で、まだ読み込んでないけれどもその父上の最後を聞き知った時の慟哭がなんとも言えない...房子さんは80年代頭まで存命だった方)

偕楽園は小田川という川沿いを上って上がった芳井という山の上の方にある。それほど高い山ではないがそれでも空は近く感じる。山路を登りながらドライバーが云う、ここらは秋紅葉が綺麗で、と。山間のうねる車道の両脇はとにかく樹木の密集。その殆どが色づくという。葉の影が更に葉の影にかさなりいやが上にも暗い。木の葉翳りを突っ切れれば空が開け、そのあたりから芳井という。閑散とした集落。古びた市場というかホームセンターみたいなのがあって、そこで日用雑貨から食料品までそろえるのだろう、と思った。本当かどうか知らない。それ以外に店らしいものが見当たらなかったから、というだけだ。ドライバーは下の集落の人のように、ここまで来ると猪出るよと嘲ける。猿

もいるからな、と。バナナなんか持ってたら襲われるで、と。今思うに、それは若干卑猥で差別的な冗談だったのか。いずれにせよ静かところ。

人も來ぬ奥山木の葉暗がりに

熟れ紅葉ゞはひとりし散らん

更に小川沿いに（小田川に流れ込む流れなのだろう）登るとそのただっ広い平地に偕樂園はある。

偕樂園の周圍は更地だらけ。何に使うというでもない更地がとにかく擴がる。園の前で車を降りた。

比呂子から猪原さん（やはり猪が出るということなのか？）という職員を呼び出せと言われた。云われた儘呼び出しお願いすると猪原氏（年の頃三十前後。長身。若干の肥満）が出てくる。曰く、比呂子の同級生だったという。

そのせいでなのか、非常に額田家に同情的な雰囲気だった。

猪原氏曰く、遠いからなかなか比呂ちゃんも面會にこれないので、淋しがっている、と。だれかと逢って話すのがいちばん、お年寄りの薬になるんじゃないかええなあ...云々。躰格のわりに女性的な性格に見得る（元大学ラグビー選手）。

通された病室にはかの額田朱美女史がましました。見た目、特にやつれた六十後半に見えた（実際には40代半ばで、我々の同年代なのだが...）。それこそが彼女の苦惱の残した爪痕というものか。

痛々しい老い方。

この介護施設はそもそも単に老人ホームというものではなくて、精神患者の収容施設でもあるのだろう。あきらかに、そう見える方が（二十代の方もふくめて）同室に収容されていた。男の方。目を剥いて、口をあけっぴろげて私を見詰める...

嚴島から來たのだと謂うと（どういうつながりなの？と聞くので）猪原氏曰く嚴島にも姉妹施設があるという。この地出生の古藤という方がいて、その方の出資で作った二園なのだとそう。まず50年代末にここ芳井町偕樂園ができた。後、嚴島に祇樹古藤記念園。嚴島の方はもともと嚴島偕樂園といったそう。そこに90年代？（三十年くらい前に、と言っていた）ジーヤ（Jiya?）というインド国籍の方が沙羅の樹を寄贈したらしい。それにちなんで祇（ギと訓、ジーヤ氏のジの訛りである）樹（ジュ）古藤記念園と改名したのだ、と。何故こんなことを謂うのかと思えば、その沙羅の樹が花を咲かせるのだという。本来、日本のような冬のあるところでは咲かない樹なのだが、と。ここにも在るんで、と猪原氏謂う。

ここにも？

沙羅の樹。

これは額田朱美のところに案内される道すがら。その時廊下の窓越しに二本の樹を指さした。云、「あれ。」

「あれ？」

「あれ、沙羅の樹」

猪原曰く、ただし此の芳井偕樂園のは「本当の沙良の木」ではないのだと。二種類の（...日本固有のも併せれば三種類か）沙羅の樹がある。一つはインドの本等の沙良の木（釋尊入滅の時に散るあれである）。もう一つはタイなどでインド沙羅に代用される「サー

ラ」の木。それが是なのだ、と。(日本の寺院にたまにある沙羅双樹の木というのは、大抵夏牡丹の木である)

もとから巖島祇樹古藤園にも「タイ・サーラ」の樹があった。いまもある。何故ならこの二園の象徴の樹だから。所謂釋尊の祇樹給孤独園の須達多(Sudatta)の徳業に倣って社会奉仕の爲に作ったのが此の二園だという。故、「タイ・サーラ」の木をそれぞれ二本づつ植えたのだ、と。猪原曰く、古藤氏は時は太平洋戦争末期、所謂特攻隊の一つ人間魚雷回天の發案者とされる大尉黒木博司氏の直接の部下だったか友人だったかだと。回天の設計等にも関わったという。戦後、不動産業で財をなすのだが(岡山市内の土地の買い上げと開発である)、戦後十年ばかりたったころいきなり改心し頭をそったらしい。あとの後半生は是非とも罪滅ぼしのために生きる、と。よって、作ったのが芳井偕楽園と巖島偕楽園である、と。

古藤氏の辞世の句に云、

生きて生き生きむさぼれど生きて暗く

せめて同じき蓮の葉の露

報われ無かった契りでもあったということか。或はわだつみの底のかつての若者たちに今その同じ蓮の葉の上に生まれ、そこで泣いて詫びようということか。後者であれば、あるいはそれは餘にも蟲のよい寧ろ傲慢と罵る人だにありそうだけれども。いずれにせよ土地の慈善家として名を残した。

脱線した。

ともかく窓越しに傾いてはいる午後の日の中に、額田朱美は恍惚までいたらない茫然の顔(見慣れない私に驚いただけかもしれない...)を曝し、私を見るのだった。

猪原云、(朱美に)お客さんこられたからね。

朱美(これがはじめて聞く肉聲だった)。はらあ？

猪。お客さんじゃが。

朱。はれあ？

目の焦点が合っていないというのではない。チャンと見ているのだが、私を通り過ぎてしまうのである...

猪。娘さんの...比呂ちゃんの？

朱。死んだが。

猪。死んでない方の比呂よ。娘よ。

朱。だあたん。

猪。比呂ちゃんのオトモダチで。

朱。あいがか？

猪。よかったな。うれしいな。さびしくないで。

朱。だあたん。

猪(わたしに)。ぎょうさん...たくさん、話したゲテ。淋しいんじゃから。(朱に)なあ？

朱。じゃあ。

猪原、車いすを持ち出してお散歩でも連れてったげてえというので、車椅子を引くことにした。猪原は業務に戻る。

朱美と庭に出る。藤棚がひとつ。ただし今はもちろん唯の緑葉の屋根というに過ぎない。日を漏らす。地に日と翳りの斑ら。敷地周囲に柵が張り巡らされているのだが、広い庭であって隔離感はない。寧ろ外からの防犯用にさえ見えた。話そうとするも何も話すこともない。実際、もうすこししっかりしているものと思っていた。今や亡骸を見るに近い。高長曰く高長と比呂子の結婚以後急激に悪化したのだと。入園前はひとりで彷徨い歩き、一週間後笠原市で保護されたという。駅前で物乞いしていたのを高長の会社の従業員が見つけたのだ。比呂子が問い詰めたらお父さんに会いに行った、といったとか。又、その正確な理由は正體を得ないが、電子レンジを叩き壊したという。曰く、レンジがお前を殺すと云ったと。咎める娘に泣いて抗議したという。お前は母を見殺しにするのか。なんとむごい物か。また、あれは爆弾なのだ。空から降ってきたものなのだ。又、風呂の入り方を忘れて一時間程裸で風呂釜の前に突っ立っていたと。又、コンビニのおでんに素手を突っ込んで火傷して帰ってきたとも。その他さまざまながあったのだろうが、いずれにせよ夏の昼、見知らない男に車いすを引かれて彼女は沈黙のうちに日なたに目をしばたかさせているのだった。歩きながら、それでももてあます暇つぶしに、あるいはひょっとしたらかすかな哀れみの感情故にも、わたしは二言三言話しかけたのだった。

私。朱美さん、元気？

朱。元気かなあ？

私。元気みたいです。

朱。じゃろなあ。

私。娘さん、覚えてる？

朱。比呂か？

私。比呂ちゃん。

朱。どっちもじゃ？

私。娘さんのほう。

朱。ありやいけんで。

私。どうしたの？

朱。毒もるもんよ。いけるかあ。

私。毒なんかもらないよ。おばあちゃん（同年代なのだが...）生きてるでしょう？

朱。さっきの、太いのがおろうが？

私。猪原さん？

朱。ありやいけんど。

私。どうして？

朱。わしに狂え狂えて毒盛って食わすからな。

私。毒盛ってないから。

朱。毎日謂うんじゃ。わしに狂え狂え謂うてな。

私。心配なんだよ。おばあちゃんが？

朱。あんたも毒もるか？

私。盛ってないから。

朱。狂うてるのはわしの兩足。...手もな。毎晩わしを喰うからな...

と、以下は此の朱美の語った話である。

御前は知ってるか（おめえしっとんか）？
御前は知ってるのか（おめえしっとるんかよ）？
右手が私を喰うんだよ（みぎちやあわしいくらうんじゃあ）。
左手も私を喰うんだよ（ひだりもわしいくらうんじゃあ）。
なんでかわかるか（なんでかわかるん）？
お前にわかるか（おめえにわかるん）？
右手はむかしな（みぎやあむかしの）。
むかしつかんで糞を千切った（むかしつかんでくそちぎったで）。
左手はむかしな（ひだりやあなむかし）。
むかし肛門にぶちこんだ（むかしけつんこぶちこんだつた）。
狂ったふりをしてやろう（くるうたふりしておしえたらあ）。
お前らみんな狂え狂えというからな（おめえらみんなくるええくるええいゆうからな）。
せめて狂った振りして遣ろう（せめてくるうたふりしたらあ）。
此處にいるのは一体誰だ？（ここにおるなあだれならあ）。
此処に話すは一体誰だ？（ここにはなしよおうるなあだれならあ）。
此処にいるのはかしこくも（ここにおられるなあわかしこうものお）。
天の若比古の落とし子の（あまのわかひこのおとしごんなあ）。
捨てられ御子の落とし子の（してられみこおのおとしごんなあ）。
殺される前の落とし子の（ころされるまえのおとしごんなあ）。
天の蛭子の捨てられ子（あまんひるごのおしてられごんなあ）。
天に棄てられ蛭子の子（あまにしてられたあひるごんこじやのう）。
河に流され桃の子の（かわんながされももんこの）。
吉備眞備の亡くし子の（きびのまきびのなくしごの）。
淡島食うた辰の神（あわしまくろうとたつんかみ）。
淡島孕んだ母の腹（あわしまはらんだははんはら）。
流れ流れた蛭の子は（ながれながれたひるんがあ）。
晝の光に干上がった（ひるんひかりにひあがっしもうた）。
そのめずらしき落とし子の（そんめずらしげなおとんごの）。
わだつみ神の徳子比賣（わだつみがみのとくごひめ）。
徳子の比賣の化け姿（とくごんひめのばけすがた）。
莫迦のお前も知ってるか（あんごうのおめえもしっとんか）。
莫迦のお前は知ってるか（あんごうのおめえはしっとんか）。
徳子の比賣の借り姿（とくごんひめのかりすがた）。
なあ知ってるか（のうやおめえしっとんか）？
莫迦のお前でも知ってるか（あんごうのおめえでもしっとるん）？
見上げた向こうに何がある（みあげたむこうにやあなにがありやあ）？
雲の向こうに何がある（くもんむこうにやあなにがありやあ）？
月の國には雨が降る（つきんくににやああめがふらあ）。
月には静かに雨が降る（つきにやあしずかにあめがふらあ）。
莫迦のお前でも知ってるか（あんごうたれのめえもしっとん）？

薄くもかかって月は金色（うすくもかかりやあつかあきんいろ）。
薄くも霧れて月は金色（うすくもきれりやあつかあこんじき）。
月の涙は金の雫（つきんなみだあきんのしづくじゃ）。
雫はどこにおちるのか？（しづかあどけえにおちるんじやい）
雫はどこに墜ちられるか？（しづかあどけえにおちれんじやいよ）
蠅子の池は（恐らく蠅子神社の近くに池があるのか？ 未詳）月ゆらす（はえごんいきやあつきいゆらさあ）。

月の落とした金の影（つきんおてえたきのうかげ）。
ゆられゆられてなにになる（ゆられゆられてなにんならあ）？
ゆられゆられてなにになる（ゆられゆられてなにんならあ）？
ふるらふるらとなにになる（ふるらあふるらあなにんならあ）？
私は云った。「何になるの？」朱美は私を見上げ、一瞬の逆光に目をくらませた。はげしくまばたく。その音が聞こえた気がしたほどに
「羽衣じゃ阿呆。羽衣じゃあんごうだりやあ（阿呆）が」
續けて曰く、

羽衣纏うて舞ううちに（はごろもまとうてまようりやあ）。
路に迷うて生き惑い（みちんまようていきまよい）。
路を忘れて生き狂い（みちんまようていきくるい）。
狂い狂うて嘆くうち（くるいくるうてなげきょうりやあ）。
羽衣舞えば人を喚ぶ（はごろもまやあひとおよばあ）。
ひららひららと舞い舞えば（ひららひららあまいまやあ）。
羽衣勝手に人を呼ぶ（はごろもかってんひとおよばあ）。
私に戀した男らが（わしにこいしたおとこらあ）。
みんなしでかす殺し合い（みんなでしまさあころしやあ）。
殺し殺され目の玉を（ぶちころころさりあめんたまのお）。
抜かれてなおも殺し合い（ひきんぬかれてまだころさあ）。
血に染まったのは蠅子池（ちにそまっしわまわあはえごんいけ）。
眞っ赤に染まった蠅子池（あこうそまらあはえごんいけ）。
木の葉移るは池の水（このはもうつらあいけんみず）。
春にいろづく蠅子紅葉（はるんいろつきやはえごんもみじ）。
死んだことにも気づかずに（しんだことにもきづかなあ）。
殺し殺され屍山（ぶちころされらあかばねやま）。
瀬戸内うめた屍らの（せとうちうめらあかばねらあ）。
四國に掛けた屍橋（しこくんかけらあかばねはし）。
拜んで渡れ弘法大師の（おがんでわたりやあこうぼうさんの）。
功德の泉飲む爲に（くどくんいずみょうのむためん）。
哀しい哀しい羽衣の（かなしいかなしいはごろもの）。
羽衣の天女悲しくて（はごろもてんのおなごかなしい）。
誰が悲しむ？ 知ってるか（だれがかなしまあしっとんか）？
莫迦のお前でも知ってるか（あんごうたれでもしっとんか）？

私は云、その天女がおばあさんなん？

朱美云、よくわかるね（ようわかるんなあ）。気ちがいなのに、よくわかるね（きちげえのによわかるんねえ）

朱美曰く、

わたし、月から落ちてきたの（わたしゃつきからおちてきたん）。

小田川、難儀してながれてたの（おだがわなんぎいしてながりょうたん）。

わたし桃の肌してるからな（わしがももんはだしとったからな）。

だから男の人ら殺し合うから（じゃからおとこんひとらあぶちころしおうてからに）。

いかんなど謂うて天皇さんが怒ってしまわれてな（あんごうがいゆうててんのうさんおこられなさってな）。

自衛隊派遣されたの（じええたいはけんされたん）。

けども、山の桃の下敷きになってな（しゃあけどやまんももんしたじきんになってしもうてな）。

みんな死んでしまったから（みんなしにくさりよったからな）。

だから天皇さんが馬に乗ってな（しゃあからてんのうさんうまにのられてな）。

空飛んでこられたけれども（そらとんでこられたんじゃけえどがな）。

もったいないなと思ってな（もったいのうおもおうが）。

なんといっても天皇様だからな（なんじゃああててんのうさんじゃけにな）。

わたし隠れようとしたの（わしかくれっしもうたん）。

そうしたら磐の戸しまらないから（したらいわんとしまらんからな）。

鼠が咬んで邪魔してるから（ねずみんこかんでじゃましくさりようるけえ）。

天皇さんに見られてな（てんのうさんみられてな）。

天皇さんも人の子だからな（てんのうさんもひとんこじゃけえな）。

私を見たら戀したの（わしみられたけえこいされたんじゃが）。

それでも月に返らなければならぬからな（せえでもつきんかえらにやなるまあ）。

私歸ると謂ったらな（わたしゃあかえらあいゆうたらな）。

穴掘り埋めて、生きながら埋めて（あなほりうめていきながらうめられたん）。

土の下深くに埋められて（つちんしたふこうにうめられてじゃな）。

墜ちて落ちてどこまでも落ちて（おちておちてどこまでもおちてな）。

ふと気づいたら反対の（ふとぎづきやあはんてえがわの）。

地球の反対に墜ちたのよ（ちきゅうのはんてええにおちたんよ）。

天皇さんは日の光（てんのうさんはひのひかりじゃから）。

日本で私を呼ぶからな（にほんでわしおよぶからな）。

その裏側は夜だろう（そのうらのほうはよるじゃろう）？

夜は月が浮くだろう（よるじゃけえつきやあうくやじゃろう）？

見下ろす月にそのまま落ちて（みおろしゃあつきんそのままおちてな）。

わたしは月に歸るのよ（わたしゃあつきんかえるんじゃ）。

次の満月に歸るのよ（つぎんまんげつんけえるんじゃ）。

朱美は何も恍惚の色を眼差しに兆すともない。寧ろ冷たい、腹の内を窺う眼で上目に私を見るのだった。私は此の女に騙されている気がした。或いは量られているような。故

(乃至、思わずに...) 私は云った。「次の満月に？」

「そうじゃ。」

朱美は口元でだけ笑った。

「朱美さん、かぐや比賣なのね。」

「あんごうたれ」(これは「阿呆たれ」の方言である。)

「あがあなんはしためじゃが」あんなものはハシタメだ、と。又、「腐れ竹の熟れた果てじゃろうが」と。そしてささやく。私は腐れ竹の一番腐れの芯の(眞の?) 腐れ比賣だ(わたしゃあくされだけんいちばんぐされのおしんのおくされひめじゃけえな)、と。

謂って、そして聲なく口のかたちで笑った。ややあって不意に不思議な眼附。私をあくまで見つめながらに私の存在を思い出したような。云う、「あれこそ、わたしのいい人。」と、そして私を見つめ続けたまままばたき、「本當の、契ったひと。」と。誰? と。思わず言いかけるものの手時、後ろに車椅子の音がした。振り返ればそこに車椅子を引く猪原がいた。

猪原(私に)。どうですか? 額田さん。

私。いや、お元気で。

朱美。死にかけの、死にぞこないです。(...と、誰に言うともなく私の脇を通り過ぎた向こうに頭を下げるのだった。誰もいないそこに誰か入るかのように——向こうにはただ日影に樹木。花。)

「あれ。あれが、その沙羅の樹」

猪原は謂う。なつじゃから、花、つけとるでしょう、と。

謂われてその眼差しを振り返れば、たしかにそこにその樹木は花をいっぱい、他人ごとじみて戴いていた。その樹木、大樹と謂う程ではないが大きく、おおらかで、そして威圧的な程に枝を広げる。野生の、野放しの、と。そう呼びたくなるような。枝の根あたりから盛んに異物に寄生されたかの蔓を夥しく垂らしていた。その蔓は又夥しくも無数に蕾ませ、下から這い上がるように花が咲き上っているのだった。だからその薄い桃色の花はあくまで他人事じみて見えて仕舞うのである。

「近くに行ってみられればいい。」

猪原が誘う。故、心つかぬままに私は随う。あれ、いい人よ。と。猪原にも誰にも聞こえるような聲で朱美は私にだけささやく。「あれ。本當の天子様。今の、紛い物のじゃなくて。あれ、本當の日嗣の皇子様じゃからな。」云った。

そして終にわたしは目を逸らし續けるのを止めて、猪原のひく車いすの上の人物を見たのだった。——故意に逸らしつづけていた眼がすでに異形と知っていた異形の人を。

三歳児程度の大きさの肉體。皮膚が薄いのか。青白い皮膚の下這う血管の夥しく右往左往するのが悉くに透ける。手足は無いように見える。あるいは、小さなそれらはTシャツとショートパンツの生地の下に埋もれているのか。巨大な顔。首はない。あるのかも知れない。胴体が其の儘変形して頭部を作っているように見える。シンメトリーは作らずなめらかに歪む。瑕のように縦に切れた目は雙つ。鼻の穴は無いように見える。口なのだろう。目の中間に女性の陰部を曝し畸形化させたような孔をひくつかせている...「あれ、天照大御神の女神さまのな、本當の皇子さんよ。」此の時ふとひらめいた奇妙な思い付きがあった。日本書紀云、

既而、伊弉諾尊・伊弉冉尊、共議曰「吾已生大八洲國及山川草木。何不生天下之主者歟。」

於是、共生日神、號大日靈貴〔(割註)大日靈貴、此云於保比屢咩能武智(オホヒルメノムチ)、靈音力丁反。一書云天照大神、一書云天照大日靈尊〕。

此子、光華明彩、照徹於六合之内。

故、二神喜曰「吾息雖多、未有若此靈異之兒。不宜久留此國。自當早送于天而授以天上之事。」

是時、天地、相去未遠、故以天柱舉於天上也。

思うに日本書紀は最も後発の書物であって、先行文書に様々に解釋を加えて様々につじつまを合わせて出来上がった書物に見える。恐らくは古事記が典拠としたはずの諸文書などを、である。故、矛盾が多い。例えば三貴神は二度生まれている。此の時と、伊弉諾尊黄泉歸った單獨の禊の時とである。日本書紀より典拠が大幅に少ないらしい古事記には一度だけ、禊の時にしか生まれていない。(古事記には一見、此処に矛盾がある。

故、伊邪那岐大御神、詔速須佐之男命「何由以、汝不治所事依之國而、哭伊佐知流。」

爾答曰「僕者欲罷妣國根之堅洲國、故哭。」

しかし、須佐之男命は「千引石引塞其黄泉比良坂、其石置中、各對立而、度事戸之時」の後の禊の時に生まれているので、例えば母親殺しの火之迦具土神には母が居ても此の須佐之男命には母など居ないのだ。父親しかいなのである。此のおそらくは先行文書の矛盾を修正するために書紀は二度の三貴神生みを描いたのか) いずれにせよ但し書き但し書きの集積の上にしか讀めない只管惱ましい書物である書紀の神名とは言え、日の神の別名は大ヒル女のむちであって、ならばこれに對を成すのは大ヒル兒の神... 最初に生まれた流された神... でなければおかしいともいえる。乃至、蛭子の神の轉生が此の神だと? 少なくとも出生は三貴子として生まれていても属性としては男(陽)性神ヒルコに對する女(陰)神ヒルメである、と。そう思えばこの神には耀く天つ日神という姿と共に蛭子神と同じき異形のかたちもあるはずで、ならば慥かに車椅子の上の異形の人が日の神のもう片方の姿を繼いだ嫡子であって何が悪い? とも考えられる...

(尤もこれは一瞬の單なる妄想である。私は古事記は神話書ではなくて歴史書だと思っていて... 古事記の典拠が何か知らないが、思うに伊弉諾尊、伊弉冉尊というのは先行國家の事なのだろう。伊弉諾國の王子が反抗的である。父王が問う。何故だ?。王子は答える、私はかつてあなたが滅ぼした伊弉冉國の政治をこそ理想とするものだ。故、父王は王子を島流しにする...。神話として読めば矛盾でも、寓話として読めばここに矛盾はない。ここで須佐之男王子は嘗て詩人が周の文王亡きあとに文王を礼贊する詩を生み出したに近い。彼等は謠うだろう、我等が心の父文王の治世よ、と。須佐之男王子は謂う、我が心の母伊弉冉國の治世よ、と。) 息をひそめるように私は異形の人を見た。目を凝らすように盗み見て。

「額田さん、ええじゃろう? (いいでしょう... 幸せだね、と)」猪原は云った。「今日は額田さんの戀人に逢えたなあ」と。

それが異形の人のことだとは気づいていた。わたしは目を逸らした。いずれにせよふたりの眼差しにも「タイ・サーラ」の樹、南の國で沙羅双樹の樹として大切されているらしい花は、寄生の凶つ花を思わせて地から湧くように咲く。

華の一つが頸ごと墜ちて、額田朱美の胸にあたって刎ねた。膝に跳ね、そして落ちそうな腿の端にかろうじて留まる。朱美のわごと誰もいない空虚に視線を投げ捨てた眼差しが、その後ろに見えない異形の人を見つめ、見開いた眼差しの内にあざやかな恍惚のみ曝していることは知っている。

わたしは胸をかきむしられるように只いたましかった。或いは、寧ろ、自分自身さえもが、である。其時、古古呂麻騰比豆作歌

老いぼれの若やぐ胸にせて咲け

時なく朽ちるその沙羅の花

○久村文書 B 付録（蠅子神社縁起）

昔一つ目鬼に憑かれて十二日賀山を彷徨った女が居た。最初の三日は水だけを呑んで腹を膨らまし、次の三日は芹を食って腹を膨らまし、次の三日は伸びた自分の爪を嚙んで腹を膨らまし、次の三日は笹の葉を燃やした煤で腹を膨らませた。南から飛んできた三つ目の黒鳥に追い立てられる儘山の際から伸びた虹を渡った。真ん中まで来た時に日が落ちたので虹は消えた。落ちる鬼憑き女はかろうじて黒鳥の頸をつかむ。嘴を引き裂いて従わせ河べりに下ろさせた。黒鳥の吐いた血が河を紅に染めたので、河を泳いで上った。泳ぐうちに鯉の鱗が鬼憑き女を覆った。上流に釣りする片腕の男が鰍をうつ。女を魚に見間違えたのだ。心臓を差された女は行き絶え絶えに、身も心も魚になって仕舞う前に人の子を産みたいという。見れば慥かに腹ははり裂けそうにも膨れているので、問う、誰の子かと。昔山で犬に強姦されて孕まされた子だという。男が腹を引き裂いたところ子供が百人這い出て来た。子らは皆川原の石陰に隠れた。男は死んだ女を憐れんで山に連れ込み埋めて葬った。その御玉を鎮めんと上に立てたことから百子（波久古）神社、是がなまって蠅子神社になった、と。

以上は茨市立図書館の創設五十周年出版「茨市郷土史資料集成上巻」。蔦川氏文書翻刻資料からの要約。

昔猪獵蚊ノ王（あかりが乃至みかるがノわう、又一説みかる王）という貴人が山傳いに此の地に訪れ、賀山のふもとの窖に身を隠した。東から落ちのびて来たのだという。あやしみ恐れた村人が竹と檜を削った槍に武装し窖を囲んだ。火を投げ入れ焼き打ちし、逃げ出たところを指し殺そうと画策したのだ。ところが窖の内から淡い光が差し芳香が漂い出たのでよほどの貴人に違いないと思い留まる。数週間後猪獵蚊ノ王はふいに窖から出て村に下り、明日の日の暮れたより三日の間、西の丘の上に隠れろと云った（今の神戸あたり）。随うものもあり従わないものもあり。明後日の未明に降り始めた豪雨に崩れた土砂が夜の明けの時には村を埋めた。西の丘の上の者らのみ助かった。又別の時に山の中腹の平地を平らにし三日の内に三日で掘れるだけの穴を掘れと言った。三日後雨が一週間降り続き池になった。その夏は日照りの夏で周囲の村は干からびたがその村だけは池の水で辛うじて凌いだ。遂に池の水の最後の一雫まで枯れた時、半年ぶりの大雨が土を潤した。此の貴人は過去未来見通す聖人に違いないと思い村人は猪獵蚊ノ王に葛の蔦を編んで冠を造り村の王として祀ろうとした。猪獵蚊ノ王曰く、地の上にわたしの治めるべきものなどあろうか、と。賀山に懸かった虹を山の猿の神らが西南の端から、山の犬の神が東北の端から食って消してしまった日に猪獵蚊ノ王は故國に歸ると告げた。二度とここに戻らないつもりかと村人。猪獵蚊ノ王曰く。ならば形見を残しておこう、と。

姿を消したそこに夥しい蠅の子らが繁殖していた（死んだ？ 殺した？）。これを祀って蠅子神社という、と。

是は「備前備中備後史料集」昭和 52 年の発行。典拠資料の記載なし。聖徳太子（の山背王）神話の一種か。

○久村文書 B その二（厳島沙羅樹院にて。）

8月29日。

厳島には午前中には歸る事にして、此の日早朝、兜山という山に登ってみた。

山と言っても日本に多いかの天の香具山風のどうということない低い山である。大陸の人間にとってはあんなものは山じゃないだよと、むかし、子供の比に日本画家だった叔父上に語っていただいたものだ。戦争経験者で（70で癌で死んだ。俺が十二ノ時だったっけかな？）満洲はじめ向こうの方で従軍していたようだ。通信兵だったようだが（是は確証はない。叔母さん...叔父貴の年上女房に、そんな風に聞いた記憶がかすかにある）。叔父貴は謂っていた。日本みたいな島國にいるな、と。人間が小さくなる、と。大陸へ行け。ならば叔父貴が大きな大陸育ちの中國人を纔かでも尊敬しているのかと謂えばさにあらず、徹底的な差別主義者だったが。なかなか面白い心理學症例じゃない？

是は久安さんという人の案内。70代。男。奇麗なスキンヘッドである。なにも残さず禿げあがったのか、わずかに残すいじきたなさを厭うて毎日剃るのか。潔かるべし、と。上原さんというホテルの掃除婦のおばさんに紹介していただいた。

久安翁、山に馴れて木の葉の翳りの細い土道をすたすた下り坂じみて上っていく。見えて傾斜感を錯亂しそうなほどに。山といっても先に書いた、そんな程度の山だからものの十数分（いや、二十分超かな？）で頂上に。久安翁が私の歩調を考慮しないので若干困った（敢えて加味しなかった、のだろう？ 翁の自分の衰え知らずを誇示した？ のか？ これみよがしにもひとりで上っていくのだ。話せば親切で氣のよかつく人）。

山の上から見下ろせば、いやがうえにもいま海拔高いところに居る事を実感させる。この程度の山でも、山は山なのだ。

翁。平家物語研究しておられるん？

私。そうですね。戦記物一般の...

翁。那須与一の歌というのものもあるよ。...と、言って歌ってくれた歌。是は、戦後の作らしい音頭。

四国屋島の小舟の上に

若い女性（訓はによしょう、である）がさしまねく

しっちゃん、ぎっちゃん、さし招く

ほらほらほらほらさし招く（尤も、あとで調べたら此れは栃木県の小田原市のものようだ）

私。ところで、兜埋められたんですか？ ここに。

翁。それは嘘よ。

まさににべもなく久安翁は謂って笑った。

晝前に山陽本線で厳島往きのフェリー埠に行っただが、天氣はすさまじく荒れていた。岡山に居るころはまだしも時に霧雨ていどだったが、すでに電車の中で空は暗黒に墮す。

海に雷さえどよめいていた。

フェリーはでるのかどうか心配だったが、此のくらないなら問題ないという。とは言え、観光客等さすがに少ない。私の外にはあと数組程度である。

浪に揺られて十分程度、海の上に居る時は不安半分興奮半分だったが、地を踏めば揺れない大地が味気なくも感じられる。ホテルでシャワー。雨を洗い流して（というのも變な言い方だが）若干時間休憩の後巖島沙羅樹院に出向くことにした。

最後に（次の日は東京に歸らなければならないので）圓位師とすこしばかり時間を取って話して見たかったのだ。

雷の時々なる中に詣づ。尤も近い。若干又濡れるのが厭わしいだけ。

寺には、見れば、本堂の兩端（寺を左右から守護するかのよう）「タイ・サーラ」の木が花を咲かせていた。雨に濡れる。前に来た時も此のグロテスクな南國風の樹木は目立っただが（その時は奇異に見た。寺に似つかわしくなく）茨に行くまでそれを「沙羅」の木の一つとは知らなかったのだ。知れば納得しむしろ相応しく思う（最初は悪趣味に想えたのだ。坊さんの頭にハイビスカスを飾るにも似て...）。雨の白濁の中に、薄ももいろの花の色は色を失って見える...

桃の夭夭たる

灼灼たりその華

この子ゆき嫁ぐ

その室家に宜ろしからん

桃の夭夭たる

さかんなるその實あり

この子ゆき嫁ぐ

その家室に宜ろしからん

桃の夭夭たる

その葉は蓁蓁たり

この子ゆき嫁ぐ

その家人に宜ろしからん

雨に褪めた花の色にふと、思いだしたのだ。

タイ・サーラ、...佛の沙羅に擬態させられた本當はもっと別の名前を持っていたはずの樹木の影を潜って、圓位がいるはずの本堂奥の離れに行った。

圓位との談話（是は亦、茶室で行ったのである）。

圓。なにか判ったの？

私。なにも（笑う）。

圓。なにもってことはないんじゃないん？

私。いろいろ聞きはして、いろいろ情報ははいったんですけど。

圓。島で噂よ。

私。何が？

圓。あなた。東京から来た国学だか陰陽道だかの先生が眉村の息子のこと嗅ぎ待って一軒一軒聞いて回ってるって。

私。僕のことですか？

圓。あなた以外にいないでしょ（笑う）。

私。まったく、的を得ていない噂で、そもそも、

圓。佐伯の奥さんでもひろめられたんじゃない？

私。與四さんですか？

圓。それは、わかいほうな。その騰毗のおばあさんの方。

私。あの方が？

圓。それでなきや、眉村の旦那のほうか。

私。なんで？

圓。云うとしたら、そのあたり。性格からね。寺なんかにいると、なんでも耳にはいるのよ。目にも、...ところで、ご存じでられる？

私。なにを?...と、尋ねるわたしに圓位はややあって笑みかけ、そして詠じた。

花にそむこゝろのいかでのこりけん

すてはてゝきと思ふ我が身に

いまよりは花みん人につたへおかん

世をのがれつゝやまにすまへと

私。西行？

圓。有名な、花の歌あまたよむ中にある歌ね。あれ、花って人のことでしょ。

私。そうなんですか？

圓。あれは人のことを花といってるのよ。そう思える。...人を見たいなら、その美しさ哀れさ醜さ穢さも、...ね、山に入り見下ろしてみよと。世を捨てて。

私。それは住職の解釋として？

圓。わたしにはそうとしか思えないのね。あの花の歌の一羣はね。

ねがはくは花のしたにて春死なん

その如月のもちづきのころ

そう考えたら是れ、人戀う哥よね...

長閑なれこゝろをさらにつくしつゝ

はなゆゑにこそ春はまちしか

いずれにしても、ここにいると下の...島の人のごことはよくわかる。

とにもかくにも（と、圓位はお茶を——普通のほうじ茶である、を、私の飲み干した湯のみに注いで、謝そうとした私にかぶせるように云った）あれ。どうするの？

私。あれ？

圓。眉村さんのところの轉生談。

私。住職はどうですか？

圓。私？

私。住職だったら、どうします？

圓。誦經してあげようかね？ 坊主だからね。

私。わたしだったら？ 住職が私だったら？

圓。あなただったら？

私。そう。私だったら。

圓。あなたも面倒くさいよね。逃げちゃえば？

私。逃げる？

圓。本筋の話じゃないでしょ。もうすぐ...明日か。歸るんじゃない？ 東京に。

私。ええ。

圓。じゃ、それでいいじゃない？ そのまま放っとけば？

私。なにもしないで？

圓。じゃ、なにをするの？

私。なにも...例えば眞夜羽に月から迎えが来るでもしない限り、やることもできる事もないですね。

圓。じゃ、同じだ。結局は放っとく、と。心も気に掛けなければ忘れた、という。心に気に掛けてればま、それは逃げたようなもの（と圓位は聲にちさく立てて短く笑う）。

私。専門外ですからね。私。あくまでも。そもそも嫌いなんですよ。オカルト。

圓。オカルト？

私。あれ、それで商売するじゃない？ 何にしても。それが嫌。

圓。ま。坊主も同じだけれどもね（...いや、と言いかけた私を圓位は制して）商売は商売よ。わたし、お寺好きじゃないもの。

私。お好きじゃない？

圓。嫌い。

私。じゃ、なんで...

圓。先代の住職に拾ってもらって。こう、蜘蛛の糸というか。所詮生きたくもなかったから望みもなくてね。気が付いたら切れもしなかったのよ。蜘蛛の糸もね。心の死んだ者は糸も切れない。あの、小説の主人公はちゃんと、心、死んでなかったのよ。

私。今のお姿からだど、ちょっと想像できかねますけれども、人に

圓。歴史あり過去あり。そういえばね、こんな轉生談もある...（と、以下はその圓位語る轉生談である）

是は此の宮島の話。

季は春の比か。

此の島に昔陶陶麻という人がいた。タ、タ、マ、...ね。た、た、ま。

陶陶麻に妻がふたりいた。ひとり子供をひとり生んで死んだ。

もうひとり子供を腹にやどして大雨の日に土に呑まれた。

土砂崩れの、ね。

陶陶麻には父がいた。

山に入って樹を切ろうとしたら反対に鐵鎌の刃がさかさまに折れて、こう、額にささって死んだ。鳥がついばみ海に棄てた。

母がいた。海に貝をあさりに行つて、波に流されてどこかへ行つてしまった。

陶陶麻にひとり子が残つた。陶陶禮都豆美と謂う。タ、タ、レ、ツ、ヅ、ミ、ね。たたれつづみ。これには異説があつてね、此れは双子だど。即ち陶陶禮と都豆美ね。ただこの話双子であることの意味がかならずあるわけではないので、いつのまにかふたつがあわさつて一人の子になつちやつたのか、ね。陶陶禮都豆美を男とも言い女という説もあるので、やっぱり双子の男女乃至兄弟というのが元の形なのかもね。

ともかくに随随禮都豆美はうつしく成人した（年は十四、五歳かね？。一説には彼女に戀した男に海の底にある天狗の顔の貝の中なる眞珠を見つけて來いと言ひ、それはたせずに男の溺れ死体が岸にあがったとき彼女は嬉しそうに笑つた、と。又は戀の叶うことなどあるまいと憐んだ男が身の醜さを憎んで（これは随随禮都豆美に比べると、ということなんでしょうね。お似合ひではない、相應しからず、と）せめて轉生ののちには相応しく美しく生まれよう、と、その爲今生には敢えてもっとも汚らしく死なんとね、祈念して自ら肥溜めの中に入って溺れて死んだと。それを聞いて随随禮都豆美曰くそのまま放っておきさえすれば、糞の腐れぬいた後にでも、そこに花の一凛だにさいたろうにと。引き上げられ埋葬された男の墓石にあざけた、と）。

やがて随随禮都豆美は流行り病に卧せて死んでしまう。

七日間もだえ苦しみ見てみかね見ても居られずに随随麻は神社に走り込んで（嚴島神社よ）そして祝詞を上げ祈念した（此の時の祝詞というのは（後の仮託だろうけどね）佐伯さんのところに残ってられるはずよ。後で、聞いてみればいい）。あそこに祀るのは宗像の三女神だからね、三貴神の誕生から始めてね、天照大神と素戔鳴尊の宇氣比になつてね、それから三女神を讃えてね、すくひたまへ、すくひまたへ、すくひたまへ...と。

一説、すくふが巢喰ふと解釈されて鬼に巢食われたという話があるけれどもね。中臣でも吉田でも佐伯でもなんでもない島の百姓が土足でふみこんで適当に上げた祝詞だからね。神様にとどく前に鬼がよこどりしてしまつたんだ、とも。

いずれにしてその随随麻時も忘れて祈念し祈念し迦禰の、... 鶏の聲で正氣付く。

阿遠夜麻邇 奴延波那伎奴
佐怒都登理 岐藝斯波登與牟
爾波都登理 迦禰波那久
宇禮多久母 那久那留登理加

ともこうも家に臥すあの子は生き返つたものかと。病は去つたものかと。

随随麻は家に走りかへつたところ随随禮都豆美は冷たくなつていた。死んでいたのね。随随麻憤つて島を走り回り娘は神にもすてられた。娘はだれも生かさなかつた、と。泣いて騒いで地を吐いた血にそめた... 泣血哀慟、と、ということ、ね。

蜻火之 燎流荒野爾 かげりひの 燎ゆる荒ら野に
白妙之 天領巾隠 白妙の 天領巾隠り

随随麻は随随禮都豆美をその日のうちに埋葬して仕舞う。土に埋め彷徨いあるき、島を三度廻るまでも歩き

打蟬等 念之妹之 うつせみと 思ひし妹が
珠蜻 髣髴谷裳 玉かぎる ほのかにだにも
不見思者 見えなく思へば

と、ということなんじゃない？ とにかも、家に泣きながらに返つてみればそこには随随禮都豆美がとさかを立てて憤つておつたと。おとうさんひどいじゃないか、とね。

あなたは私を殺す氣でしたか？

なんと？

あなたは私に土をかけ、生き埋めに殺そうとしていられた。なんというあわれなものか。親に土に弑されかけようとは...

随随禮都豆美は生き返ってたわけ。

和何許許呂 宇良須能登理叙

伊麻許曾婆 和杼理邇阿良米

能知波 那杼理爾阿良牟遠

伊能知波 那志勢多麻比曾

伊斯多布夜

随随麻は、そりゃ、喜ぶよね。だから泥だらけの随随禮都豆美をあらってやるの。肌剥いて。そうしたら土の腐った匂いの中から白い玉なす肌が香りたつたと...女なのかな？尤も、男でいけないこともないかな。

阿和由岐能 和加夜流牟泥遠

ところが、一週間たつと卑賤の島人にも拘わらずぬけるようにも白かった肌が寧ろ青みていよいよ白くなる...

どうしたのか？ また病にでも憑かれたか？

そんなことはない、いたって平気だと。

そうするうち蠅が群れなし随随禮都豆美の周囲を舞う。上下四維埋め尽くすほどに、ね。これはどうしたことか？

蠅が私を好むだけのこと。蠅の都合を知ったことか、と。

更に日が立てば腐った肉の匂いがする。

これはいかに？

父よ、花の香をよしとし死穢の匂いを悪しきとす、これもただ心のありよう、仮初の心惑いぞと。

臆ては蛆らが随随禮都豆美の肌に夥しくも踊る。これなんとしたことか？

父よ、なぜなら私の肉は已に死んでいるからだと。

お前は已に此の世の者ではなかったか？

父よ、此の世にこの世のあなたの眼の前に此処にあるではないかと。

終に随随禮都豆美、腐れて身を立てる事も出来なくなった。

随随麻云、お前は死んだものか、生き返ったものか？

随随禮都豆美答えて云、死ぬも生きるもなにの区別のあるうか？

随随麻云、お前はいまふたたび死んでしまうのか？

随随禮都豆美答えて云、仮初のものの死ねばまことそれ所詮仮初の死、ならばそれまことの死のまことであろうものか？

圓位は云った。「うつつ、というでしょ？」

「現実？」

「うつつ。あれ、宇都は稀であるとか奇しいとか、ね。うつなる御子生まれけり、とかね。賛美と警戒、両方あるね。又動詞のうつで打つ、討つ、うつすで寫す、移す、映す。うちなびく、うちのぼる、とかの頭につく宇都、宇知、ね。強調句ね。強調句だから実体のないものでしょう？ なびく、うちなびく。なびくは言葉の実態。うちは実態に副うだけの音。宇都須はいうまでもなく假の...池が月を宇都須、しかれど水面に月はまことに浮かべりや？ 打つ、討つは今の現状を變える行爲じゃない？ 敵は生きて目の前にある、それを討つ。そこにあなたが微笑んでいる。その頬を、打った、と。稀のうつはもちろん

普通でないもの、つまり、現実と呼ばれるものはなにも慥かなものではなくて、それ自体恠しいものだと、そう云ってる気がしない？」

「それはこじつけですね。こじつけた語釋。」

いずれにせよ随随禮都豆美はそのまま腐ってやがて聲も上げがてにする。

故、随随麻は聞いた。

お前は死ぬのか？

死んで、これからいづこへ行くや？

答えて曰く、

消えるだけでも？

ここにこうして目覺めていようものを。

遠ざかるとでも？

ここに歩けもせずに腐るものを。

随随禮都豆美は臆て聲もあげなくった。その身に蟲が無数に蠢くばかり、と。

それでどうなったんですか？ と私が云えば、圓位曰く、おわり。

私。終り？

圓位。これで終わり。

私。結末、無いんですね。

圓位。あるじゃない。

私。結末？

圓位。随随禮都豆美は動けなくなった、と。それ以上に、終わりようが、...終われようがないじゃない？

私。随随麻は？

圓位。普通に、...語るほどの何があるでもなくに、生きて死んだかしたんじゃない？ 話はだれも傳えなかった。

私。出典はなんですか？ その話の。

圓位。ないよ。

私。じゃ、でたらめ？

圓位。口傳。これ、この島に最初來た時に...都多さんという人がいて、女の...

葛之のはうて

中谷にうつる

この葉萋萋たり

黄鳥ゆき飛んで

灌木に集る

それ鳴いて啾啾たり

子だくさんの方でね。その人に語っていただいたの。昔語りにね。...あれ、昭和の50年くらいかな？

私。文書がある譯じゃなく？

圓位。だって、こういうの、口傳を書き残して文書でしょ？ だったら抑々文書に口傳以上の正当性も実証性もなはない。...じゃない？ 口から直に聞いたんだったら、それこそ誰かの聞き覺えた書き記し文より正しくないの？ じゃない？

と言って、圓位は笑った。彼は単に会話を楽しんでいるのだろう？

私。それ、だいたいいつくらいの話なんですか？ 東で壬申の乱の起った比にとか、そんなの謂わないでくださいね（私は笑った）。

圓位。江戸時代の後半じゃない？

私。根拠は？

圓位。（口真似して）これはな、わたしのおじいちゃんのおじいちゃんのおじいちゃんが見た話し、と。そう云ってられたからね。

ちなみに随々麻というの人は違う伝承があってね、

私。どんな？ 蓬萊山にでも上ります？（これは悪意のある冗談ではない。会話は此の時は非常に居心地よいものになっていたの、わたしは心を赦した子供が戯れ言を口走るように、そんなふうにしたのだ...）

圓位。隠岐の島から来たのよ。山陰のね。中国山地の向こう。八雲立つ先の海の真ん中。あそこ、後鳥羽院っておられたでしょう？

私。承久の亂の？ 増鏡の。

圓位。新古今のね。

みよしのは山もかすみてしらゆきの
ふりにしさとに
春はきにけり

是は京極良經。

ほのほのとはるこそゝらにきにけらし
あまのかく山
かすみたなひく

此れ、後鳥羽院。

山ふかみ春ともしらぬ松のとに
たえたえかゝる
ゆきのたまみつ

式子内親王。次は...誰だっけね？

かきくらしなをふるさとのゆきのうちに
あところ見えね
春はきにけり

次は俊成。

けふといへはもろこしまてもゆく春を
みやこにのみと
おもひけるかな

隠岐に流されるでしょう？ その、所謂承久の亂ののちに。

我こそは新島守よおきの海の
あらし浪風
心してふけ

そこで、...島の賤の女に比那岐という女がいて、それを憐れみ御寵を賜われた...というか、もう御位にいないからね。ただの賤の流れ者か？ じゃあ、普通に島の女に手出し

よった、と（と圓位は笑った）。

籠毛與 美籠母乳 布久思毛與 美夫君志持 此岳爾 菜採須兒

お前は誰ぞや？

父はおるのか？ 母はおるのか？

朕はのう、京から渡った草枕、今は此の島の島守ぞ

うたかたに見つ隠岐の島はおしなべて、しきなべて、我こそ坐せ我こそをれ我こそ隠岐の島守ぞ、とでも？

その、末裔。後鳥羽天皇の庶流。... だった、とね。

私。もちろん、そういう方がいても可笑しくはない。失脚のときも、まだ四十前... 後、後醍醐天皇のような方もいらっしゃいますかね。庶子のひとりふたりいてもおかしくはない... もっとも、庶民などに興をそそられることでもあれば、ですが。

圓位。麻羅麻という人がいるの。随随麻の父親。本当は、たぶん、その麻羅麻というひとの事跡の語り伝えがあって、その一部、外傳的な周縁挿話のひとつなのよ。随随禮都豆美の話はね。戦争で... 太平洋戦争ね。いろいろ途絶えたものが多いんじゃない？

私。なんで？

圓位。だって、まがりなりにも皇統にかかわるものだから。憚りが多かったんじゃない？ 麻羅麻というのは伊夫伎の木というのでつくった舟で单身島に乗り込んで住み着いたひとで。それが言いふらして回ったの。俺はかの逆族北條氏らに隠岐に流されたる後鳥羽の天皇の末なるぞとね。島をまわして荒らして回った山賊まがいの男。

片方の眼の黒目が真っ赤だったとか。男を好き放題殺して皮を剥ぎ、子供を好き放題殺して貪り、女を好き放題に姦して廻って、ひところ島の者らみなはらからになりかけたほどだったと。

私。その人はどうなったんですか？

圓位。山の上に誘い出すのよ。島に最後に残った未だに手のついてない女... 少女ね。はじめて女の体になって間の無い... かつ、賤の... ことさらに賤の賤のと貴族でもない島民自身がそういうんだから、そういう身の上なんでしょう。江戸時代だからね。

私。所謂被差別部落の？

圓位。その子の顔を磐で打って見栄え良くし、絹衣まとわせ梅檀の香を焚きつけて、とね。山の石清水で四日の日肌を拭わせ、女みんなで化粧させ、とね。山に舞い舞い誘い出すのよ。山の上に穴掘ってあって。賤の娘もろともに落っこちちゃう。ここぞと島民みんな竹槍つきさす。落ちたものどち娘も刺し殺されるわね。ところが麻羅麻は...

私。そもそも、その人は日本人なんですか？

圓位。麻羅麻？

私。そう。

圓位。漢文佛典にでも出てきそうな名前ね。知らない。それは。取り敢えず、海から来た...。ともかくも、麻羅麻だけはまだ死んでいなかったどころか竹槍に咬みついてくる始末なので、手当たり次第娘の屍ごと縄でがんじがらめにして船にのせ沖に放ったと。娘の死んだ血も麻羅麻の生きた血も海に混ざり合っただけ、赤く染まった海に和邇が... 鮫でしょ？

何十匹も来て。それぞれに何十いくつにも麻羅麻を喰いちぎって海の底に消えていった、と。

私。只管、残酷な話ですね。人権論者が見たら逆上するような。

圓位。まあ、伝承。ところで、麻羅麻、どんな人だった思う？

私。容貌？

圓位。どう？

私。容貌魁偉、身長一丈とかそういうのですか？

圓位。逆。華奢な女も心配して貢ぎはじめるくらい華奢な美青年なの。それで島の人みんな、そうかご落胤かと納得するのね。あれは宮こに縁の人に違いないとね。女たちを魅了したんじゃない？ 歌がある…

麻羅麻あな やあ

麻羅麻あな やあ

はねとべえぞやあ はね麻羅とぶぞ

めもめも乗りやあや めも麻羅とぶぞ

麻羅麻乘らりやあや 麻羅麻乘らりやあ

麻羅とぶぞ やあ

私。これもそのおばあさんに？

圓位。また違う人。名前は…高梨さん…下のは忘れたな…調べればわかるけどね。みんな、こちらでお経あげたひとだから。

圓位の話は以上。あとは、雑談である。轉生つながりで太平記の如意王の話など。これはこっちが戦記物の研究者と知っての戯れ語りに過ぎない。

最後にせっかくだから周南から引いておこう。

關關たる雉鳩は

河の洲に在り

窈窕たる淑女は

君子のよき迷（たぐ）ひ

寺を出て山道を下り、海岸に出たときは丁度一日中降り続く雨の小休止した十数分の間だった。故、あれは白鷺というのだろうか？ 遠瀬の海岸に三羽ばかりたたずんで、羽をのばしていたのである。

鷗か、そのうえには違う鳥が数羽鳴き騒いでいた記憶がある…それで、なんとなく思い出されたのである。

○久村文書 B その二（佐伯。離島。眞夜羽）

（佐伯宅にて）

巖島沙羅樹院を辭して向かったのは佐伯宅（気の進まない訪問。茨での話の中で彼等がなかなか信賴できかねる人物に想えて来たから）。歸ったら伺いますと謂って仕舞ったので。故、訪問す。

本宅の応接間。佐伯騰毗は不在（当主は？…遊びにいつてるのよ（あそびにいっしょうてなは佐伯母）…雨の中を？（是は私）…関係ないですよ（かもうてんもんかあ）變わり者だから（いちげえじゃからな以上は佐伯母））。

佐伯祖母（それがこの家の乃至彼女の個人的な作法なのか、佐伯母は必ず佐伯祖母が口を開く迄黙止しつづける。此の日はすぐに佐伯祖母が口を開いたので、いつものいやな沈黙はなかった）。どうでした（どがんでしたん？）

私。いや。おおよそ話は聞いて...それでも、あたらしい事はなにも聞いてませんよ...たぶん、もうご存じの。

佐伯祖母。わたしらも先方さんが...ほら、神主の家でしょう？

やっぱり、心に不安があると、縋りたくなるんじゃない？ あちらさん、身よりもないからこちらに縋ってこられることが多い。

ただ、神道と謂うのは、變な咒術陰術魔術とはちがってね。その、心のありようみたいな話だからね。基本的にはね。

佐伯母。なにも、なかった（なあんもなかったん）？

私（佐伯母に）。ええ。基本的には。

佐伯母。基本的には？

私。いや。何もないですよ。

佐伯母。でも（しゃあて）基本的にはって（きほんてきにやあて）なんか、いま、いやらしい言い方したよ（やらしいいいーかたあしたでえ）あなた（あんたも）。

佐伯母。なんかあったの？

私。夢見悪かっただけです。

佐伯祖母。夢？

佐伯母。云ってみて（いゆうてみられえ...と、彼女はひとり問い詰めるように云うのだった）。

故、夢の話をしたのだが、うまく話せなかった。夢の話は大抵そう。うまく傳らない。いづれにせよ、今、纏めれば以下の如

夢なので、いつも夢は途中から（已に）始まっている（...いつでもそうだ。夢に開始の一瞬は存在しないのである）喰う、しゃくしゃくいう音が聞こえ続けている。

周囲の全部に、拗音に熟れたようなべたついたクセのある音（...いかにも判りにくい）。

見るともなく見れば（——というか、目が何処にあるともなくすべてをすでに見續けていたのだが）夥しい小さな円形の白い粒立ちがさかんに犬の生々しい屍を喰い漁っているのだった。是は私の心の悔恨の形をかえた表現だと解釋されるに違いないと思ったら（そしてその結果を恥じたら）、よくよくみれば円形の泡立ちは匂っていることに氣附いた（そもそも最初から匂っていたのだ）。

匂い。洗っていない犬の毛の匂い。喰えば同化するのかいよいよ匂いが濃くなるのである。

わたしは歌う。

迦美古呂斯 迦美古呂志

迦美都久迦良那 迦美古呂斯

迦美都久母能那 迦美古呂斯

迦美古呂志 彌豆美波迦牟那

迦美古呂志 蔽牟美波迦牟那

迦美古呂志夜那 迦美古呂志會那

これは犬の屍そのものをあざ笑ったのである。ここで私は思い出すのだった。そもそも、わたしが犬の言語について理解できるようになったのは樹木の悉くが解けて流れたときが始まりだったことを。

流れ出た樹木の命を（その餘りにも巨大な地球規模の損害を）思って、わたしは悲しみにもう持て答えられないと思いながら、そして見つめ続けるのだった。

何を？

見つめ続けるのだった。

何を...と。その夢の中でいま俺は夢を見ているらしいぞと思いながらに問い続けたのである。（是は、今すこしでも夢の感じを克明に写そうとして、若干修正して書いているので、佐伯二人に話して聞かせたままではない。もっと、白けた味気ない話しかできなかった。尤も、いまの之も他人が見たら面白くもなく、実感もなにもないだろうが。あくまで、非常に生々しく——皮膚感覚として。...そういう夢だったのである）

佐伯母。それ、いつ見たの（いつみられたん）？

私。昨日...ま、こっちに歸る最後の日ですね。

佐伯母。で、あなたはどう思うの（どうおもわれるん）？

私。僕?...なにを？

佐伯母。何を暗示してると？

私。暗示？

佐伯母。だって、氣になってたんでしょ？

私。いや、別に氣にもしてませんよ。

佐伯母。だっていま、話されたじゃない？ 赤の他人のわたしたちに。あなた、くわしく話したじゃない？

いずれにせよ、その後今回の滞在に世話になった禮を謂って、そして佐伯宅を辭した。

（夢）

ホテルで泊まった、その日の夢。

佐伯騰毗（今日の騰毗はいやがうえにもちいさく、いつにもましてちいさく、このままじゃ俺の掌にさえ乗ってしまうよと思ったのだった）が海岸で謂う（巖島の海岸だろう。遠浅である。遠浅すぎて海の浪さえ見得ないのだ）。

騰毗云、（振り返って）比留マをどりをな。比留ハの君の爲にをどうたろう。

□□□の爲にをどうたろう。

□□□の爲にをどうたろう。

（□三字はどうして聞き取れないのである。どうせ比留米と謂ってるのだろう？ そう、思い乍ら夢の中にわたしは呆れているのだ...）その歌曰く（をどる、即ち踊ると云ったが、直立して謡うだけなのである）

阿阿阿阿

阿阿伊阿

阿阿佐阿

左沙阿阿能於久宇宇麻阿阿阿阿

比伊伊能於

比伊伊能於於於久麻阿阿迦波
比伊能久麻迦波邇伊伊伊伊彌
邇伊伊伊彌阿
古於於於麻阿
古於於於麻阿斗米
古麻斗米弓衣衣衣彌
志伊伊婆阿志伊伊婆志
彌伊豆宇宇迦阿阿蔽
迦阿阿蔽
迦阿阿祁衣
迦阿阿祁衣乎於於
迦祁陀邇乎
彌伊牟ンンン
ンンンン
ンンン
ン波阿...

知ってる。珍しい哥ではない。古今集の神游哥のひるめのうたである。

わたしは聞きながら、お前はさっき鷗を飲んだろう？ 頭から飲んだのだろうか？ と。彼をあざ笑ひ（そのあざ笑ひ自分を羞じ乍ら）思いつづけるのだ（空は白濁。此の處の雨天の印象だろう。どこを見ても日の光の影だにもないのである）。

（埠で。眞夜羽と）

島を出るのは早朝だった。眉村たち親子三人が見送りに来るとのことだった（夜、電話をかけて帰ることを傳たのだ。茨訪問についてはなにも聞かれなかった。あるいは、額田か高長が已に電話連絡したのではないか）。ホテルのロビーに出たらソファで三人待っていた。レセプションの従業員と雑談しながら（知り合いなのだろう。もっとも、島案内も請けがう土産物屋の亭主であって、知らないほうが可笑しい）。

眉村和。先生、もう歸られるんですね。

私。でも一週間以上いましたからね。

和。宮島どうでした？

私。いや、すごくおもしろかった。

和。なにもないところで。しょせんこんな神社しかないところだから（と、私たちは埠に向かう。運轉は和哉。車はマツダの乗用車だった。広島だから、ということなのか。尤も特に此の車が目立ったくらいで、一般的に多いのはトヨタだのなんだのの方である。業務用のトラック等は100%マツダだ）。

埠につき、和哉が深雪をこづく。深雪思い出し（本當は忘れてなどいないのだ。人見知り?...わたしに何故か気兼ねしてたのである）私に土産を手渡す。

和。これ、ぼくらの店の土産物なんです（紙袋のなかには箱入りの土産、都合三箱である）。

私。いえ、結構です。こんな...これ、何だろう？

和。牡蠣のオイル漬け。土産なんです。東京で、東京のみなさんにも...と和哉笑う（こ

うした一連の雑談の間、かの眞夜羽はときに深雪に甘えてみたり鼻歌を歌ったり、要するに気にならないありふれた子供、だっただけ過ぎない...）。

私が禮を謂って、何かあったら連絡ください、こちらもし何かあったら連絡します、と（和とはすでに Line でつながっていた）。かくて、それじゃ、と埠の改札を潜ろうとしたときに、いきなり眞夜羽が云った。

眞夜羽。先生。

私。...ん？

眞夜羽。また会うよ。ぼくら、また、きっと逢うよ。

私は聲を立てて笑った。云う、（和哉を見ながら）「瀧の下でって？（豊饒の海のあれである。もっとも、和哉は何をいっているのか判らなかつたろう）」

眞夜羽。違うよ。瀧なんかいないよ。次、よろしくね。

私。こちらこそ。先生、能無しだから何の役にも立たないけどね（と笑い、其の時に眞夜羽は眞顔で）

眞夜羽。役に立たないけど（深雪。こら。もう...この子...同じ時に和哉。すみません（是は私に）こら眞夜（是は眞夜羽に））でも、ぼくつかつたら（儘）よろしくね。

私。つかまるの？（笑う）

眞夜羽。ぼくの気持ち、わかってね。

眞夜羽はそう云って、そして父親の顔を見上げた。

フェリー十数分。廿日市の驛から數時間、それから新幹線四時間、電車で渋谷駅まで。青山のモデルナに歸ったの時已に夕方の五時を過ぎていた。曇りこそすれ広島に雨はなかったが、東京に雨はふつたようだ。濡れた宮益坂を私は土産を抱えて上つたのだった。

文書 3

文書 3

記。被 1 3 繩。虚。

此の間逆短 1 ケの上ノ。ふるふるとふるふるとふるふると由羅良

奥書

以上は黎マに依って 2020.12.02-23. に書かれたものの第一部

ホームページ

<https://senolema.amebaownd.com/>

多香鳥-1

著 黎マ

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
